

---

# ファイナル・ディスタンス DISC1

群青 坊哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファイナル・ディスタンス DISC1

### 【Nコード】

N0569D

### 【作者名】

群青 坊哉

### 【あらすじ】

アルカナと呼ばれる個性豊かな精霊が存在する世界。宿命を背負う少年と少女が出会い旅するファンタジー第一弾。

\*

気がつけば、何も無い荒地の真ん中に一人。ただ立っていた。自分ひとりだけが、立っていた。

そこで気づけていたなら、どんなによかったのだろう。

どんなにか、違っていたことだろう。

結局、俺は気づけずに、絶望に震えていたのだけれど。

小さくて、健気な。

闇空に流れる、一筋の光のような。

足元に咲いた、一輪の救いの存在に。

「……残っていた、一番古いモノだ」

少年を見下ろしている、俺達。

「……………」

隣で笑う金色の男が、……どこか悲しそうに見ている。

「さて、行くか」

「……………？ どこへ」

「たくさん、たくさんある」

「……………そんなにいっぱいあるのか」

「そうだ」

男はそういうと、俺の腕を掴んで上昇した。

「おまえは、たくさんの景色を、出来事を、人間を。見なくてはい

けない」

「……」

「おまえを、取り戻す為に」

## 1・クレイドウル国へ

「……………あそこか」

深い森を抜けた所で、ようやく俺は足を止めた。

まず、目に付いたのは塀に囲われた、大きな白い城。

さらにその城をグルリと囲むようにして造られた、眼下に広がる城下街。丘の上から遠目に見ても、明るくのどかな雰囲気醸し出している。

……………自分には、似つかわしくない気がする。

『おいエビル』

呼ばれて振り返ると、半透明の男が俺を見下ろしていた。

『半透明』という言葉に相違はない。実際男の後ろの景色が透けているのだから。

「……………なんだよ」

俺は声を潜めつつ、相手を窺う。

『あそこか、目的地は。……………また随分と田舎臭そうな街だが』

「まあ、俺とおまえは場違いだろう事は頷いてやるけどな。つか。言っとくけど、こっから先は話しかけるなよ？ 一人で喋ってるようじゃ、あからさまに『怪しい人』だぜ……………門を通してくれないとも限らない」

『わーってるよそん位。それでなくても、これまで苦労してきたんだからな』

「苦労させられたのはどっちだよ……………ったく」

『っていつかさ。おまえ。黙ってれば今のままでも充分「怪しい人」だつて。なんだよその格好。どうにかなんねーの?』

……ジト目の主の、言いたい事は解る。

今の俺は、どっからどう見たって浮浪者の類だ。

ボサボサ黒頭のカツラ。瓶底メガネ。トドメに古臭いコートなんてのを羽織ってる。

こんなの、どっからどうみたって『怪しい人』だ。

……でも弁解はしたい。

好きでこんな格好してるんじゃないやい。

『……ま、これ以上からかうと身動きとれなくなりそうだからな。やめといてやらあ』

「えらそうに。おまえはいいよな……」

透明で。

小声を無視したのか、本当に聞き取れなかったのか。奴は完全に黙りこくってしまった。

『……』

「なんだよ? 急に静かになりやがって」

『……アレ。なんなんだろうな?』

「ああ?」

振り返れば、奴は顎で明後日の方向を指している。

「……」

塔だ。

街の北東に位置している、高い、高い 城にも負けないような

高さと存在感を持つ古い塔が、木々から一本によきつと空に伸びていた。

「本当だ。なんなんだろ。……あの国のものだよな？」

『ちよつと異様だよな。森の中にポツンと突っ立った塔なんぞ』

「曰く付きなのは間違いないだろ。魔女なんか住み着いてそうだな」

『魔女なあ……』

「なんだよ。心当たりでもあんのか？」

『いや……苦手な奴にソレに近い雰囲気の方が居るんだが……』

めずらしい。コイツがこんな渋い顔をするなんて。

よっぽどすごい性格してるのだろう。その『魔女』サンとやらは。

近づいてきたとはいえ、まだまだ街から外れた街道。人が通らないのをいい事に無駄口を叩きながら歩く。

ふと、会話が途切れた。

小鳥の囀る声。揺れる木々の声。風の通う声。髪を攫い、高い空へと舞い上がってゆく。

短い沈黙を打ち破ったのは、当然ながら奴の方だ。

『……居るかな』

「さあ。ま、いなかったら他所にいくだけだろ」

そんなこんなで、もう数年世界中を二人で尋ねて廻っている訳であるが、今さら愚痴を零した所で何も変わらない。

「クレイドウル国、か……」

最後に聞いた情報では、その男はこの国に立ち寄る事をもらしていたそう。

何の目的で転々と所在を変えているのかはわからないが、そんなものは関係ない。自分は会えばいいだけの話なのだ。

第一、顔も知らない。

解っているのは、そいつが聖職者だという事と、名前だけだ。

緑の大地。ヨウイス大陸にある一国、クレイドウル国。

森に囲まれた城下街。

圧倒される程大きな門は 盛大に賑わっていた。

何故か門の前の広場の両脇にたくさん商人達が屋台を並べており、その間を沢山の人が行き交っている。

立派な門の下。両脇に突っ立っている二人の門番が無駄口叩いていた。俺という、爆裂怪しい人間がウロウロしてたって、特にこちらを見向きもしない。

なんつつか……「警戒」という二文字が存在していないんじゃないかないかと疑いたくなるような光景。呆気に取られる程に活気溢れた、開けっぴろげな街……という印象を受けた。

「あの」

向かって右側に立っていた、中肉中背の門番に声をかける。

「ヨウイス大陸の聖堂は、この街にあるんですよね？」

「ああ、ヨウイス聖堂ね。大通りを真っ直ぐ歩いていくと、クレイドウル城がある。聖堂はその裏に立っているから城壁をぐるりと回るといい」

「ありがとう」

礼を言えば、門番、上から下まで俺の格好を眺めて首を捻ねりつ

っ、

「しかしおまえ……聖堂に興味があるのか……。旅人なのはわかるが……一人旅か？ 見たところ修行僧ではないようだが……」

これはよく問われる質問で、放たれる訝しげな視線にはもう慣れっこだった。

「まあ、そんなとこっス」

苦笑しつつ頭を下げ、門の下を歩く。

「あ、ちよっと！」

「……………？」

振り返ると先程の門番が追っかけてきていた。手にはなにやら丸めて筒状にした紙を持っている。

「この娘」

言って門番は手にした紙を俺の目の前で広げて見せた。

そこには、人物画が描かれてあった。

肩にかかる黒い髪。大きな黒い瞳……まだ歳若い女の子だ。

「この子が何か？」

「いや、街に入る人全員に配ってるんだけどね。もし見つけたら教えて欲しいんだ。なんでも、国から褒美が出るらしいよ」

「って、こんな若いのに、賞金首！？」

紙を受け取るとマジマジと絵を見直した。

……見れば見るほど整った……なんとというか、かわいい顔をしている。

「どんな悪さをしたんですか？　この子。とてもそんなワルイコトしてる風には見えない……」

「……いや、確かに、決して悪い娘なんかじゃないんだが……いつものことなんだ」

歯切れ悪くそう答えただけで、門番は苦笑しながら所定の位置に戻っていった。

不思議に思っただけしばらくその背を眺めていたが、

「……まあ、いろいろあるわな」

湧き出る好奇心と一緒に丸めた紙を背負っていたリュックの隙間に突っ込んだ。

## 2・出会い

門から少し歩くと、すぐ目の前に、幅の広い大きな階段が聳え立っていた。

上がっていくと、噴水を中心とした小さな広場に着く。

はしゃいで走り回る二人の子供。白い鳩が数羽飛び立ち、空へ溶けてゆく。見上げた上空は、目に痛い程の鮮やかな青。悠然と白い雲が流れ行く。

家々の煙突から白い煙が棚引く。

走っていた子供の内一人が転び、持っていた赤い風船がゆっくりと広大な青に昇り

なんとも、ゆったりした時間が流れていた。

……最初眺めた時も、そう思ったけど。

「のどかだなあ……」

穏やかな気候も手伝って、緊張感が解けてしまう。

争い事とは大よそ無縁の地だ。

……なんだか、不思議な懐かしささえ感じる。

願わくば何泊か泊まって長旅の疲れを癒したい所だが……、

「……だめだ、だめだめ」

こんな所に、自分が滞在するなんてとんでもない。

撒いては来たが、この大陸に足を運んだ時点で俺の目的地はおおよそ見当がついている事だろう。

争いや殺気なんて、こんな平和の象徴みたいな地に持ち込んではいけない。たとえこっちにその意思がなくなっただって成り行き上だつて。それは大罪のように思える。

広場を真っ直ぐに突き進んで、大通りに出た。  
旅人用の店が両脇に順序よく並んでいる。その中に道具屋の看板を捉えると、少し背中のリュックが気になった。

「……ちよつと補充しとくか」

呟いて、向かって左手に位置した道具屋へ方向転換。軒先に下げたある古びた看板がキィキィと鳴る店。その扉のノブへ手を伸ばすと、

「……それじゃ、ありがとーおばさん！」

カランと頭に響く鈴の音と、女の子の声。

「うわー！」

「きゃあー！」

中から出てきた女の子……と思わしき人間とぶつかってしまった。

「……っ」

「うたあーい……っ」

女の子は小さく、背は俺の胸までしかない。俺は二、三步後ろによろけただけだったが、思い切り激突した女の子が踏みとどまれる訳がなく。目を開ければその場に見事に尻餅をついていた。

「わるい、大丈夫か？」

「あらあら大丈夫かい？ リキュちゃん」

店の中から慌てて駆け寄る太ったおばさん。

俺が手を差し出すよりも早く、後ろから女の子の両脇に太い腕を伸ばし、抱え挙げてしまった。

「うん、大丈夫だよ。ありがとうおばさん」

ゆったりした白いパンツを叩きながら、その子はなんともかわいらしい声で礼を言う。

深くフードを被っていてその表情は見えないが、恐らく笑顔だ。怪我はないようで、ほっと息をついた。

と。溜息が聞こえたのか。女の子はくるりと俺に向き直ると、

「えと。すみませんでした。突然飛び出したりして」

と、勢い良く頭を下げた。

なんだか仕種が……不自然に思える程元気だ。

「いや、こっちこそ。怪我がないみたいで安心した……」

「ではわたし、急ぎますのでこれにて！」

「……は？」

よほど急いでいたのか。俺の言葉を遮って、女の子は横をすり抜けていく。

視界の脇を、やけにゆっくりと流れる長い黒髪。

意識を囚われてしまう。

「……ねえ？」

振り返れば、急いでいたはずの少女は、しかし未だ俺の後ろ道の真ん中で、ちょこんと立っていた。

彼女は俺に話しかけているようだった。

口元は愉し気に笑っている。

「なんだよ？」

「ねえ。なんで、隠してるの？」

「……………え？」

一瞬何を言われたのかわからなくて……………っていつか、脳の処理速度が追いつかなくて、目を丸くする。

俺の様子がおかしかったのか、くすくすと鈴の音のような笑い声を上げる少女。

「キレイなのに」

……………ギクつとした。

「じゃあね！ おばさん、また明日！」

「あいよ！ 気をつけるんだよ〜リキユちゃん！」

おばさんが大きく手を振る。その大声で目が覚めた。

あんまり突然のことで一瞬、ボーっとしていたらしい。

「アンタも災難だったねえ……………って、ここらじゃ見ない顔だね。旅人かい？」

「あ、はあ……………今この街に着いて……………って。あの子、大丈夫なんですか？ あの様子じゃあまた……………」

ぶつかるなり、すっ転ぶなり、なんだか危なっかしい感じがぶんぶん……………、

「いつものことだからねえ。気にしないでおくれ。悪い娘なんかじ

「やあ決していないから」

言い終える前に俺の顔色を読み取ったのか、苦笑するおばさん。

……はて。

今のフリーズ。どっかで聞いた気がするんだが。

首をひねりつつ店内に入り、品物を眺めていると、

「それで？ この街に足を運んだからには当然、寄って行くんだろ  
う？」

カウンター席から、ふいに声をかけられた。

「え？」

「え？ って……なに。知らずに立ち寄ったのかい？」

「なにがですか？」

「じゃあ、運がいいね。明日はクレイドウル国王の誕生祭なんだよ。毎年この日にゃ特別にお城を解放して、城内を自由に見学できるよ  
うにしてくれるのさ」

「へえ……それか。どつりで屋台が並んだり、異様に人の行き  
来が多いと思った」

「時間があれば行って見るといいよ。せっかくのイベントだからね」

「ああ、そうする。ありがとう」

カウンターに、手に取った品物分のお金を置いて……ふと、あの  
一言が気になった。

「……ねえ、おばさん」

「なんだい？」

「俺。変かな？」

問われて、その意図がわからないのか、目をぱちくりとさせるおばさん。

「格好とか」

付け加えると「ああ」と声を上げて両手を叩いた後、おばさんは改めて俺の姿を上から下まで眺めた。

「……まあ、変じゃないといえば嘘になるがね。そのボサボサの黒い髪はいつそ剃りあげてしまった方がおばさん好みだよ」

……どうやら、俺に落ち度はないようだ。

苦笑を返しつつもう一度礼を言っただけ扉を開ける。

入ってくる時と変わらない、のどかな風景が視界に飛び込んできた。

……変わらないからこそ、蘇ったのか。

ぶつかった拍子にフードから零れたのだろう。流れる、艶やかな黒。

鼻先で香るほのかな甘さ。

フードで隠れて顔が見えなかったせいかな、それだけが際立って余計に印象深い。

キレイなのに

「……………なんでバレたんだろ」

『なんだ？ 買い忘れでもあったか？』

独り言が聞き取れなかったか、間髪いれずに後ろで奴の訝しげな声上がる。

「……別に」

一言だけボソツと吐いてから、振り切るように大股で歩を進めた。

### 3・大男

大通りを進むと、これまた大きな……立派な門に突き当たった。奥には巨大な白の先端がいくつも突き出ている。

明日には解放されるといふ、クレイドウル城だ。遠目に見ても大きかったのだが、間近で見ればさらに圧倒される。一体どういう人物が住んでいるのだろう。

こののどかな国を統治している人物なのだ。よほど大らかな人に違いない。

そんな事を考えながら、どこまでも続く高い塀の周回を歩いてゆく。

ゆるやかな……この塀が円の形をしている事も把握出来ない程ゆるやかな曲線。

聖堂はこの城の後ろに建っているという門番情報。

……これは……結構。

「かかりそうだな……」

なんとも大きな城だ。

すれ違いざまに挨拶してくる、やっぱり暢気そうな街の人間に軽く頭を下げつつ歩みを速める。

そんなやり取りを繰り返して 数時間後。

果たして目的の聖堂にようやく辿り着いた頃には、高い位置にあった太陽は既に沈み、辺りはどっぷりと暮れてしまっていた。

「……幾ら城だからって……田舎で土地があるからって……でかけりゃいいってもんでもないだろ……」

……一体何時間かかったのか。城とつかず離れずの距離を延々と

歩き続けて、『ご立派な城』はもう見慣れてしまった。……というよりも、正直、呆れてしまった。

……決定だ。城に住んでる奴はとんでもない暢気者だ。

大体、誕生日だからって城を開放する奴なんだ。

開けっぴるげの門に、名ばかりの門番。

得体の知れない野郎が、今此処でウロウロしてるつつうのに。

……この調子じゃ、ここの聖堂だってちゃんと機能してるかわからない。……負けず劣らず、よほど平和ボケしてるに違いない。

平和ボケの国に、平和ボケの王に、平和ボケの国民に、平和ボケの天候に、平和ボケの道に……ああ……くそ。こんな国、さっさと出てってやる。

もはや何に対してイライラしているのかもわからなくなった。

…………たく。

疲労から漏れる溜息を吐き捨てて、俺は聖堂の前に立った。

「……いいな？ こっから俺に付いてくんなよ!？」

『了解。つか、危なくなったらすぐ呼べよな』

頷いてみせると、ずっと後ろを付いてきていた奴の気配が瞬時に消えた。

「……………さて」

改めて、ヨウイス聖堂と名の付いた、えらくシンプルな造りの白い建物を眺める。

この十年間、あちこち世界を捜し歩いてきたが、こうして聖堂に正面から入るのは初めての事だった。

幾許の緊張を、先程の訳のわからないイライラで包んで空に投げ捨てる。

……まあ、捕まったら捕まっただで、それまでだ。

そもそも自分は今この瞬間に処刑されたって、愚痴の一つや恨み言、文句を吐く事も許されない人生を送ってきたのだ。構うもんか。……ただ。

ただ、探してる人物に会う事が出来ないとなると、親父に顔向けが出来なくなる。

それだけは……正直、勘弁してほしかった。

もはや自分の中の望みはそれだけで。それだけのために、今日まで生き延びてきた。

だからこそ。それよりなによりも、恐れている事がある。

このまま何事も起こらずに……、

「……って、いつまでばーっと突っ立ってる気だよ俺」

かすかに過ぎった感情を振り払うように、出来る限りの大股でずかずかと庭園を抜ける。

そのままの勢いで、聖堂の重い扉をばたんと開けた。

「すみません！ どなたかみえませんか！」

静寂に包まれた、どことなく重い空気を打ち破るように声を荒げる。

待つ事、数秒。

奥からパタパタと足音を鳴らして、なんとも頼りなさげな聖職者の格好をした優男が一人、姿を見せた。

暴風が吹けば世界一周とか出来ちゃうんじゃないかって位、ひよろつと細長い。

「はあ、どのような御用でしょうか？」

問いかげながら、明らかにこの場に似つかわしくない容貌の俺を上から下まで見下ろす。

ふたたび戻ってきた糸目は、今度は真っ直ぐに俺の顔　瓶底メガネを見た。

やはり、その目に警戒の色は無い。

……気づかれちゃ……いなさそうだな。

「人、探してるんですけど。ここに在籍してるって聞いて」

「はあ。聖職者ですか。名前とかわかります？」

「デインって。それだけしかわかんないんですけど。ああ男です。

歳は……三十は過ぎてると思っんですけど……」

「三十過ぎ……ですか」

「いませんか？」

「はあ。『でいん』という名の男の聖職者、ですよ……。同じ名前の聖職者が居るには居るんですが……」

「……どうかしたか」

と、ふいに俺の背後から、腹の底に響くほど太い低音がかかって、ギクつとした。

……今の今まで、背後に人の気配なんか全く感じ取れなかったぞ！？

一瞬にして膨れ上がった威圧感に襲われ、体中がびっくりしている。おかげで、後ろを振り返る動作に数十秒という時間を要した。

「はあ、お帰りなさい。いや、貴方ではないと思っんですけどね、彼が人を探してるっていうんですよ」

背後から漂う猛烈な圧迫感。

さっきは嫌味なほどこの国にハマっている、と、感じた細長い糸目聖職者ののんびり声が、今は場違いのように感じた。

「……」

ようやく、俺はその男を視界に入れる。

後ろに立っていたのは、大男だった。

ただ、野太い声に反して、やけに若い。せいぜい二十代後半といったところだ。

大きな体は、衣服の上からでも筋肉質だと解る。且つ、衣服の間から見え隠れしている浅黒い肌が、いよいよ屈強の戦士を想像させた。

かろうじて聖職者を思わせるデザインの衣を纏ってはいるのだが、白の……聖堂で定められている聖職者の制服ではない。全身真っ黒だ。

とどめは黒いサングラス。目が隠れる事で余計に際立つ深い眉間の皺といい、とにかく『聖職』に相反した存在だった。

「見たところ旅の人ではないかと思うのですがね、はあ……」

固まった思考を、のんびり声が粉碎する。

強烈な視線を感じて、もう一度、目の前の黒い大男を直視した。

大男はジッと俺を見ている。

見定めている、といった雰囲気ではない。一瞥をくれたまま、微動だにしない。

俺の、奥の奥まで覗き込んでいるかのような。

その大きな全身から迸る　かすかな殺気。

「……………」

ヤバイ。

体という境界を越え、なおも内部深くまで浸透してくる殺気に、

たまらず意識の隅で赤信号が点滅した。

「……………っ」

ヤバイ。

ヤバイ。

やばい。コイツは。

一刻も早くこの場を去らなければ。

「……………!!」

赤信号の点滅速度が増す。

ヤバイ。ヤバイ。

ヤバイ。動け。

動け。動け動け動け……………!

身体のあらゆる箇所を容赦なく突き刺す視線を合図に、思考は総活動して俺を急かすが、どういつ訳か足が動かない。

いや、身動き一つ、とれやしない。

体のあちこちを宙にピン止めされてしまったかのように、完全に固まってしまっていた。

「……………おまえは、何を見ている?」

黒い大男は、俺を見ながら溜息混じりにそんな事をボヤいた。

……………なに?

「『旅の人』だと? ……馬鹿な。コレはそんな平和なモノではない」

ボヤキながらも、その太い腕が一本、僅かに動く。

「は、はあ？」

二言目で初めて、先程の言葉が自分に向けられて放たれたものと気づいたのだろう。思考が追いついていないのか、糸目はなんとも間の抜けた声を上げた。

が、こっちはそんなものに構ってはいられない。二言目で予感を確認へと変わった。  
俺は殺られる。

「これは、『適格者』だ」

その言葉に、糸目がなんと答えたのか、もう聞き取れなかった。言葉を発するのと同時に、男の手から竜巻のような暴風が生まれる。

その音で、その場総ての音が掻き消されたのだ。

「……………」

男が暴風を握れば、圧縮されたソレは逞槍の形をとった。

どう見ても重量級のソレを目前で軽く旋回させたかと思えば次の瞬間、鋭い先端は俺の胸目掛けて飛んでいた。

「……………。よく、縛りが解けたな」

転がった先で、気がつくとも男が感嘆の声を上げている。  
やっぱり縛られてたのか…………。

こうして聖職者と対面するのは、なにもこれが初めてではない。

しかしコイツは、俺がこれまで対峙してきた聖職者の中で、最も強い聖職者。ってか、こんなバカ強い聖職者、今まで見たことが

無い。

聖職者は、崇めている聖霊の加護とやらで、様々な力を使う。格によって力量に差があるらしく、何の力も持たない聖職者というのも星の数ほど居るとい……っていうか、大多数の聖職者はそちらの方だ。

先ほどの『縛り』……いわゆる金縛りは、並の聖職者では出来ない技だという。

眼から放ち、相手の目から心の底へと入り、内側から動きを封じるソレはまるで呪のようだと思う。

コイツはソレを、サングラスの上から、魔力封じの瓶底メガネをかけていた俺にやってのけたのだ。

加えて、風で創ったあの槍。

聖霊と呼ばれている存在がどのようなものなのか。数種居ると言われる聖霊のそれぞれがどんな属性を持っているのか俺にはわからないが、コイツが崇めている聖霊はどうやら風の属性を持つ聖霊らしい。

……って事は。このヨウイス聖堂は、風の聖霊を崇めているのだろうか。

さっきの糸目も、あんなナリして風を使うのだろうか。

気にはなったが、そちらを見る余裕も無い。

糸目よりも、対峙している大男の方が格段にランクが上なのだ。

糸目の殺気は微塵にも感じとる事ができない。それどころか。

「あわわわあわわわ」

慌てふためく糸目の声が後ろから聞こえてくる。この分じゃ、奴は無視してもさほど問題は……って。問題か。

きつと、もうすぐ他の聖職者が群れをなしてやってくる。

なんせここは本拠地だ。

「……っ」

僅かに後退した俺を、

「そうだな。それが懸命だ。小僧」

緩く構え、応じる大男。

全く隙がない。

「逃げ切る自信があるのなら、せいぜいもがくがいい」

うあ。逃げれなさげ。

「ガキ相手に大人気ないんじゃないの？ おっさん」

冷や汗かきながら叩く軽口なんて、我ながらなんて無様なんだろう。

心の中で悪態つきながら、後ろに下げていたウエストポーチに手を伸ばす。

「ただのガキが相手ならばな。尤も」

大男は微動だにしない。……いや。

来る。

ポーチの中から目当てのものを探り当てるとソレを掴み、同時に後方へ大きく飛ぶ。

大男が動くよりも早く俺の手によって地面に投げ捨てられたソレらは、爆発的な黒煙を生み出した。

瞬く間に視界が奪われる。

完璧な隙は望んでない。僅かな間さえあれば全力で逃げ出す！

着地すると同時に、俺は出口へと疾走した。  
と、

ゴオオオオオオオオオオ……！！

嵐のような激音を背中中で聞いたかと思えば、信じ難い事に、俺の体は宙へ浮き上がった。

……というより、ものすごい力で後ろに引っ張られた。

「うわぁー！！」

予想だにしない引力。

そのまま、竜巻のような暴風にあおられ、俺の体は滅茶苦茶に宙を舞う。

上も下も、左も右もわからない。

息も出来ない。

意識も無くなりかけた頃。いきなり空中へ放りだされ、気づけば無重力下に俺は居た。

自分がどこにいるのか、どの高さにいるのか、  
どうなっているのか理解できない。

でも、まだ痛みはないのだから、きっと地面に向かって一直線しているところなんだろう。  
が、

「……………っ」

さらに横殴りの突風が吹いて、地に沈む前に壁に叩き付けられた。

「ぐ……………う……………っ」

全身を強打する。  
思考が飛ぶ。

「……これは私の意思ではない。上からの命だ」

意識を失う、一步手前。

それでも微かに、声が聞こえてきた。

……まさか、聖職者に、ここまで自在に「力」を使える人間がいたとは。

対面した時。体は懸命に異質を感じ取っていたのに、それでもどこかで俺はコイツを侮っていたのだ。

靴音が近づいてくる、と思った時には、俺の体は再び宙に浮いていた。

風ではなく、今度は男に胸倉を掴まれたのだ。

軽々と大男の頭上に持ち上げられるが、哀しいかな、こちらら身動き一つとれやしない。

なんの抵抗の手段も持たずに大男の上……支配下にある。

微かに瞳を開ければ、眼下に大男の顔。

……そっか。

俺、ヤラレルのかあ……。

……ごめん、親父。

ポーっとした頭で、本当に普通にそう思って、目を閉じた。

「……………」

が、

いつまでたっても、最期の一撃はこない。

「……………」

不信に思つて目を開ける。

先程の爆風でどこかへいつてしまったのか、瓶底魔力封じメガネの外れたクリーンな……もとい、立て続けの衝撃で幾らかぼやけた視界で男の姿を捉える。

相変わらずその表情はサングラスで遮られていてわからない。

わからないのだが、なんだか……。

……驚いている……？

「IV……だと……！？」

大男は確かにそう呟いた。

IV……。

……それは、俺の身体に刻まれている刻印だ。

悪魔と呼ばれる所以。

だがこの状態で、この大男には見えない箇所にあるはずなのだが……。

大男は、もう一度俺を、上から下まで凝視して。

さらに固まってしまった。

「……………」

睨みあう。

長いようで、短いような間。

いきなり大男は俺を放り投げた。

「ぐ……っ」

地面にしたたかに打ち付ける。

全身打撲、……じゃ、すまないだろうなあ。

「……人を探していると、言ったな」

大男は俺を見下ろして言う。

威圧的な態度は相変わらずだが、何故か殺気だけが抜けていた。体をさすりながら、なんとか身を起こす。

全身が、悲鳴を上げている。

それでも、あれだけの衝撃を受けても骨の一つも折れていないというのは……悔しいかな、『奴』のおかげなんだろう。

「……ああ」

「中で聞こう」

言つと、大男は俺に背を向けてずかずかと聖堂の中へ歩いていった。

「は？ ……て、ちょっと……ちょっと待て……！」

ギシギシと軋む体になんとか鞭打って立ち上がる。聖堂の入口に立ち尽くしていた糸目（まだ居たのか……）の横に来たところで、大男は歩を止めた。

「安心しろ。贅になるのは、しばらく後になった」

「………？」

訳がわからない。

『……おい、エビル。動けないんなら手エ貸すぞ』

あー……。

人が混乱しているところに、またなんか混乱させるような声が…

「つか、おまえ、来るなっつたろうが……っ　なんで居んだよ！？」

『おまえが呼ばないからだろうが！』

「……おまえが出てきたらさらに話が」

『大丈夫だろ』

と。

何故か奴は平然と即答した。

『……もうバレてんしな』

不思議に思っただけで見上げた俺に、奴は無表情の横顔でそう付け加えた。

#### 4・選択

「エビル・アストワールド、といったな」

礼拝堂から入って奥の廊下の突き当たり　　応接室のような造りの部屋に通される。

エンジ色の見るからに上質な生地のスファに、勧められるがままに腰を下ろす。

小さなテーブルを挟んで向かい側のソファには、大男。

俺の横に奴が座っているのに、……多分視えているのだろうに、奴に関しては一言も口を開かない。

本当に、関係ないようだ。

聖職者が、『俺』と理解した上で聖堂（陣地）に入れる。

それがどれほど非常識な事であるか、俺にだって理解できる。そう。

この場合は、この上なく異常だった。

「アストワールド……確か、そのような名の聖堂が、他大陸に……」

大男の横には、この聖堂の司教らしい、ミトラを着用した小柄な爺さんが座っている。

コイツにも、奴は見えているのだろうか……。

ちなみに糸目は部屋の脇　　ドアの前に立っている。

横目で見ると、彼は俺と同じような表情を浮かべていた。

理解不能……すなわち、「さっぱり、訳がわからない」といった感じだ。

「マルティス大陸　　聖霊『タワー』を崇めていた地の聖堂の名だ」

爺さんの眩きに、大男はゆっくりと頷く。

「マルティス大陸だと!? では、本当にこの少年が」  
「真正正銘の『悪魔の子』だな。見ての通り、金の髪に赤い目……  
各大陸を管轄している王家、聖堂 我等のような聖霊に仕える者  
総てに伝達された通りの容姿をしている。歳もそのくらいなのだろ  
う。極めつけは……」

そこまで言うと大男ははじめて、奴を視界に入れた。

「……………」

奴は真っ向からその視線と対峙する。

「……………その存在だ。『災いを齎す悪魔』 アルカナ憑きと称され  
る者が他にも存在する事は確かだが、十年前、マルティス大陸に大  
災害を齎したのは」

「……………」

「この小僧だ」

「……………」

爺さんが、改めて俺を見た。  
禍々しいものを視る目つき。

たと言葉が通じなくなつて、解る。

『バケモノ』

やがて、爺さんは憎悪丸出しの眼光を深く閉じる。

「……………遺憾だが、ワシには精霊 アルカナの姿は見えない。かろ  
うじて小僧の横に、強大な異質を感じ取れる程度だ」

眉間にさらに深い皺を寄せる。

「本当に、こんなモノを操っているというのか？　こんな……こんな子供が……」

「あのなあ、爺さん、別に俺は」

「操ってる訳ではない」

意表をついて、反論したのは大男の方だった。

「我等が崇める聖霊と同じように、アルカナにも皆、意思がある。こうして小僧を守るのも、アルカナの意思なのだろう」

……て、ちよつと待て。

なんで、んな事知ってるんだ？　この大男は……。

「一体何者なんだ？　アンタ……なんでそんな事」

「無礼な……！」

俺の疑問を遮つての大声。

そのままの剣幕で爺さんは一気に捲くし立てた。

「この方を何方と心得る！　ザートウルニ大聖堂から派遣された聖職師殿であるぞ！　『悪魔』如きが軽々しく口を利くでない！」

「……大聖堂の……聖職師、だつて？」

「……………」

肯定も、否定もしない。

大男はただ腕を組んで、俺の様子を眺めている。でも、まあ、この大男の強さの謎が判明した。

聞いたことがある。

この世界は、<sup>ディエース</sup>七つの大陸で構成されている。

七つの大陸にはそれぞれ、聖霊と呼ばれる強大な力を秘めた神様が  
いる。

大陸が七つだから、当然、聖霊も七神、存在する。

だから大陸にはそれぞれ、各大陸を守護する聖霊を崇める聖堂が  
必ず一つは建てられており、聖職者達は、在籍している聖堂が崇め  
ている聖霊の力の恩恵を授かる。

どの程度、聖霊の力を使えるかは、個人の適正によると言われて  
いる。

七つの大陸の一つ、ザイトウル二大陸には、七神の聖霊の中で最  
も強大な力を持つとされている聖霊『ワールド』が存在しており。

『ワールド』を崇めている聖堂が、ザイトウル二大聖堂。

七つの聖堂の中で最も大きな、総ての聖堂を統括しているという  
大聖堂。

他六つの聖堂で修行を積んだ、力のある聖職者のみが在籍出来る、  
全ての聖職者が目指す聖地だ。

だから、ザイトウル二大聖堂に在籍している聖職者達は皆、バケ  
モノじみた聖霊の力を思い通りに使いこなす事が出来ると言われて  
いる。

大聖堂で力を極めた聖職者は、時折、他の六つの大陸の聖堂に派  
遣され、各聖堂に在籍している聖職者達に指導を行う事がある。そ  
ういった派遣聖職者の事を『聖職師』と呼び、聖職者と区別される。  
当然、聖職師と呼ばれる者達と、地方の聖堂の……そんじよそこ  
らの聖職者との力の差は歴然。人間の身でありながら、神の力  
驚異の奇跡を使いこなす、人間の中で最も神に近い存在。

……それが、目の前の大男なのだ。

「……納得した。それで、あの強さなのか」

「どこの大陸の聖霊の力が知らないが……あの『風』の力。あそこまで使いこなせる人間には『聖職師』の肩書きが相応しい。人間の身で対峙して、敵うはずがなかったのだ。」

「それで？ そのお偉いサンが、なんだつてヨウイス聖堂に派遣されたんだ？ ……ていうか、『大聖堂から派遣される』なんて、よっぽどの事だと思うが……まさか、俺の位置がバレてたのか？」

「小僧！ 容易く口を利くでないと……！」

「構わない」

爺さんの剣幕を、大男が静かに遮る。

「しかし……」

「構わないと言っている」

「……はあ……」

静かに諫められて、返す言葉も無い爺さん。

この爺さんも、ヨウイス聖堂の中じゃ一番のお偉いサンに当たる訳だが、爺さんにとつちや、隣に座っている大男は、その身が崇める神にも等しき位置の存在なのだ。反論できるわけがない。

爺さんが静まるのを横目で見届けると、改めて大男は俺に向き直った。

「私は、ある目的で数日前からこのヨウイス聖堂に来ている。それは、おまえを始末する為ではないのだが……予定が変わった」

「……」

「おまえには、これから先、私と共に行動してもらおう」

「……はっ」

目が点になったのは、俺だけじゃない。

その場に居た全員、大男の発言に凍りついた。  
……………今、なんだった？

「勘違いしているようだが。元より大聖堂で定められている事だ。他のアルカナ憑きに関しては『始末』が我等聖職師の義務。しかし『悪魔の子』と呼ばれる子供。つまり、おまえを発見した場合に限り、我等に定められた行動は『連行』だ。『始末』は適用されない」

「……………なんだって？」

思わず身を乗り出す。

「そんなばかな！」

しかし、俺以上に納得していない奴がここに居た。  
……………それは当然だろう。

「この小僧の処置が、『始末』ではないと！？ そんなばかな！ 貴方もよく知っておいではず！ この小僧は十年前、たった一人で大国を滅ぼした『悪魔の子』なのですぞ！？」

文献には、こうある。

十年前。マルティス大陸という、比較的栄えた大きな大陸があった。

しかし。マルティス大陸一の大国カルブングルスは、一夜にしてその長い歴史の幕を閉じた。

……………いや。多くの命とともに、存在自体が消えてしまった。たった一人の、年端もいかぬ子供の手によって

「しかるべき場所で処刑されるのが筋というもの！ この小僧に限らず、過去、アルカナ憑きと呼ばれる者が幾度世界に災厄を齎したか……！ アルカナ憑きを野放しにしておけばこの先どのような災いに転じるかわからぬ……っ 災いの元の始末は、元より総ての聖職者の義務ではなかったか！？」

爺さんは、震える両拳で力任せにテーブルを叩く。

……その大きな音で、目が覚めた。  
張り詰めた空気。

そんな中で、大男は微動だにせず、沈黙していた。

「どうなのですデイン殿！」

爺さんは、大男を睨みつける。

………っか。

……『でいん』、だって？

「履き違えてもらっては困る」

重々しい沈黙の中、ようやく口を開いた、デインと呼ばれた大男。

「我等、聖職者は世界の秩序を保つ為に在る」

「ですから、それならば………！」

「アルカナ憑きを滅ぼす事で世が保てるのなら、我等は遂行するだろっ」

「……………？」

意味が解らないのか、眉を顰める爺さんに向かって、

「『悪魔』を滅ぼすだけでは、世を保つ事はままならない、と言ったのだ」

重圧を放つ、デイン。

「……………それは……………？」

寝耳に水、といった状態。

はじめて、爺さんの目に戸惑いの色が生じた。

「それは、どうゆう……………？」

「おまえには知る権限がない」

「……………」

「数日前に話した通り、私は大聖堂の命で、あるアルカナの適格者を運行する為にこのヨウイス聖堂に来た。おまえたちヨウイスの聖職者が聖霊『ホイールオブフォーチュン』の声を受け取ったなら、すぐにでもこの地を出るつもりだった」

「アルカナの適合者？ ……俺の事か？」

「いや。この土地には今、おまえ以外にもう一人、アルカナ憑きが居る」

「……………」

びっくりだ。

……………そりゃ、俺のような デイン風に言えば『適格者』が、他にも数人いるのだという事は知ってはいたけれど。

でも、会った事がない……………とは、言えないが。

それでも俺は、俺以外に一人しか知らない。

この世界にたった数人の存在。

人間扱いされない、時には『悪魔』と呼ばれる者。

体のどこかに、刻印を持つ者。

……そんな奴が、そんな近くに一人、居るなんて。

「元より、この国に住むアルカナ憑きを連行するその目的は、おまえを探し出す為でもある」

「……俺を？」

「そうだ。早かれ遅かれ、おまえは私に会っていた」

そんなばかな。

「……俺だって……アンタを探していた」

「……」

「アンタ、ディンつつうんだろ？」

「……そうだ」

「歳が合わないんだが……多分、俺の探している『ディン』は、あんただ」

「……そうだろうな」

ディンはそう言うと、顎に手を当てる。

「アストワルドの名に覚えがある」

「親父を知っているのか!？」

「……ああ」

間違いない。

聞いていたのより大分若いが、この男がああ『ディン』なんだ。

「俺は親父に頼まれてあんたを探していたんだ!」

「……」

「これを……っ」

リュックを下ろし、一番底にある物を取り出そうとその中に手を突っ込んだ。

「……話は以上だ」

と、俺の声　行動を遮るような形で、ディンはすっと立ち上がった。

「おまえの事情はどうあれ、おまえに与えられた選択肢は二択しかない。私と来る気があるならついて来い」

言うや否や、ディンはスタスタと大股でドアに向かって歩き出した。

「……………」

もう爺さんは何も言わない。  
そちらを見ようともしない。

「……さてよ！　俺の話は少しは……………！」  
「時間が無い」

ドアの前に立ったまま、ディンは背中では語る。

「時間……………？」

「決める、小僧。

私に付くのか、目的を無くし彷徨うか。

ああ、後者の場合は心配しなくてもいい。きっと迷い歩くのも、  
僅かな期間だろう」

「……………」

……そうだろうな。アンタに殺される訳だ。  
だが。

それもいいかもしれない。

俺にはもう、目的が無い。

静かに立ち上がって、その大きな背中を直視した。

「……一つ聞きたいんだけど」

「……」

「アンタの　大聖堂の目的はなんだ？」

「……」

「俺なんか呼んで、何をする気だよ？」

しばしの沈黙。

「私の目的は、殲滅だ」

「せん……？」

意味がわからず、問い返そうとした、その時。  
室内の空気が、音を立てて凍りついた。

## 5・精霊（アルカナ）

「……な」

「なんですと？」

「……………」

ピシッという鋭い音に、その場に居た総てのモノが凍りついた。

「なんだよ……この音」

「侵入者です！」

糸目が汗を流しながら答える。

「結界に反応したから、貴方と同じ……！」

「アルカナ憑きって訳か……この街に居るっつうアルカナ憑きか？」

「そんなはずは……！」

俺の問いに、爺さんは目を見開いている。

「……いや、違うな、この気配は……………」

デインがドアを睨む。

「外来だ」

「がいらい？」

「そつだ。おまえと同じ、他所から来たアルカナ憑きだ」

……………まさか。もうバレたのか……………？

「行くぞ！」

俺は、後ろに突っ立っていた『奴』に声をかけて、室内を飛び出した。

廊下を走って、礼拝堂に戻る。

と。ドアの手前に、一人の男が立っていた。

後ろで一つにまとめた銀の長い髪に、白い甲冑。

……間違いなかった。

「……探しましたよ。エビル・アストワルド」

俺の姿を見ると、その男は嬉しそうに微笑んだ。

「よお、アスキー。完全に撒けたと思ってたんだが……案外早かったな」

「この場所が判ったのは貴方のおかげではないんです。先程この街に入った時に、膨大な風の魔力を感知しましたから」

「……あちゃ」

そういえば、そうだった。

これまでがびっくりだらけで、コイツのこと、すっかり失念していたのだ。

「貴方の力ではなかったのですが。そこに、必ず居ると思いました」

デインの野郎……。

心の中で密かに悪態つく。

「急ぎましたよ。貴方の姿がまた国の中へと消えたものですから。この国も街も。ああなってしまうのではないか。貴方を早く、止め

なければ……ってね」

「……………」

睨みつける、が、男　アスキーは涼しい笑顔で受け流した。

「…………それが、僕に課せられた使命ですから」

微笑みのすぐ後ろに控えている、黒い衣。  
ゆつくりと、アスキーと同化してゆく。

『エビル』

「なんだよ」

『今度は、出し惜しみすんなよ』

「わかつてる」

こちらも意識を整え、集中する。

限りなく、無へ。

無へ。

無へと、近づける。

同時に、俺の中を占める奴の面積　この胸に刻まれたIVという刻印から、徐々に、体全体に。奴の気配　異質が、この身に流れ込んでゆく感じ。

膨大な力が浸透してゆく。

金色の淡い光が、体を包み込む。

俺を構成している総てのものが、造り替えられてゆく。

そして、光は弾け、俺の体は消え、そこに居たのは、『奴』だった。

強靱な肉体。

デインよりも大きな体は、文字通り百戦錬磨。

燃えるような赤い髪に、金色の甲冑。

名を、エンペラーという。

「ふん……!」

気合い一つで練り上げた、昔から愛用しているという大剣を握り締めると、

「さて」

エンペラーは入口前の、黒い光に向き直った。

そこには、実体化を済ませたアスキー……いや、女が立っていた。薄い黒布を幾つも重ねて作られた上品な黒のローブに隠された細い顔。細身の腕に、身の丈サイズの大鎌を抱えている。

しなやかに湾曲した刃。淡い光を放つ紋様の浮き出る不思議な柄。醸し出す妖艶さと鋭利な巨大刃の美しさ。それらを絶妙なバランスで併せ持つ不思議な存在に、相変わらず魅了されそうになる。

決してこの世のものではないソレは、それ自体が纏っているおどろおどろしい殺気ですらどこか魅力的に感じられた。

鎌マニア、なんてのが居たら、一発でノックアウトだろう。

「おいこら、デス。いい加減諦めろ……おまえが俺様に敵うはずがないだろ?」

「いいえ、これは主の意志。私の力が足りなかつと、全力を尽くすのみです」

感情の伴わない冷たい声を上げながら、デスが優雅に大鎌を構える。その姿は、鎌に負けず劣らず、優美。

「私には貴方を倒す力は無い。その代わりに」

デスが大きく鎌を振り上げた。  
距離は遠い。……だが、

「貴方たちに対抗できる能力がある」

迸る殺気。

(おい、くるぞー！)

「わあってるって」

エンペラーは大剣を構えるのと、デスが鎌を振り下ろすのとはほぼ同時。

「おまえの、繋がりを絶つ能力はお見通しだつての！」

鎌から放たれた鋭い風圧を大剣で力任せに叩つ斬る。

二発目の風圧と共に接近した黒女。今度も問題なく風圧を切り払ったエンペラーは怯むことなく対峙する。

がきん！

刃と刃が重なり合つて生じた鋭音。

何度か続く、体に響く音。

がきん！！

デスはいくまでしなやかに舞い、

待ち構えるエンペラーは力任せに剣を振るう。

ぎいん！！

「貴方こそ」

それでも、手ごたえの無さに徐々に焦りの色が見え始めたデス。

「貴方こそ、どうして本気を出さない」

きん！

「邪魔なら、すぐにでも切り伏せればいい」

「残念ながら」

がぎん！

「俺様もあんたと戦う気は毛頭ないんでね」

「相手をする気にもならないと？」

デスの声に屈辱の色はない。

冷静に互いの戦力を見極めて出た問いだからだろう。

そう、何度か対峙してはいるが、彼女はいつでも冷静沈着だ。

……いや、俺が他の能力者のアルカナを見ていないだけで、元来アルカナとは、そういうものなのかもしれない。

例えば、ここで敗れたって……殺されたって、アルカナという存在は死なない、と、前にエンペラーに聞いた事がある。

実際に傷が付くのは、肉体の持ち主である俺やアスキーなのだと。だから戦いになっても、どんなに絶望的な状況下に居ようと、アルカナは焦る必要はないのだ。

俺が倒れても、次の適合者を探せばいいだけの話なのだから。

……エンペラーが、異常なのだ。

数年付き合ってきたが、どういう訳か奴はこの上なく人間臭い。

「いや。違う」

デスの問いを受け、エンペラーはニヒルに笑う。

「では何故？」

「女を傷つける気はないと言ってるんだ」

「……………」

びたりと凍りつくデス。

……そう。人間臭いといふかなんというか。

コイツはこういう奴だ。

(……………阿呆)

心底呆れた声を投げかければ、

「なんだとお！ おまえ俺様になんて口聞きやがんだコリア！」

大剣を振りながらプンプン我が身に向かって抗議し出すエンペラー。  
！。

「……………からかっているのですか貴方は」

ほらみる、デスだって怒ってるみたいじゃ……………って、うわすごい。  
あのデスが怒ってる。

「俺様は常に本気だが？」

余裕綽々。大剣を構えなおすエンペラー。

「……………そうですね。ならば前言、後悔させてあげます」

デスは再び感情を消すと、一気にエンペラーに接近してきた。

「ほう？ そりゃあ楽しみだ！」

先程と同じようにエンペラーは大剣をデスに向けたが、

「(って、おいこら待てエンペラー。油断するな、なんか変だ) む」

弧を描く、デスの鎌を受け流す。

……って、ちよつと待て。

鎌の刃が無い！

「(エンペラー！ 後ろだ！)」

「……！」

いつのまにか。

刃は、単独で弧を描き、エンペラーの後ろに迫っていた。

デスと舞いと同じように、優雅にしなやかに。空を切る音、その気配すら消えている。

無機質な刃なのに、それがデスの力を編んで創られたものだからなのか。それとも、なんらかの力で刃をコーティングしているのだろうか。刃は狂いもなくエンペラーを狙って動く。

その速さ。

かろうじてエンペラーが巨体を逸らすか、なおも刃は軌道を変え、エンペラーを狙う。

「く」

「……まだですよ」

貫くような、デスの声。

デスの鎌から、また刃が映える。

(まさか)

そのまさかだ。

デスがその場で鎌を振り下ろし放たれた刃が、弧を描きながらエンペラーに接近する。

「うわ。容赦ねえな、おい」

(おまえが怒らすからだろおい)

デスと二つの刃に挟まれたエンペラー。

いや、刃はきつと無限に増える。デスが居る限りは。

(どうすんだよおい)

「さてな」

なのに、エンペラーは相変わらずのおちゃらけた調子で二枚の刃を交わしていく。

コイツ……状況を楽しんでやがる。

が。次の瞬間。

そのエンペラーの表情から、初めて笑みが消えた。

「デス！」

叫んで跳躍し、先程のデスの動き以上のスピードで、エンペラーは彼女に接近する。

「……………！」

油断していたのは、デスだった。  
慌てて新しい刃の生えた鎌を構える。  
だが、エンペラーは大剣でそれを……、……いや、空を切った風  
圧だけで、デス毎、振り払った。

「……………！」

デスの細い躰は文字通り吹っ飛ばされる。

(エンペラー！？ 何を……！)

問おうと声を荒げた時、奴の行動の意味が解った。

「おおおおおおおおおおお！」

いきなり豪音が耳を劈く。

現れた竜巻が、エンペラーを いや、エンペラーを避けて廻り  
総てを消し飛ばしたのだ。

成す術も無く消え去る、二枚の刃。

事を成し遂げたからなのか、次の瞬間、竜巻はあっけなく周りの  
空気に溶けていった。

「…………… どういうつもりだ？ デイン」

エンペラーは竜巻の来た方向を睨んだ。

そこには、手を翳したデインの姿。

「おまえを消されては私が困るのでな。不本意ながら横槍を入れさ  
せてもらった」

「…………… ちっ」

舌打ちを残して、エンペラーは俺から離れた。  
体の感覚が戻る。

「……な……っ」

衝撃で元に戻ったのだろう。声の響いた方　先ほどデスが吹き飛ばされた方向を見ると、壁に背を付けたアスキーが驚愕の表情でデインを見ていた。

「右腕にXIIIIの刻印……デスの適格者か。……おまえの知り合いか？」

ゆっくりと歩いてきたデインは俺の横に立つと俺を見下ろした。

「……知り合いつつうか」

『エビルは奴の敵だ』

言いよんどんでいると横からエンペラーが不機嫌に助言を入れる。

「ほう」

エンペラーの言葉に反応している所を見ると、デインは奴の姿が見えるだけじゃなく声も聞き取れるらしい。

『……貴方は、聖職者ですね』

デスの声がして、俺もそちらを振り返った。

僅かに顔を歪めながらもデスの手を借り、ゆっくりと起き上がったアスキー。

致命傷はないようだ。

「……その制服。ザートウル二大聖堂の……聖職師ですか。貴方が何故、彼の味方を？」

アスキーの表情に、先程までの優雅さはない。

「小僧の味方をした覚えは無いが。結果的にそうなる訳だな……」

腕組みしながら、答えるディン。

「私は今、エンペラーを消されては困る立場にいる」  
「な……！」

デスとアスキーの声がはもる。

それはそうだろう。俺だってさっき驚いた。

「聖職者が、アルカナ憑きを保護するというのですか!？」  
「まあ、そういう事だ。よって、今後も小僧の邪魔をするのであれば、私もおまえ達の敵という事になるが……どうする。続けるのなら、場所を移すでしょう」  
「……」

しばしの沈黙。

忌々しげに俺とエンペラー、それからディンを睨んだアスキーは、デスの衣に包まれスツと闇に溶けるようにして消えた。

「……つか、あんたさ」  
「なんだ」

アスキーの消えた位置から目を逸らすことなく答えるディン。

「別に、俺。あんたに付くって決めた訳じゃねえんだけど」

いいのかよ。あんなこと言って。

「……………」

「しつこいぞ。アスキーは」

「問題ない」

「……………あんた、アスキーを甘くみてるのか？」

「いや。だが仕方が無いだろう」

言って、ディンは俺に向き直った。

「私が言った言葉は、総て真実だからだ」

「……………」

コイツは、そうだ。

思わず身じろぐ程、真つ直ぐに人を見る。

サングラスの底から、視線に射抜かれる。

やましい感情があるものなら、きつと近寄る事すらままならな  
いだろう。

「……………どうした？」

こついうところだけは、聖職者、と言えるんだろうな……………。

「……………なんでもない」

「そうか。なら、今後のことだが」

「今後!？」

「ああ。さつきも言った事だが、この国にはもう一体のアルカナとその適格者がいる。」

それを探すのが当面の目的という訳だが……今日はもう遅い。明日を待つて行動に移る」

「……………探して、どうすんだよ？ あんた、さつき言っただよな？ 俺を探す為にこの国のアルカナ憑きを探してたって」

そうだ。

探すつもりだった俺が居るんだから、この国のアルカナ憑きなんて探す必要はない。

「『始末』……………するつもりか？」  
「いや」

迷い無く否定するディン。

「この国のアルカナ『テンパレンス』を連行するのは、他にも理由がある」

「テンパレンス……………」

それが、この国にいるアルカナの名前……………か。

……………他の理由？ なんだそれ。

考えて込んでいると、ふいにエンペラーから呼ばれる。

『いいのかよ、あれ？』

促されるがまま視線を向けると、ディンが聖堂を出て行くのが見えた。

「……………って、あんだだけ存在感があって、なんで気配がないんだアイ

「ッは……っ」

舌打ちをしながら、慌ててその後を追う。

「宿を探す」

俺が追ってきたのに気づいたのか、デインは背中ですんな事を言  
った。

「宿？ なんだよ？ おまえ聖職師のくせに、聖堂に泊まってるん  
じゃないのか？」

「おまえのだ」

## 6・聖職師、デイン

幾つか在る宿は、どこもかしこも満室だった。

こんな田舎の国でなんで……と思っただが、そういえば明日は何かイベントがあるようだったし、その影響だろう。

誰も、付いていくなんて一言も言っていないのに、それでもデインは俺の前を歩く。

野宿も考え始めた頃。かろうじて見つけたボロ宿の一室で一晩過ごす事になった。

デインは手続きだけを済ますと（なんと、宿代まで先払いしていた！）ヨウイス聖堂へと帰っていった。

その背を見て、そういえば親父からの預かり物を渡していない事に気づいた。

この十年間、常に持ち続けた……俺の生きる目的だ。

親父と、約束したんだ。

明日は渡そう。

必ず。

寝返りを打つにも痛む硬いベットに横になる。

天の濃厚な闇を眺めながら今日起こった出来事を思い出す。

宿を探す長い道のりで、デインはこんな事を言っていた

「おまえは……そう、ひどく虚ろだな」  
「……は？」

意味がわからない。

夜道。昼間とは違い、人通りの少ない大通りを二人で歩く。

デインは口数が少ないし、俺だってあんまり……デイン程ではな

いにしろ、くつちゃべるのは苦手な方だ。

会話を無くして出来た長い沈黙の中、唐突に振り返ったかと思えば開口一発目にして、人を指すのに”うつろ”ときた。

なんとか言葉を噛み砕いて……素直に首を傾げる。

しかし俺の様子に、目の前の馬鹿デカい男の表情はやっぱりどこまでも無で……いや、サングラスをしているから読み取りにくいだけなのか、とにかく、その大男はただ俺を見下ろして。

開口二発目は、こうきた。

「欠けている」

「なにが」

今度は素直に、疑問が口を割いて出た。

頭で考えるよりも先に言葉が出……いや、単に意味不明過ぎて脳が受け入れ拒否しようとして吐き出したのだろう。

……まあ、元来、『考える事』は好きではないけども。

「そのままの意味だ。おまえは虚。欠けている」

「いや、だから、何が？」

問い直せば、しかし大男、口を閉じたまま無反応。

「……」

「……」

そのまま三分位経過。

「……あの、聞いて……」

いい加減、痺れを切らして静寂を遮ろうとした俺の言葉をしかし、

遮る形で男は低音の太い声を吐いた。

「……おまえ。何かを願ったことはあるか？」

「ああ？」

また、妙な質問をする。

「……そりゃ、あるけど。……つか、願った事なんてないっつー人間なんているのか？ この世に」

「いないだろうな」

「じゃあなんなんだよ？ 意味わかんねーっつの……」

「確かに、こちらの質問を理解していないようだ。私が問うたのは、

『おまえ自身の願い』の事だ」

「おれじしん？」

鸚鵡返しに眉を顰めれば、ディンは再び口を閉ざす。

閉ざしたまま俺に背を向け、歩みを進めた。

その背を追いつつ根気よく次の言葉を待ってみると、そう決め込んだ四分後にディンは再び口を開いた。

「おまえ自身の望みだ」

「……望み？」

「言ってみる。おまえは今、何がしたい。得たい物はあるか？」

そう言って、背を向けたまま大男は立ち止まった。

「……………」

溜息を一つ。

……オトウサン。やっぱりこいつ。意味がわかりません。

……まあ、暇だし。付き合っただけでやることにした。

「……望み、ねえ……」

考えてみる。

俺の望みといえば、たった一つ。親父の頼まれ事を無事成し遂げる事だ。

願いも、同じ。……ってというか、望みも願いも同じじゃないのか？

「俺は……」

口を開きかけた瞬間、

「……………」

世界が、凍った……ような気がした。

……………違う。

そんな訳がない。

世界が凍るなんて。凍るはずがない。

「……………」

ない、のに。コレはなんなんだろう。

足も腕も指の一本さえも、動かせない。

体が俺が、動かない。

辺り一面に広がる底なし沼に、身が竦んで……。

「落ち着け」

低く太い声が頭に響く。

「凍っているのが解るおまえは、動けるはずだ」  
「……………」

(そんな事言っただって)

そう、反論しようと口を動かした。が、声は出ない。  
否、口なんて、動いていない。

「……………」

……………ひよっとしなくても、またこいつが何かしたのか……………?  
いつの間にか振り返って俺を見下ろしていたデイン。しばらくそのまま俺の様子を眺めていたが。

「宿を探す」

何事もなかったようにそう告げると、再び夜道を歩き出した。

「は?」

あ、声が出る。

その背を追って、俺も歩き始める。  
いつもなら口を挟むであろうエンペラーは、気づけばそこに居ないかのように沈黙していた

「エンペラー」

闇の中。部屋の奥に声を投げる。

『……なんだよ？ まだ寝てなかったのか？』

呼べば答える。

それが、十年以上前からの日常だ。

暗くて姿こそ見ることは出来ないが、恐らくエンペラーは出入り口に近い壁にもたれて胡坐をかいている事だろう。

「……………どう思っ？」

『なにが』

「デインだよ」

『……………』

俺と違って、エンペラーはやけに口数が多い。

そのエンペラーが沈黙したもんだから、驚いた。

「……………なんだよ？」

思わず、痛む体を半分だけ起こしてそちらを見る。

相変わらず、真っ暗な室内。それでもなんとか奴のシルエットを確認できた。

『……………いや、めずらしいなと思ってさ』

「なにが？」

『おまえが俺様の意見、求めてくんのが』

「……………」

『いつもだったら、相談なしに自分でなんでも決めちゃうだろ？』

おまえ』

「……………」

『……………ま、いいけどよ』

エンペラーは両手を後頭部に持って行って天井を仰ぐ。

『俺様は……………正直に言えば、よく解らん』

「んあ？」

『デインだ。言ってる事は、全部真実なんだろうが』

「……………」

『全部は語っていない、そんな感じだ』

「何か、隠してるつつうのか？」

『そう感じたから俺様に訊いたんだろ？ おまえも』

「……………」

『まあ、隠すも何も、奴はまだ目的とやらの詳細を何も語っちゃいねえからな……………』

「『殲滅』……………か」

デインが口にした、大聖堂の目的。

普通に考えれば、大聖堂が殲滅したがつているモノといえ、俺らアルカナ憑きの存在だ。

災厄を齎す『悪魔』。

まだガキの俺だって、今よりもっとガキだった、十年前に

……………他にも各地で起こっている、小さいものから大きなものまでアルカナに関する事件の話は尽きない。

だが、オチは必ず決まっていた。

聖職者がアルカナ憑きを殲滅し、脅威は去った、と。

……………正確には、聖職者に殲滅されたのは適格者のみなのだが。

聖職者が聖堂で修行を積むのは、尽きぬ災厄から世界<sup>ディエクス</sup> 人々を護る為。

だから、聖職者が災厄を齎している張本人である適格者を倒すのは当然であり、自然な流れだ。

異常なのはディンだ。

アルカナの適格者である俺を殺さずに、保護した。

しかも、同行を求めている。

聖職者の、さらに上の地位にあるディンが適格者を保護する理由とは一体。

……適格者以外の、何かがいるのだろうか。

聖職者 聖堂にとって都合の悪い、適格者以上の災厄を齎す何か。

それとも、そうとみせかけてやはり適格者全員の始末……？

『確かにきな臭いわな。聖職師あのおとしが俺様等を見逃し、拳句付いて来い、なんざ。何企んでやがんのかわかったもんじゃねえ。……が、相手が親父さんの親友だっつうから。断りきれないってか』

「……………」

いきなり凶星をつかれた。

そう。相手は聖職師だ。

加えてあの風貌。

信用する余地はない。

通常ならその場で断っていたあの申し出に、しかし俺はまだ返事をしていない。

『ま、それだけじゃないのも確かだがな』

「？」

『……判ってないようだから、それについては俺様も何も言わない。しかし、だ。奴がテンパレンスに用があるっつってたのが、ちよつと気になる』

「ディンが言ってた、この国の適格者に憑いてるアルカナか。……知り合いなのか？」

『そりゃ知ってはいるさ。俺様達アルカナは、同じ穴の貉だからな』

「アルカナ……人間に憑く精霊、か……」  
『好きで憑いてる訳じゃねえ』

言葉にひっかかったのか、ムツとした口調で切り返してくるエンペラー。

『憑かないとこの世では存在保てないから……。おまえが俺様と入れ替わる時、俺様の内に入る感覚、解るだろ？』  
「ああ」

この身にエンペラーが入り……。入り混じる感じ。  
そして、完全に入れ替わる。

最初は完全に意識が飛んでいた。  
エンペラーが主として出る時、俺の意識は彼方に追いやられる。体が無くなって……。まるで、幽霊にでもなってしまったかのよう……。いや、幽霊の方がまだ己の存在を感じられるんじゃないだろうか。

自分というものが、どこにいるのか全く感じられなくなるのだ。  
エンペラーに切り替わってる時は常に己を保つのに必死だ。  
保てなくなる時、それは……。

『俺様は、こうしてる今が常にそうだ。ま、おまえに補助してもらってるから、まだマシな状態なんだろうがな』

エンペラー曰く、エンペラーが存在しているのは、俺の内部にエンペラーの核を残しているからだという。

核っていうのが、刻印らしいのだが。  
ちなみに俺には、首の下……鎖骨の間辺りにEVという形の刻印がある。

これがエンペラーの核であり、聖職者以外からすれば、アルカナ

憑きを見分ける事の出来る唯一の証だ。

まあ、即ち、

『俺様達アルカナは、本体のみではこの世に存在できない』

だから、抛り所となる人間を選定する。

……いや、人間には憑かないアルカナも居るらしいのだが。

アルカナは、一度抛り所を決めると、入り込んで離れる事が出来なくなる。

選定者が死ぬまで。

選定者が死ぬ時、その瞬間アルカナは人から解放され、再び新たな選定者に移り移る……んだとか。

その間、一瞬。

しかも、抛り所の選定は無意識下に行われている、なんて言うもんだから選ばれてしまった人間はたまらない。

俺の時も『気づいたらおまえの中に居た』という。

物心ついた時からエンペラーは俺と一緒に居たから、なんの疑問も抱かなかつたのだが……ある時、エンペラーが自ら語り出したのだ。

十年前。

例の事件が起こった後の事だ。

俺はその時、初めてエンペラーを、『アルカナ』と認識した。

……解ってる。エンペラーに非はない。

それに関してはもう、俺の中では結論づいているし、蒸し返そうとも思わない。そんな事は無意味だって、解っているから。

それどころか、気の毒にさえ思う。

ちゃんと肉体を持って存在していれば、エンペラーやデス 彼

らアルカナは人間なんてはるかに凌駕する力を持っている。それこ

そ、聖堂 聖職者が崇めている神『聖霊』に等しい存在ではない

だろうか。

そんな彼らが、人間に憑かなければ存在できないというのは、なんか……不憫だ。

『まあ、とにかくだ。テンパレンスも、俺様と同じ人に憑くタイプのアルカナで。けど、アイツは戦闘に適したアルカナじゃないって事』

「戦闘タイプじゃない？ ……デスみたいなものか？」

デスはかなり細身の女性だ。

姿だけならとことんか弱そうなのに、あんなナリして大鎌振り回すものだから、最初に目にした時にはかなり驚いた。

おまけに、自称百戦錬磨（いや、かなり説得力はあるが）のエンペラーと互角……それ以上のスピードと、頭のキレでこちらを追い詰め、いくら力で押されていようが全く引けをとらない。

どちらかといえば頭脳戦向けと言う方がしっくりくる。言え、しかしエンペラーは首を振り、

『んーにや。デスのがまだ戦闘向きだ』

きっぱりと言い放つ。

「……つまり、テンパレンスは本当に、戦闘できる感じじゃないんだ？」

『正確には、戦闘向けの能力を持ち合わせていないんだよ。アイツは』

「知ってるのか。テンパレンスの能力を」

『……まあ。奴の能力は、感知と、制御だから』

「……って、どんな」

飛び込んできた単語に首を捻る俺をエンペラーは乾いた笑いで迎

え撃つ。

『ま。簡単に言えば、アイツは適格者やアルカナを感知する事が出来る』

「それは俺らだって……」

『俺様等の感知力を十とすれば、アイツの感知力は、千だ』

「くせ……!？」

『そう。桁違いって事。多分アイツは全てのアルカナの位置を正確に把握している。距離がどれだけあるうとな』

「……すごいな……そんなのがいるんだ」

アスキーのデスの能力も立派にすごいが、それはそれですごい。

『だからさ。多分俺様らの位置もバレてるし』

「……………」

『デインの行動だって見通しているかもしれない』

「聖職者の位置もわかるのか？」

『力を備えている奴ならな』

なるほど。それならデインの位置はバレバテだろう。なにしろアルカナを除いた適格者以上の力を持つ聖職師だ。

「なら、テンパレンスは姿を隠すかもしれない。俺達にとって聖職者と接触する事は百害あって一利なし、だろ？ 近づいて来るのが解るんなら身を隠す位訳ないだろう」

『ならいいんだが』

「……なんだよ？ 歯切れ悪いな？」

訝しげに問えば、

『俺様は、おまえが襲われてから初めて、ディンの存在に気づいたんだ』

「……………」

……………エンペラーでもわからなかったのか。

そういえば、エンペラーはあの時聖堂近くで待機していた。何かあった時、いつでも俺の所へ駆けつけることが出来るようにという理由で。

……………あの、奴の到着は遅すぎたんだ。

エンペラーは虚空に向けていた視線を俺の顔に戻した。

『ディンの目的「殲滅」って言うのがどんな事にしろ、奴が今やろうとしているのは確実に、アルカナ収集だぜ?』

## 7・再会

そして新しい朝が来た。

「……………」

大欠伸をしつつ、ぎしぎしと痛む体に鞭打って宿の出入り口へ続く階段を下りてゆく、と。

後ろをのそのそついてくるキンピカ甲冑付き半透明大男も大きな口を開けて欠伸をした。

話は結局ドウドウメグリ。

デインの話を呑み野郎についていくか、はたまた野郎と敵対するリスクを承知で話を蹴るか。どうしたって、結論なんて出なかつた。そりゃ、そうだ。デインに関してはまだ、判らない事が多すぎるのだ。

それなら当面は……奴の思惑が判明するまでは共に行動してみようということになった。

意見が一致したのは明け方。

二時間、眠れたかどうかだ。

普段なら起きる時間なんて何時だっていい。目が覚めた時に起きて、眠くなつた時に寝ている。

だが、昨日別れ際に、デインが言った一言。

『明日朝八時に聖堂に来い。やってもらいたい事がある』

……………なんだそうで。

「なんだろうな……………やってもらいたいことって」

『しかもまた聖堂かよ……………俺様出来ればパスしたいんだが。つつか。

まだ寝たい』

「わざわざ俺にやらせるんだから。おまえが居ないと成立しないんだろ、きつと。諦めろ」

『ちえー』

寝不足の為か、すっかり気が緩んでいたんだろう。

あてがわれた個室を出た時点でここは公共の場だというのに、人の目を全く気にしていなかった。

拳句。

「くうわ……！」

「きゃあー！」

段を降りきつて最初の曲がり角で思いっきり人にぶつかってしまった。

思い出したかのように鮮明に蘇った昨日の痛みをなんとか堪える。見れば、相手はその場にしりもちをついていた。

同じく痛みを堪えているのか、しりもちを付いた状態のまま頭を下げ、片手で腰を摩っている。

小さな体 子供か。

「……ったあ……っ」

まだ幼さの残る舌足らずの声が、ようやく耳に届く。

「くす、すみません、大丈夫ですか……」

助け起こそうと手を差し伸べた。

と、鼻腔をくすぐる黒髪の香りに思わず目を見開く。

「……………キミは」

俺の声に、相手は顔を上げた。

あどけなさの残るその顔立ちは随分愛らしかった。

透明な白肌。吸い込まれてしまいそうな程大きな黒瞳。小首を傾げると、動きに応じて艶やかな黒い糸が流れた。

顔に見覚えはないが、鼻腔を擦るこの香りには覚えがある。

昨日道具屋でぶつかった、フードを深く被った少女だ。

「……………」

呆然と、俺の顔を見上げる少女。

無理も無い。

はじめてみる他人が、己を見て意味深な言葉を漏らしたのだから。そう。昨日の俺は、瓶底眼鏡に黒ボサ頭だった。

金髪（自分で刈っている為ザンバラだが）と、赤い目はこの上なく目立つ。よって、特に大きな街に入る時は用心して変装するようにしている。故に昨日はまるで浮浪者のような格好をしていた訳だ。それにしてもこんな所で会うなんて。

よほど、縁があるのだろうか。

「……………あの……………」

少女の声で我に返った。

「…あ……………っ、ごめん、怪我無い？」

固まっていた右手を、ようやく動かして少女を助け起こす。

「あ、ありがとうございます」

透き通った高い声。

少女は微笑むと、ぶつかった拍子にとれたのだろう、首の後ろのフードを昨日と同じように深々と被りなおした。

……ちよつと……どころじゃない。顔を隠してしまうフードはすんごく勿体無い気がするんだが。

「旅の人かい？ 女の子がこんな安宿に泊まるなんて。あのベット、体痛かつただろ？」

ゆつたりした白のズボンをぱんぱんと叩いて埃を落としていた少女はぴよこんと顔を上げた。

「旅人ではないけど……でも仕方ないわ。今日はお祭りだから、どこも部屋が空いてなかったんですもの」

「ああ……王様の誕生日だったっけ。キミもそれで入国したの？」  
「いいえ。元々わたしはこの国の人間。訳あって別の土地に住んでるんだけど……」

言って彼女は再び小首を傾げた。

「どうしたの？」

「この数日間ね？ ここに泊り込んでいて。探し物をね、しているのよ。どうしても見つからなくて」

「探し物？」

「ええ……って、そういえば、貴方昨日入国したのよね？」

「……？ ……そうだけど。なんで知って……」

言うだけ言って、俺の言葉を聞いていない模様。少女は背負っていた小さなリュックをその場に下ろして、なにやらごそごそと捜し

始めた。

困って、後ろに居たエンペラーと顔を見合わせようと振り返る……が、エンペラーの奴、どこか様子がおかしい。目を丸くして、呆然と少女を見ているではないか。

(……………どうしたんだよ?)

口パクで訊いてみたが……駄目だ、俺を見ていない。完全に固まってしまっていた。

「……………こついう動物みなかった?」

「え!?! ああ……………」

声にそちらを見遣ると、少女が一枚の紙切れを俺に差し出していた。

受け取り、目を通す。ボロボロに擦り切れたそれには動物の絵が描いてあった。

「……………ねずみ?」

赤い目。金に近い茶色の毛に覆われた小さな体。風貌は鼠そのものだ。

ただし、毛は長く、目と耳とシツポが異様にデカイ。

と、発した声に、少女が「ええ!?!」と顔を真っ赤にして反論する。

「違つわ! 鼠じゃなくて、それは猫よ!」

「〜ねこお?」

訝しげに声をあげれば、少女、余程俺の言動が気に入らなかった

のか、俺の持っていた紙を引っ手繰って、ぷいっと横を向いてしま  
う。

「そうよ。クレイドウル国近辺の森に生息するモリネコ。昔はたく  
さん居ただけけれど、最近は……全然見ないの」

段々と声が陰る。

「ここ数日間、……友達と二人で探し回ってるんだけど、モリネ  
コは小さいし、この辺広いから。全然見つからないのよね……。ね  
？ 貴方見てない？」

両手を胸の前で組んで、懇願するように俺を見上げるが、  
しかし、期待する情報を俺は持ち合わせていない。

「……残念だけど」

「……そっかぁ……」

がつくりと肩を落とし、明らかに落胆の色を見せる少女。  
その様子があまりにも不憫で、なんか、ワルイコトなんてしてい  
ないのにこっちがオロオロしてしまった。

「……その、今日も探すのか？」

「そのつもり。友達は先に行ってるし……、……まあ、それも今日  
まで、だけれど」

「……？」

「くなんでもないっ 話聞いてくれてありがとう！ じゃあ、急ぐ  
からー！」

言って少女は俺の横をすり抜けた。

出入り口に向かって走っていく少女を目で追う。と、少女は唐突に、くるりと俺を振り返った。

「やっぱりその方がいいわ。貴方の髪も瞳も、とてもキレイな色をしているもの！ わたし、好きよ。モリネコみたい！」

言って、ドアを開け、朝日が差し込む外界へと飛び出していった。

「……………ねこ。かよ」

一瞬、ドキつとさせられた。

女の子……………しかもなかなかかわいかった……………に、「好き」と言われて心臓が飛び跳ねない野郎はいないだろう。

しかし、最後にガクつと落された。

「……………変な女。つて……………、……………あれ」

ふと、過ぎる違和感。

……………なんか、さつきあの娘、妙な事言っただけか……………？

『……………驚いた。偶然にしちゃ出来すぎてる』

背後の声に我に戻る。

振り返れば、エンペラーが憮然とした表情で出入り口の方を見ていた。

「どうした？ ……つかおまえ、なんかさつき変だったぞ」

『なにい？ エビルおまえ俺様に向かって変とはなんだ変とは！』

「いちいちムキになるなよっ 様子がおかしかったっつたんだ」

『そりゃあ……………おまえ。おかしくもなるさ』

言っ、むうと唸るエンペラー。

「だから、どうしたんだよ？ さっきの女の子がどうかしたか？」  
『どうかするもなにも』

言っ、一呼吸置くと、奴はようやく俺の目を直視した。

『テンパレンス。連れてるのはおそらく、あの女だぜ？』

## 8・別行動

「でも、どうして判ったんだよ？」

『気配がしたんだ。テンパレンスの』

「気配？」

『微妙にな。極め付けが……あの娘の顔。テンパレンスにガン似だ』

「？ 適格者とアルカナの顔は必ずしも似る事はない」

『そうだな。でもそっくりだった。それで、微かな気配にも気づけた』

アルカナにそっくりな女の子……か。

……確かに、整った顔してたな。

知っている限り（つつつても、俺が知ってるのは二人だけだけど）、アルカナつてのは美形種族（？）だ。

「……。なんで俺にはわからなかったんだ？」

人ごみの中、大通りを門へと走りながら、隣を駆けるエンペラーを見る。

「昨日だつて会ってたのに、おまえですらわからなかった」

『連れてないんだ』

「え？」

『なんかしらんが別行動している。しかし、幾ら田舎街でも適格者が一人で行動してるのは不味い。聖職者に見つかれば即アウトだぞ』

「……彼女。今日もネコを探しに行くとか言ってたけど……」

『街の外は普通に危険だろ。モンスターに出くわしたらどうする気だろうな彼女』

「……………」

今日は王の誕生祭。

城が解放されているという。

早朝であるにもかかわらず、道は……国中ごった返していた。

これでは小さな女の子一人捜し出すのに相当な時間がかかるだろう。

キョロキョロと注意深く付近を見回しながら走る。

「あんだけ深々とフード被って顔隠してたのはそういう理由だったのか……」

つまりは、俺と同じ変装って訳だ。

俺は今やディンに保護されてる身だからして、変装する必要は無くなったのだが、彼女は違う。今も……不味い事にディンに追われている身だ。ディンの目的が判らない以上、接触は阻止したい。危ない目に遭うのは、俺一人で十分だ。

「忠告しなきや」

『確かに。どういう理由かは知らんが、テンパレンスと別行動してんのは危なっかしいな……。テンパレンスの能力はあまり戦闘向きじゃないが……逃走なら可能だ。だが、ディンと対峙した時にアレすら居ないようじゃ抵抗する術は皆無になる』

「……………」

ディン……か。

朝八時について約束は破っちゃう事になる、けど……しょうがないか。

……なんかすげー怒りそうだけでも。

……………。

「……………おい。エンペラー」

『ああ？』

「俺らも別行動しよう」

『はあ！？』

「おまえ、デインのところに行け。俺は彼女を追っ」

『つつか、人の話聞いてたのか！？ この俺様が、適格者が単独行動する危さを今切々と語ってやっただろうが！？ それを……………っ』

「……………俺はデインと約束している」

『……………は？』

「行かなきゃやばい。……………いや、確実に死ぬ。待ち合わせ場所に来なきゃ、『自分に同行しない』と見なされ、追われて、運悪く彼女と一緒に居る事を見つかればそれこそ、ジ・エンドじゃないか」

『……………まあ。考えられない話じゃないわな……………』

ポリポリと後頭部を搔くエンペラー。

「デイン相手に、彼女とテンパレンス護りながら戦えるのか？ お

まえ」

『……………』

「おまけに、もう一つ運の悪さが重なれば、そこにアスキーが来る」

『……………うげ』

「在り得ない話じゃないだろ。奴はきつと今もどこかで俺等の動向を見てるはずだ。同じ街に居るんだからな」

と。そこで、エンペラーの足がぴたりと止まった。

結果、奴より前に出た俺が奴を振り返る羽目になる。

行き交う人々が、エンペラーの透明の体をすり抜けていく。その中で。

金色の甲冑の百戦錬磨を自負する戦士の顔は、これ以上ないって位に不安そうだった。

『……おまえが一人の時に、デスに襲われたら？』

「そりゃ、そこらのモンスターに襲われた、じゃないからな。即座におまえを呼ぶさ」

『タイムラグがあるぞ。門と聖堂は正反対の位置だし。全力で突っ走っても数分はかかる』

「なんとか凌ぐさ。デスが相手なら能力も、ある程度出方も把握してるし。きつとおまえが居なきゃ、それなりに油断もしてくれる。それに……」

『奴に殺されるのなら本望だ。とでも？』  
「……………」

理解してんなら言うなと。目で告げる。

周りのざわめきがイヤに耳障りに響く。

少しの間の後。

エンペラーは両腕を組むと、観念したか、巨大な溜息を吐いた。

『……………わあつた。俺様は今からデインの元に行く。で？ おまえが来ない理由はなんと説明すればいい』  
「そうだな……………昨日の傷が痛んで、宿で寝てるとでも伝えといてくれ」

『成程了解。……………エビルおまえ。いつも顔には出さんし実に解りにくいが、そう即答する所を見ると、相当辛そうだな』

「ほつとけ。じゃあ頼んだぞ。少しでも街の近くで追いつきたい」

『ああ』

一言返事の後、エンペラーの姿はすぐに人海に消えた。

俺も。エンペラーと別れて、門へ。

こうして、別行動をとるのは初めてだった。

物心ついた時から、いつもエンペラーが隣に居た。

一人になるのは本当に初めてだ。  
実に、心許無い。

「……情けね」

奴がいなければ、俺はもっと早くに、命を落としていたのだろう。  
いや、きっと。もっとずっと早くに、命を捨てていたかもしれない。

## 9・テンパレンスの適格者

その黒髪を見つけたのは、門を出て街道を少し進んだところだった。

相変わらずの人ごみの中で、小さなリュックを背負った小さな少女が、流れとは反対方向に足を進めている。

フードから零れ風に流れる、黒い毛束。

見つけてからは全力疾走だ。

人波をすり抜けて、徐々に、徐々に近づく。

かくして俺の手は、彼女の腕を掴んだ。

「……キミ、さっきの」

彼女は大きな黒目をさらに見開いて俺の顔を見た。

滴る汗をぐいっと袖で拭いつつ、上がった息を無理やり抑える。

「どうしたの大丈夫？」

俺を覗き込む表情が、みるみる心配一色に染まった。

「……捜してたんだ……実は、あんたに伝えたいことが……」

「ツタエタイコト……？　くモリネコ見つけたの！？」

がくっ

思いつきり前のめりにつんのめった。

「……じゃなくて！　危険が迫ってるって事！」

「……キケン？」

「ああ。実は……」

「急かす心を、理性が止めた。  
周りを見る。」

「往来のど真ん中。  
辺りは人だらけだ。」

「……ここじゃ不味い。場所を変えよう」

「言っつて、掴んだままの彼女の細腕を引つ張っつていこうとした矢先、」

「……っつて」

「逆にその場に立ち尽くした彼女に引つ張られた。」

「おい」

「……手を」

「言っつて少女は、自分を掴んでいた俺の手をやりわりと外すと、その手を握り返す。」

「……何、してんだ？」

「だいじょぶ」

「最初。俺をからかっているのかと思った。」

「思わず赤らめた顔を隠すようにしてそっぽを向こうとしたが、刹那、垣間見た彼女の顔は真剣そのもので。」

「彼女は俺の手を握つたまま地を見、それ以後動かなくなつてしまつた。」

「立ち尽くしたままの二人。」

「真剣な表情で、俺の手を握る少女。」

人の波が、痛いくらいに視線を投げてくる。

……一体、なんだと思われているんだろう……。怖くて聞きたくない。

「……なあ。こんなことしてる場合じゃないんだけど。おまえ……」

おずおずと口を開いた俺を、やがて彼女は黒瞳に映した。

「わかったわ」

握った手をぱつと離す。

「………?」

「忠告ありがとう。でも、今日中に見つけなきゃ駄目だから」

そこまで言うと、少女はにっこりと微笑んだ。

「エビルさんも、早くエンペラーさんと合流した方がいい」

……、

………!?

「……つて、はあ!? ちょ、え? なんで………!?!」

混乱した。

訊きたいことが一瞬で出来すぎて。

なんで俺の名前を。

なんで奴の名前を。

いいやそもそも、なんで今の俺の状況を……、判ったんだ?

目をシロクロさせていると、彼女はくすりと笑んだ。

「だいじょぶ。わたしのテンパレンスだって、キミたちが考えてる程弱くないんだから」

「……………」

最初、出会った時。

去り際の一言。

今朝、生じた違和感。

そして、この会話。

そう考えれば総てに合点がいく。

もしかして、この娘は…………、

「読めるのか!？」

俺の問いに、彼女はあっさりと頷いた。

「触れば」

ぶつかった時に、読まれていたのだ。

変装している俺の、本当の姿も。

俺らの名前も。

これまでの状況をも。

「だいじょぶ。そんなに怯えなくても、必要以上には読んでないから。安心して」

「…………、怯えてなんか」

「……………。そなの?」

「ああ。…………単純にすげえなあって。それもテンパレンスの能力なのか?」

「さあ」

「さあ……て」

「解らないわ。テンパレンスは生まれた時から側に居たんだもの。わたし自身の能力なのか、彼女の能力なのか……」

そこまで言うと、彼女は微笑んだ。

「さあ。キミの用は済んだでしょ？ わたしは急いでるからもう行くけど、キミも早く戻った方がいいわ」

「でも、あんたも危ない……」

「わたしはだいじょぶ。ここはわたしの庭みたいなものだもの。それに早くモリネコを捕まえなくちゃ」

「モリネコって……、……それ、今日中じゃないと駄目なのか？」

「ええ」

「見つかりそうなのか？」

「……多分。テンパレンスにも手伝ってもらってるから」

訊けば、別行動の理由はモリネコだった。

テンパレンスに頼んで、小動物の気配を察知してもらっていたんだそうだ。

小動物と言ってもこの広い草原、鬼ほどいる。その中でモリネコだけを捜すのは大変な集中力が必要だという。

だが、それも時間の問題で。

ここ数日で、テンパレンスは大分コツを掴んできたのか、タイムリミットの今日を目前にして、おおよその見当をつけたらしい。

絞り込む為にはそれ相応の集中が必要なわけで、彼女の側に居続け邪魔をしてしまうのを恐れた少女は一人宿へと帰って来た。

そして今日。満を持してテンパレンスと合流しようと、そういう訳だった。

「だから、だいじょぶ。見つけたらちゃんと街に帰るし。安心して」  
「……………」

どうしようか。

テンパレンスの強さはわからない。

少女は大丈夫だと言っていたが……実際の所どうなんだろう。

そりゃあ、通常のモンスターならまず問題はないだろう。

が、相手はあのデインだ。

テンパレンスと、デイン。

どちらの力量も把握している、エンペラーの意見が一番正しいのではないか。

「エビルさん？」

「……………俺も」

不思議そうに見上げる少女の顔を、真剣に見つめた。

「俺も、行ってもいいかな？」

エンペラーの言ってたとおりだった。

毛色こそ違うけど、本当に、似ている。

まるで親子だ。

束ねられた艶やかな金の髪。

透き通るような肌。

意志の強そうな青い瞳。

顔立ちは上品だが、どこか少女のようなあどけなさもある。

「……………」

エンペラーが少女を初めて目にした時のように、呆然と彼女等の顔を見比べる。

「エビル」

満面の笑みで俺を呼ぶ少女は、ここに来るまでの道中でリキユと名乗った。

黒い髪、白い肌。生粋のクレイドウル国民だ。

「彼女がテンパレンス。で、こちらが、エビル。モリネコ探しを手伝ってくれるんですって」

「あ……………ども」

テンパレンスにみつめられて、頭を下げる。

……………なんつか。デスとは違った威圧感が。

『……………貴方方の気配は、昨日から感知してました。が……………まさか接

触してくるとは……………」

テンパレンスは俺の姿を頭のとっぺんから足の先まで見た後、呆れ顔で深々と溜息をついた。

あ。やっぱりバレバレだったのか……。

「……………まあ、成り行き上だよ」

苦笑すると、テンパレンスはもう一度だけちらつと俺に視線を寄せた。

「テンパレンス」

リキユの咎めるような声がして、そちらに向き直った彼女は、

「……………そうね。話は後にしてモリネコを見つけてみましょう。早く終わらせなければ聖職者やデスは愚か、エンペラーも来るのでしょうか？」

どこか陰のある響きで告げた。

特に『エンペラー』の部分。

……………嫌われてんのな、エンペラー。

一体どんな悪さを……………。

『……………』

テンパレンスは、静かに白い細腕を前方に伸ばす。

瞬間、巨大な深緑色の水瓶が出現し、その手に納まった。

『リキユ。見て。モリネコの住処は恐らくこのあたり』

告げて、水瓶をリキュの前に持つてくる。  
一緒になって、俺も水瓶を覗き込んだ。

「うわ。すげえ……」

水面に、上空から覗いた城下町の様子が映っている。  
水の中の景色はそのうち、クレイドウル城、ヨウイス聖堂、街の  
周囲を囲む高い壁、水瓶を覗き込む俺達の姿と、次々に移り変わる。  
この先に広がる森を映した所でリキュが呟いた。

「……やっぱり。この森にいるのね」

そう。俺たちは現在、街の裏手に位置する深い森の手前にいた。  
街道をしばらく行くと、細い横道が現れる。横道は街の外側を壁  
伝いにぐるりと廻って、街の裏の森へ伸びていた。

その森の入口で、テンパレンスが迎えてくれたのだ。

『ええ。モリネコの名が示す通り、森に生息しています』

水瓶の映像は、さらに森の奥へと続く。

やがて一本の太い大木が映し出されると、その太い枝に……今朝  
見せてもらった絵の通りの姿をした小動物が二、三匹戯れている様  
子を見ることができた。

「木の上に居たのね……見つからないはずだわ」  
『行きましよう。この木はこの森の、さらに奥です』

狭い獣道を、先行してテンパレンスが進む。その後を、リキユ。最後に俺が続いた。

重なり合う木々の隙間から温かい日の光が差し込む。

時折吹く冷たい風。緑の匂い。微かに、先を行くリキユの髪の毛の香りが鼻を擽った。

森に入ってから、彼女はフードを外していた。

白い肩を隠す程の長さのそれは、風に吹かれてサラリと揺れる。

リキユは予想に反して、動きがよかった。

獣道は途中で途切れ、後半は道無き森中を分け入って進んだ。足場もかなり悪い。その容姿から、ときり苦戦するかと思われた道中は意外な程スムーズだった。急な斜面もなんのその、テンパレンスの後を追いつ、草木を掻き分けズンズン奥へ進んでいく。

……慣れていっぽい。

この辺りは、リキユの遊び場なのかもしれないな……。

なんだか、改めて不思議な感じがした。

エンペラーが居ないのも、なんだか不思議だ。呼べば、すぐ後ろから声が返ってくるような気がする。

加えて。他のアルカナと、リキユという女の子と行動を共にしている。

こんなことは初めてだ。

こんな……他人と、一緒に歩くなんて。

「エビル」

前を行くリキユの声が思考を止めた。

元気よく振り返ったリキユの額に汗が滲んでいた。息も僅かに上がっている。しかし俺を見ると、彼女はどこか嬉しそうに声を弾ませた。

「エビルって、この国へ来たのは昨日の事なのよね？ これまでず

つと旅をしていたの？」

「ああ」

「この国の印象はどう？」

問われて少し考えてみる。

「……………悪くない、かな」

素直な感想だった。

確かに城下街にしては田舎だが、豊かな緑に恵まれ、気候も国民性も穏やか。…………俺には合っていない気がして気後れもするのだが、それでもこれまで見てきた国 戦争続きで殺伐とした大国や、人口の少ない廃れた街等を思うと断然、この国は気持ちがいい。

「わたしは…………エビルみたいに旅をした事がないから、この国しか知らない。他にどんな国や街があるのか想像もつかない。けど、きつとどんな国を見たって、この国が一番だって言うと思うよ」

見ていて気持ちのよくなる笑顔だ。

胸の透くような微笑は、まるでこの国そのものだなと、そう自然に感じた。

「エビルって、歳はいくつなの？」

「？ 知ってるんじゃないかったのか？」

返す言葉にリキユは足を止め、こちらを向き直るとぶんぶんと首を振る。

「キミの容姿は、昨日ぶつかった時に。名前はね、今朝ぶつかった時に頭に飛び込んできたわ。でも、あれは不可抗力。普段心を覗く

時はちゃんと制御して、必要以上の事は見ないようにしてるの。だから、さつきも『わたしに伝えたい事』しか覗いていない」

ぴしゃりと言い放たれた。

「……なんだ。そっか……」

てつきり触られた時に俺の素性まで……過去の事まで、把握したものだとはかり思っていた。

だから、俺の「ついていく」の申し出に、にっこり笑って了承した彼女に拍子抜けしたんだ。

断られた後、どうやって食い下がろうかと考えていたから。

でも、知られていないのであれば、話はわかる。

……少し、気が和らいだ。

「俺は……えっと、十六になったかな？」

言えば、リキユは嬉しそうに笑む。

「同い年だね」

「嘘。てつきり年下かと……」

「く違うもん。リキユ、十六だもん」

……ほらまた。

クセなのか、リキユはたまに自分の事を「リキユ」という。どうやら、取り乱した時とか、感情が先行した時にポンと出るらしいのだが。

コロコロと変わる豊かな表情。あどけなさの残る顔立ちが、彼女を幼く見せていた。

「信じてないな。リキユ、嘘なんかつかないよっ」

むうと膨れたリキユは前方を向き直り、ズンズンとテンパレンスの後を追う。

……まあ、その気持ちなら解るかな。俺もガキ扱いされるのなんてごめんだし。それが原因で昔はよくエンペラーを怒ったっけ。

苦笑してリキユの後を追う。

平和な道中。ここまで。心配していた追っ手の気配はなかった。

……このまま杞憂で終わればよいのだが。

『JJJ』

テンパレンスの凜とした声がして顔を上げた。

目前には、一際大きな一本の大木。

耳を澄ませば、みゅーみゅーと微かに声がする。

(ついに見つけたね！)

モリネコを脅かさないように、リキユが小声の歓声を上げる。

(けど、どうやって捕まえるんだ？ 案外高いぞこの木。普通に登ってったんじゃ気づかれて逃げられるんじゃない……)

(だいじょぶ。テンパレンス！)

呼ばれて、テンパレンスは再びその手に水瓶を出した。

水瓶の色が、さっきとは違う。

先ほど見た、景色を映し出す水瓶の色は深緑。

そして今、テンパレンスが手にしている水瓶は水色だ。

前みたいに覗き込もうとして、何故か中の冷水が顔にかかった。

「……っ つめて……！」

水瓶自体は動いていないのに、一体なんで？

軽く瞑った目を開けてみて、ぎよっとする。水瓶の中に入っているはずの水が、瓶からニョキつと顔を出していた。

……いや。正確には、

「水が……宙に浮いてる……？」

俺が呆然としている間に、水はひとりで上へ上へと昇り、その根元は水瓶の口と同じ太さになる。

こうして出来た水柱は、飛沫を上げながらさらに上昇し、ついには目的のモリネコが居るのであるう高さにまで到達した。

これ程大量の水が水瓶の中に入っていたことにもびっくりだが、それよりなによりその水瓶を抱きかかえているテンパレンスは重くはないのだろうか。水の動きを追うその横顔は随分涼しげな表情に見えるが……。

……などと、湧き出た疑問に首を傾げる間もなく、水柱は再び飛沫を上げながら水瓶の中に戻ってきた。

「………すげえ」

かくして、水瓶の水に捉えられた一匹のモリネコ。

水はロープのように幾重にも巻きつき、その小さな体を完全に絡めとっていた。

みゅーみゅーと鳴き、震える小さな体。

心配そうに見下ろすリキユ。

「かわいそう。テンパレンス、早く……」

『ええ。すぐに済ませます』

そして水は、モリネコの全身を優しく包んだ。  
その間、一瞬。

「……ごめんね。すぐ、済むからね……」

リキュはその様子を不安気に見守る。

徐々にモリネコの体を覆っていた水が剥がれ落ち、

『完了』

短い言葉にリキュはほつと胸を撫で下ろした。

そして、再び上がる水柱。

一瞬で還ってきたその水面に、モリネコの姿はもうなかった。

「……なに、やってたんだ？」

「へっへっへ。実はね……」

企み顔で、水瓶の中に手を入れるリキュ。

中から出てきたのは、ガラスのような素材で出来た人形だった。

「……もり、ねこ？」

そう、それはモリネコの姿をしていた。

しかも、毛の一本一本や髭まで、細部に至るまで精密に再現されている。

これに色を塗れば、本物そっくり……いや、見分けがつかなくなるんじゃないだろうか。

日の光を受けてキラキラ輝くそれを、リキュが大事そうにハンカチにくるむ。

「これをね。お父様にあげたかったの」

「おとう……さま？」

「今日、お誕生日だから」

黄色の布地でくるまれたそれを胸に、につこりと、俺を振り返る  
リキユ。

「お父様。最近まで、おうちでモリネコを飼ってたんだって。……でもそのコ。一ヶ月前に死んでしまったらしいの。だからね、誕生日プレゼントはモリネコの置物にしようって決めてたの。お父様、絶対喜ぶ」

「リキユは、親父さんと一緒に住んでないのか？」

問えば、その笑顔が初めて陰った。が、それはほんの一瞬の事で、彼女はすぐに穏やかな表情で頷いてみせた。

「ちょっと訳があつてね。離れて暮らしているの」

『リキユ。長居は無用です。すぐに宿へ向かいましょう』

と、会話を遮るようにテンパレンスの声が響いた。

「ええ」

それに頷くと、リキユは大木を振り返る。

「ごめんねー、ありがとうーっ」

笑顔でそう告げ、テンパレンスの後について歩き出した。

「……」

素直なイイコだ。

彼女は。

そんな彼女も、適格者なのだ。

適格者は不吉とされ、その存在は人々に忌み嫌われる。

正体がバレれば王都の兵や、聖堂から追われる身。

かわいらしい顔を、フードを深く被って隠して。

きつと、あまり外には出られない。

おやしさんと一緒に暮らせないのも、理由はソレだろう。

「エビル！ いこー！」

あどけない笑顔で手を振る彼女の後に続く。

あの時、俺の「この手」を握ってくれた、柔らかな感触。小さな

……あの温かい手は一体、どれほどの困難を抱えてきたのだろう。

「……リキユ」

「なに？」

呼べば笑顔で振り返る少女に、自分も精一杯の笑みを返した。

「やったな。親父さん、きつと倅せだよ」

リキユが、満面の笑みを浮かべた。その時だった。

視界一杯に広がる豊かな自然。平和な森の中でそれは突如膨れ上がり、俺達を一瞬で覆った。

それは、膨大な殺気。

『リキユ！』

声が重なる。

俺がリキユの体を抱えて飛ぶのと同時に、水色の水瓶を出したテンパレンスが、殺気が一番濃厚な箇所へ大量の水を放った。

俺達の前に薄い水のベールが展開し、目前で弾かれた数枚の刃が地に落ちる。

……気づくのがもう少し遅れていたら、俺とリキユの首は飛んでいた。

「……………エビル？」

見上げる不安げな表情。

抱えていたリキユを後ろへ押しやり、殺気に向き直る。

「驚きました。いつもの野蛮な気配が無いと思えば、代わりに清浄な気配が同行している。……………貴女。テンパレンスではないですか」

底冷えのする程冷たい女の声が、森の中に静かに響いた。

この刺すような低声は……………、

「……………」

「……………デス」

やっぱり来たか。

俺の声に呼応するように、デスは俺達の目の前に姿を見せた。

## 11・戦闘（vs・デス）

俺とエンペラーが別れて行動していることは、気配で察知できただろう。

どちらを追うかなんて決まっている。

アスキーの敵はエンペラーではない。俺だ。

しかも俺さえ殺せば、その瞬間にエンペラーは次の選定者の元へ飛ばされる。反撃は不可能となる。

俺を狙う方が断然リスクが低い。

『久しぶりね。デス。で……早速訊きたいことがあるのだけれど。どうして私の主を狙ったの』

『あら。簡単ですよ』

言えば、フードの下で口端がくいつと上がる。

『手っ取り早くそのボウヤを渡してもらおうと思いましたが』

「デスの言う通りだ。テンパレンス。早くリキユを連れてこの場を去れ！」

言いながら、俺はテンパレンスの前に入る。

「エビル!？」

『……………アルカナ相手に人の身で戦おうというのですか』

背後で、僅かに動揺の色を滲ませた声を上げるテンパレンス。

「今エンペラーを呼んだ。じきにここに来る」

もとより、こうする予定だった。

テンパレンスは戦闘向きではない。

彼女の能力はエンペラーの言っていた通りだった。奴やデスとは違い、かなり特殊だ。

もし追っ手がデスであれば、狙いは俺だからして、リキユ達には目もくれないだろう。

もし追っ手がデインであれば……デインよりも、俺という荷物の無いエンペラーがこちらに辿り着く方が断然早い。だから問題は無い。デインが辿り着く前に彼女達をデインから遠ざければいいのだ。

「俺」はただの保険だ。

彼女たちを巻き込む気は毛頭無い。

『引きなさいテンパレンス。先程も刃で申し上げたでしょう。邪魔立てをするつもりであれば、相手が貴女とて容赦はしません』

冷徹な声を上げるデス。再び殺気が膨れ上がる。

「……テンパレンス！ リキユとここから離れる！」

返答は……もはや聞いている余裕は無い。殺気が放たれる前に、ウエストポーチから煙幕玉を掴み足元へ投げつけると、咄嗟に横へ飛んだ。

先程まで俺が立っていた地面に、デスの鎌の大刃が突き刺さる。

飛び道具はもうお見通しだ！

「……っ」

そのままの勢いで地を転がれば、体中が悲鳴を上げる。

……くそっ 昨日デインと戦った時の傷がまだ……っ

だが痛がつてる暇は無い。

『エンペラーの主。貴方はあっさり殺さぬようアスキーから言付か  
つてます。ですが、長引かせればすぐにもエンペラーがここに来  
るのでしょう。貴方は幸運です。楽に死ねるのですから』

もうもうと立ち込める煙幕に怯んだ様子は勿論なく、冷徹な声と  
ともに再び風を切る音が接近。斬音はそれぞれが違う軌跡を描くも、  
正確に俺の位置を掴んでいる。

「……そう簡単に殺してくれるなよ……！」

すぐ側にあつた大木の後ろに身を隠す。  
と、飛んできた刃が数枚刺さりメキメキと木が倒れる。

ドオオ……ン！！

沈む音を、駆け出しながら背中であら聞いた。  
と、すぐに背後に迫る風音。

「エビルー！！」

リキユの声に振り返れば、デスが俺を追撃している。  
驚く程目前に居るデスが、音も無く大鎌を振り上げた。

「エンペラーさえ敵わないスピードのおまえに動かれちゃ困んだよ  
っ」

寸でで横に飛ぶ。

しかし、振り下ろされた大鎌の衝撃だけで、俺の体は枯葉のよう  
に軽々と吹き飛ばされてしまう。

肩から落ちる体勢のまま、なおも追ってくる気配に向かってトリモチ玉を二、三個投げる。当てずっぽうで投げたそれは上手くデスの足元で炸裂してくれた。白いベタツとしたゼリー状の物体が彼女の動きを止めた。

『……………これは……………っ』

「よっしや！ ……………ぐっ」

落下の衝撃に声が漏れる。

直後、足止めされた場からデスが大鎌を使って放った凄まじい衝撃破が俺を襲った。

「……………っ！」

背中から大木に叩きつけられる。

肺が収縮し、意識が吹き飛ぶ

みゅっ！

寸前。一際甲高い声がして、遙か上空から何かが降ってくるのが見えた。

「……………っ」

薄れていた意識が、辛うじて繋がる。

落ちてくるそれを、なんとか両手でキャッチした。

「……………モリ……………ネコ……………？」

丁度掌サイズのモリネコの体はピクリとも動かない。

……意識を失ってしまっただけか……それとも……。  
モリネコの生死を確認する前に、自身の間近に迫っていた数枚の  
刃の音を感じた。

「……こなくそっ」

前転して刃をかわすと、そのまま前傾姿勢をとって疾走する。  
……と、いつても。両手はモリネコを抱えているし、体中痛むし、  
息もきれて、なかなか上手く走れない。

足が纏れて度々転びそうになりながらも、迫る刃の追撃を、狭い  
木々の間を利用する事でなんとかかわす。

『ちよこまかと小ざかしい……っ』

トリモチ玉のおかげで自慢の動きを封じられたデスはえらくオカ  
ンムリの様子。

そう。動きさえ封じてしまえば、障害物の多すぎるこの地で、彼  
女は圧倒的に不利なのだ。

逃げ回りつつデスと、付かず離れずの距離を保つ。刃を避け続け、  
大木に身を隠しては、ウエストポーチに残っているトリモチ玉を引  
つ掴み、デスの大鎌目掛けて投げつける。

『く……っ』

幾度となく鎌の柄に炸裂したトリモチ玉は、ようやく刃を柄に固  
定するまでに至った。

これで、刃を飛ばそうにも外せないだろう。  
大木の根元で座りこけたまま、上がった息を無理やり静めようと  
努める。

「……………」

……っというか……息がうまく吸えない。

血の味がする。朦朧とする。……さすがに……きつついよなあ……

……。……けど。

動けなくても動かなきゃ、これまでの総ての努力が無駄になる。

俺がどう足掻こうとデスには勝てない。分かりきった事だ。でも、別に勝つ為に足掻いてきたんじゃない。抱えたこの苦しみは全て、彼女から逃げきる隙を作る為のもの。奴の手を、また掴むための……！

痛む体とヘコタレ精神にさらに鞭を打って立ち上がると、こちらに向かっているであろう奴と合流を果たすべく街の方角へ走り出した。

と、霞んだ視界の隅に入る二つの姿　　くっつて、くそ……っ

まだ居たのか……！

「……………逃げるぞ！」

声を搾り出し、オロオロと立ち尽くしていたリキュと、冷静に戦況（……とも言えないか、こんな子供だましの茶番）を見守っていたテンパレンスを促す。

だが、テンパレンスは動かなかった。

「テンパ……！？」

『まだです』

テンパレンスの声に呼応するように、それまでの非ではない、膨大な殺気が背後で膨れ上がった。

張り詰めるような気　これは、エンペラーと対峙している時のデスのそれだ。

ということは、つまり。

「……………!?!」

突如、足をすくわれた。

前につんのめりそのまま倒れこむ。

拍子に、抱いていた小さなモリネコの体が転々と地を転がった。  
気をとられている暇は無い。

「ぐ……っ」

起き上がろうとした背を黒いヒールに踏みつけられ、首には巨大な鋭刃が当てがわれた。

一瞬にして決着が付く。

「エビル!!」

リキユの絶叫。

時を止められてしまったかのように、動けない。

……いや、動いたが最期、だろう。

この刃は俺の首如き、いとも簡単に刎ねる。

『少々、貴方を見くびっていました』

声はすぐ近く　耳元で聞こえた。

『思えば、これまで貴方は幾度となくエンペラーと同化し、共に私と戦っていたのですよね……』

「ぐ……っ」

刃が首の皮にめり込む。

あと、何センチ……いや、何ミリで俺は絶命する……？

そう考えれば、途端に死の匂いが濃くなった。

今までだって何度も感じたことはあるが、これほどまでに濃厚な気配はない。

首に当たる冷たい感触は、覚悟を決める為に生唾を飲み込むことすら許さなかった。

……、

「〜エビル！！」

甲高い声が、一瞬にして俺を、死の世界手前から現実へ引き戻す。こちらへ向かって駆けてくるリキユの姿に、さすがに慌てた。

「リキユ……！！ 何やってる、早く逃げろ……！！」

大声を張り上げたいが、全身の痛みと喉に迫る圧迫感がそれを許さない。

ちゃんと聞こえただろうに、彼女は俺のすぐ側まで駆けつけてきた。

乱れた息。

手にはぐつたりしたモリネコ。

そして彼女の背後には、テンパレンスの姿があった。

『……解っていますね。テンパレンス』

『……………』

テンパレンスは微動だにしない。

知り合いなら彼女も理解しているだろう、……デスの執念深さを。戦いに参加すべきではない。

リキユを連れて逃げるべきだ。

だが、彼女はそれをしない。

どういう訳か、さつきから。テンパレンスは状況を黙認しているだけだった。

このまま黙っていれば、リキユには危害は加えられない。だが……このまま黙っていたって、たとえ危害は加えられなくとも、リキユに汚い血を見せることになってしまう。

彼女は、まだ、幼い。

見かけだけではない。精神的に、まだ幼いように感じる。

無邪気というか。無垢とでもいうのか。

そんな彼女を……テンパレンスはこのまま「死」と直面させる気なのだろうか。

たとえ出会ったばかりの他人の死体でも、彼女に衝撃を与えるには十分なものだろう。

それは、どれ程の傷になるのか。

彼女も、俺のようになるのか。

おれのように

昨夜。デインに問われた時のように。考えれば考えるほど世界が冷たく凍った。

額から吹き出た冷たい汗が、つう……つと頬を伝う。

目に入っては沁み、開きっぱなしの口に入っては…………て、感じて暇はない。……そんなばかなこと……っ

「……テンパレンス！ なにやってる！ 早く……っ」

目を大きく見開き、大きく口を開け、俺が全力で搾り出した声を……しかし、遮るように。

『私は、貴方の命令は聞けません』

テンパレンスの透き通った声が、凜と告げた。

「……………え……………？」

『……………』

俺とデスが見ている目の前で、テンパレンスはリキュの背を直視した。

『リキュ。どうしたい？』

その時になって。俺は初めてリキュの姿を直視した。

恐らく……………いや、断言できる。彼女に戦闘経験はない。  
青白い顔。

彼女は今にも崩れ落ちてしまいそうな程ガクガクと震える体に、しかし鞭を打って、デスの間合いギリギリの位置で立ち尽くしていた。

ボロボロと涙を流すその黒い瞳は恐怖の色に支配され　しかし、その奥に、強靱な意志が見え隠れしている。

……………ナニを。

ナニをしようとしているんだ。

俺は、赤の他人だぞ。

それだけじゃない。俺は　　なんだから、そんなこと、してもらえないような立場じゃない。

そんな価値のある人間じゃない。  
だから。

「……………り」

察した俺が制するよりも早く、

「テンパレンス」

一呼吸置いて、彼女はしっかりと見据えた。  
己が敵と定めた者を。

「……エビルを助けて！」

瞬間、幾重の衝撃音。  
視界に、刃が。

「……………！」

首が、落とされ

『逃げなさい』

たのではないと、真っ白な頭に波紋のように広がるテンパレンスの声で気づけた。

見れば、すぐ側にデスの大鎌が落ちていた。  
側には幾つかの刃が散らばっている。

『くく……………っ』

声に見上げて、ようやく事態を把握した。

テンパレンスの操る水が、デスの両手首を縛り上げていた。  
地に散らばっていた刃は、一瞬の内に彼女達の間で行われた激しい攻防の痕だったのだ。

『早く』

「……………！」

テンパレンスの声に今度こそ反応する。

俺は力を振り絞って地を転がると、デスと距離をとった。

『……………テンパレンス……………！』

『……………』

にらみ合う両者。

ある程度の距離をとってから、ようやく、俺は彼女たちの戦闘を客観的に捉える事が出来た。

「……………エビル……………！」

そこへ、泣きながら転がるようにリキュが駆けてくる。

「……………リキュ……………」

ぼやけた視界で彼女の顔を捉えて。……………なんだか、ようやく生きた心地がした。

おかしい。

こんな、まだ戦闘中なのに。

緊張感が薄れてゆく。

やがて、俺の側まで来たりリキュは地に膝を付き、手にモリネコを抱えたまま、座り込んだ俺の様子を覗き込んだ。

「大丈夫？ 痛くない？」

モリネコを膝の上に乗せると、ポケットからハンカチを取り出して俺の首に優しく宛がう。

瞬時に生じた激痛が、沈みかけた意識を呼び戻した。

「……エビル……！」

次いで、温かな衝撃。

見上げれば、すぐ傍にリキュの泣き顔があった。

恐怖と不安と、それから悲しみが入り混じってぐしゃぐしゃになった顔。

白い頬を伝う雫が、たん、たんと、俺の顔にかかる。

「……………ごめん」

意図せずに、口から出た第一声は謝罪の言葉だった。

「……………エビル？」

「……………ごめん」

その間も、テンパレンスとデスは均衡状態を保っていた。

尤もテンパレンスに攻撃手段は無いようで、展開するデスの魔力にも対応はせず、専ら護りの体勢を維持し続けている。

両手両足　いまや体中を水で縛られたデスは、足元に転がっていた鎌からいくつもの刃を出現させ、自身らの周りを旋回させていた。

『後悔しますよ、テンパレンス。……私を敵に回したことを』  
『……………』

顔色一つ変えぬテンパレンス。

舌打ちしたデスは、八枚の刃の動きを宙に留める。

瞬間、森中から飛び立つ鳥たち。

辺りの気が一変した。

大気は静まり、ねっとりとした重い空気が、その場にいた全員に押し掛かる。

……………来る。

大技だ。

身構えるテンパレンス。

デスの口角が再び上がる

刹那。

双方が、バツとあさつての方向を睨んだ。

『よ。待たせたなあエビル！』

やけに懐かしい声が近くでして。

そちらを見遣ると、……………日の光を受けて輝く金色の甲冑に身を包んだ大男が、俺とリキュを守るように立っていた。

「……………遅いぞ。エンペラー」

『ひつでえザマだな。だあから言わんこっちゃ無い』

「ほっとけ」

『……………とりあえず無事だな』

「なんとかな」

エンペラーはそのままズカズカと大股で移動。無遠慮にデスの間合い 戦いの場へ踏み込んだ。

一定の距離を保って足を止めると、その手に大剣を出現させる。

瞬間、水の戒めを解き、テンパレンスが後方へ下がった。

これで、二対一。

『……………』

不利と悟ったか。

デスは宙に留まっていた刃を消すと、ふわりと浮かび上がった。森林の中に、一点。深い闇が滲む。

『絶好の機会を逃しました。私とした事が、テンパレンスの性格を忘れていたようです』

黒い衣を風になびかせながら、デスは……言葉とは裏腹に、讃えるような笑みを浮かべテンパレンスを見下ろしていた。発した声には、どこか満足気な色さえ滲ませている。そして、彼女はいつもの冷徹な視線を俺に投げた。

『では、次にお会いする時こそ、必ず……』

空に解けゆく闇。

それを見届けた後。

俺の意識は、完全に沈んだ。

## 12・ニユース

気づけば、宿屋の硬いベッドの上だった。

「……………つつ……………てて……………っ」

起き上がろうとすると、体中が軋む。

『寝とけ』

と、どこからともなく、声が聞こえた。

『おつまえ我慢しすぎだったの。その全身の打撲痕、昨日のもあるだろうが。骨も数本イカれちまつてるし、よくもまあそれだけボロ雑巾みたいな体使って森の中駆け回ったよな……………感心を通り越して呆れたぜ俺様は』

出入り口の横　薄い壁に背を付けて腕と足を組み立っていたエンペラーが、言葉通りの呆れ顔で俺を見下ろしていた。

「……………別に。こんなん」

『ここまで体引きずってきてやったの、誰だと思ってやがんだよ……………ったく。背骨は伸ばせないわ、足は上がらないわ……………つつつかどこもかしこもくまなく痛いし。それはそれは苦労したんだぜ。次のデスとの戦闘の時までには全力で治しといてほしいもんだ』

……………そうか。

俺。気を失ったんだ。

意識の無い俺の体にエンペラーが入り込み、ここまで歩いてきた

と、こういう訳か………って。  
そこまで考えて、大きく目を見開いた。

「おまえ、大丈夫だったのかよ!？」

『なにが』

「いや、なにがって、検問! 門通ったんだろ!? そんなナリして」

エンペラーが入ると、俺の体は奴そのものに変化する。

「ご丁寧に、着ているものまで変化する。」

見ての通り、奴は全身金ピカ大男。四方八方に伸びた髪と目は燃え盛る炎のように真っ赤つか。長身にガタイの良い肉体。こんなオメデタイ存在、目立たないはずがない。

しかもここは大陸の一國。護るべき城や聖堂がある。どんだけ鼻屑目に見たって門前払いされる事、請け合いである。

『いやべつに。フツーに通ったぜ?』

「うそだろ!？」

『嘘言つてどうする。確かに注目されてうざったかったが……俺様よりもむしろ、彼女の方が目立ってたぞ?』

「……彼女? ……テンパレンスか? リキユの中に入って……」  
『んにや。小娘の方だ』

面倒臭げにエンペラーが首を左右に曲げると、捻った数だけゴキッという鈍い音が響いた。

……しかし……さっぱりだ。

こんなオメデタ図体の大男よりも、リキユの方が目立ってただつて……?

にわかに信じられない話だった。

しかし、エンペラーはお調子者だが嘘はつかない。

十数年の付き合いで、よく知っている。

『考え込んでるトコ悪いんだけどさエビル。結構ヤバイニュースと、相当ヤバイニュースがあるんだが』

唐突な発言に思考を中断され、見上げればエンペラーが腕組みをしたまま、至極面倒臭げな顔をしてこっちを見ていた。

「……………は？」

『どっちから聞く？』

どっちからって、どちらの選択肢もあんま変わらないような気がするが……………。

「……………んじゃ、結構ヤバイニュース……………」

呆然としたまま、素直に口を開くとエンペラーはコクリと頷いた。

『オーケー。ディンの今朝の用件だが……………ありゃ、無理だ』

そつえば。忘れていたがコイツ、単独でディンと接触していたんだった。

朝っぱらから呼び出される用件。昨晩からずっと気になってはいたのだが、リキユ達の事があり、俺は出向けなかった。

「なんだったんだ？」

『聖堂に入れ、と、こつ出た』

「聖堂に？ また？」

眉をひそめれば、エンペラーは「んにゃ」と首を横に振る。

『正確には、「聖堂の地下に入れ」だな。……つか、エビルおまえ、聖堂の地下に何かがあるか知っているか？』

「いや？ 何かあるのか？」

『聖堂の地下には、奴等が拝んでせいしやくやくいる御神体の本体がいる』

「ゴシンのホンタイ？」

『ああ。おまえら風に言くと、「聖霊」が居るんだ』

この世界　　デイエースに、聖堂は七つある。

デイエースには大陸が七つあり、七つの大陸にはそれぞれに『聖霊』という……まあ所謂カミサマのようなものがいて、それぞれの大陸を守護していると伝えられている。

だから当然『聖霊』と呼ばれる存在は、全部で七神いる。

俺達が今居るクレイドウル国は、こんな田舎街でもヨウイス大陸一の面積を誇る大国だ。だからなのか、ヨウイス大陸の聖堂はこのクレイドウル国にある。つまり、昨日出向いたあの聖堂には、ヨウイス大陸を守護している聖霊が祭られている訳なのだが

「聖霊が『居る』、だって？ ……祭られているだけじゃないのか？」

『いや、「居る」んだ。「聖霊」と呼ばれているモノは実際にいて、聖堂に存在を置いている。尤も、おまえのような聖堂の関係者でない　一般の人間は直接会う事はおろか、「聖霊」の存在に関して知る事すら許されていない。各聖堂で厳戒態勢布いてるらしいからな。一般人にはほら……礼拝堂なんてのがあるだろ？ あんた達用に聖霊を模った石像を置いてやるからそつちで好きなだけ拝んでください……ってわけ。「聖霊」と会えるのは聖職者　その中でも、各聖堂で高位にある者にしか権限は無いらしい。まあ、おまえが知らないのも無理ない話なんだけどさ』

「……てか、やけに詳しいな。エンペラー……」

ジト目を向ける。

今朝、単独行動をしている間にディンと打ち解け、入れ知恵されたのだろうか。

俺の考えている事がわかったのか、エンペラーは溜息を吐いた後、無然とした顔でこちらを見た。

『……あのな。前々から思ってた事なんだが、エビル。おまえ。何か履き違えている。面倒だったんで訂正してこなかったが、いい機会だし、認識を改めさせてやつから耳かっぽじってよく聞け』

「……面倒だったって……おまえなあ」

『つか、よく考えてみれば分かるだろ。人間達は奴等に「聖霊」なんつう名前つけて随分大袈裟な存在に仕立て上げているが、俺様達も字は違えど同じ音で呼ばれているだろうが』

「……………あ」

エンペラー、デス、テンパレンス。

彼らは、人に憑く精霊。

『アルカナ』と呼ばれている。

『人に憑かないのも居るって、前に話したことなかったっけか？

聖堂に祀られている「聖霊」は、俺らと同じ穴の貉だ。奴等も「アルカナ」なんだよ。知らなくてどうする』

「……………」

驚いた。

考えてみれば、同じ言葉だったんだ。

『聖霊』と『精霊』。

でも、認識が違う。

『精霊』は、アルカナで。人に憑かなきゃ存在する事が出来ない

存在。

『聖霊』は、単独で存在している　神様みたいなものだ、そう理解していたんだ。

……そりゃあ、考えたことはあるさ。

はるかに劣る存在である人に憑かなければならないエンペラー達はなんだか不憫だと。

人に憑く性質でさえなきやこいつらだって、聖堂に祀られている神様と同等になるんじゃないか、と。

こいつらの持つ、桁外れな力は十分すぎる程理解している……けど。あんまり身近過ぎて、考えもしなかったんだ。

だってエンペラーは。いままでずっと、俺の側にいたんだから。だって……。

踏ん反りがえって俺の反応を観察している金ピカ大男の姿を、改めて、上から下まで凝視する。

「こんなんだぞ!？」

一体誰が、カミサマと同じ存在だなんて思うのか。

「……………じゃあ、なら、『聖霊』ってのはつまり……………『人』じゃなくて、『土地』に憑く性質のアルカナ……………って事なのか？」

俺の言葉に、うむ、と満足げに頷く金ピカ大男。

『そついうこつた』

「なんで言わなかったんだよ？」

『別に？　聞かれなかったから。説明すんのも面倒だし』

「……………つか、待て。それならおかしくないか？　なんで聖職者達は俺達だけを敵視する？　崇めている聖霊だって『アルカナ』だってんだろ？　おまえたち精霊も同じ『アルカナ』だってのに、憑かれた適格者は『悪魔』なのかよ？」

『聖霊の実態をよく把握していない聖職者の方が多いつて事だ。こ

こ（ヨウイス）の聖堂の爺さんだつてそうだつたる』

「あの爺か。昨日、場に同席してたつて事は多分、あれであの聖堂の中じゃ一番格が上なんだろ？」

『ああ。その爺さんが知らないんだ。地方の聖堂の知識つてのはその程度のもんならう。正確に把握しているのは……ザートウル  
二大聖堂、位なもんじゃないか？』

「……………」

確かに。

デインの言動に、爺はイチイチ驚いていた。

幾度めかの反論に嫌気が差したのか、そこでのデインの一言は、  
知る権限はない。

……………  
だつた。

「……………変だよな。聖堂は全部、大聖堂が統括してんじやないのかよ？ わざわざ派遣者……………聖職師まで寄こして指導してんに。聖霊がおまえらと同じアルカナだ……………つつうような、根底の知識は学習させてないのか……………」

『つつか、わざと隠してんのかもな』

「隠してるだ？」

『もしくは……………そういう風に出てくるのか、だ。それに……………敵視されてるのは、正確にや「適格者」だけだろ』

「……………」

『俺様に言わせりや、聖霊の力を借りて行使する聖職者も、俺様等に憑かれた「適格者」もさして違いはない。聖職者は教えを請い、学び、順追つて年月重ねてやっとこさ得た力を適正量使うのに対し、おまえらはほぼ先天的に、なんの教えもなく、聖職者以上の力を駆使用する。……………その違いだろ』

……………  
待てよ。

エンペラー風に考えると……、それは、

「……妬み？　っつか、………癖み？」

『も、あるんだろっな』

「うあ……」

なんつか……急に脱力感。

「……確かに、適格者おたがひは感情でおまえらアルカナの力を引き出しちまう事もあるから、その分危険な奴と言わざるをえない………けど」

『………』

「適格者全員が………そういう奴ばっかじゃないのに」

例えば、リキユの無邪気な笑顔が浮かんだ。

アイツなんて、その最もな例えじゃないか。

俺とは違う。

俺は『悪魔』だが、彼女は違う。

『……で、だな。そろそろ話を戻すと。デインは、ヨウイス聖堂で「聖霊」に会えと言っている。本当は、そこに在籍しているドエラい聖職者　あの爺さんだな　にやらせる予定だったらしいが……爺さん、そこまでの力はないらしい』

「……ていうと？」

『「聖霊」の声を聞けない聖職者もいるってこった。あの爺さんひよっとしたら、この土地生まれの人間じゃないのかもしれない』

「生まれが関係あるのか？」

『「聖霊」は土地に憑く。土地に縁のある者程、適性が高い。だから、しいて言うなら……テンパレンスと居る小娘。小娘が一番適任だろうがな』

「俺は……」

『おまえは適格者だ。俺様の声が聞こえるおまえにも、聖霊の声は感知できる。デスや、テンパレンスの姿が見え、声が聞けるのと同じ道理だ』

「成る程。で？ デインは、聖霊に会わせて俺達に何を……」

そこまで口にして、解ってしまった。

『そう。奴は今、テンパレンスの適格者を捜している。「聖霊」に尋ねる事といえば、一つだろう』

「……………」

『俺様達が「聖霊」と会えば、小娘とデインが接触する。確実に。今日の行動は、接触が早くなるか遅くなるか。ただそれだけの違いだった……………つづつ訳だ』

「……………なんだそりゃ」

『これが、結構ヤバイニュース。んで、もう一つ。相当ヤバイニュースってのが……………おまえ、これ覚えてるか？』

そう言って、エンペラーは自身の腕を実体化させると、俺の荷物から、ごそごそと一枚の紙を取り出してご丁寧に俺の目の前で広げて見せた。

「これ……………この街に入る時に門番から貰った手配書だろ？ なんで

も、決して悪い子じゃないんだが、とかなんとか……………」

『よく見てみ』

「……………?」

言われて、紙を受け取りしげしげと眺めてみる。

その娘は、かわいらしい顔をしていた。

とても、悪さをするようには思えない、愛らしい顔立ち。

っていつか、まだ幼い。  
黒い髪と、同じ色をした、大きくて、意思の強そうな瞳………  
って。

瞬間、俺は大声を上げて、飛び起きた。

「〜リキュ!？」

体中が悲鳴を上げるが構ってられない。

うわ、くそ、なんで気づかなかったんだ俺!?

つか、印象が違う。

この似顔絵は、実物よりももうちっと、おしとやか………というか、上品な感じた。

無邪気の塊リキュとは、雰囲気がるで違う。

『そ。なんでか知らんが、彼女は立派にお尋ね者のようだ。これで俺様より注目されたってのがわかるだろ』

「なんで!？」

『知らん。でも、門を入れてすぐに彼女、兵士に囲まれた』

「兵士だつて!？」

『ああ。俺様と一緒にいて、目についたんだらう。警備の兵士に、驚く程丁寧に連行されてった。彼女もテンパレンスも抵抗の一つすらしなかったんだぜ? 潔いといふかなんというか』

「~~~~~」

『「悪い子じゃない」んなら。捕まる理由は一つっきゃあないよな』

失念していた。

デインという聖職師が適格者を同行させたがっていたって、世間そのものが適格者を敵対視するのを止めた訳じゃない。

適格者は世間に見つかれば、その場で死刑だ。

田舎街だからって、それは変わらないだろ。

なんらかの形で、リキユが適格者だって事がバレていたら……？  
お尋ね者になるのは、当然だ。

「それでおまえ、のうのうと見てたのかよ!？」

『まさか。止めようとしたさ、だが……』

「だが!？」

『小娘が止めたんだ』

「は!？」

『小娘にはテンパレンスも居る。戦闘向きではないとは言え、相手が人間なら話は別だ。目を欺き、逃走する事位訳ないだろう。それに』

「なんだよ?」

『早くおまえを休ませろと言われた。確かに、俺様アルカナが憑いているおまえは、普通の人間と比べて回復も早い。だが、それでもおまえの体は早急な休養を要していた。小娘はそれを見通して進言したんだ』

わたしは貴方たちに従います。その代わりに、この人には決して手を出さないで

『あの場で俺様が、小娘の意思を蹴ってまで彼女達を助ける道理はない』

「……ふざける!」

喉元まで競りあがってきた感情は、エンペラーに対してだったのか、それとも

『つて、おい……エビル!？』

後ろに、エンペラーの声。

気がつけば部屋を出て、外へ飛び出していた。

迫る夕闇。

反して、辺りは一層賑わっていた。

王都へ続く大通り。

様々な屋台の灯りと、香ばしい香りとが充満している。

昨日よりも混雑した道のりを、俺は人ごみを掻き分けて進む。

『おい、待てってエビル!』

エンペラーが追走してくる。

『おまえ体は!?!』

「動けりゃいい!」

『落ち着けて! 今日誕生祭だぜ!? 城も解放してる事だし、まさか今日中に小娘をどうこうするつもりはないだろうさ! 助けるのは明日でも……!』

だぁあもっ! 鬱陶しい!

「……………!」

振り返って、俺はエンペラーを睨んだ。

まだ何か言いたげなエンペラーに対し、胸いっぱい息を吸い込む。

「リキユは、俺を助けた!」

『……………!』

「今度は俺の番だ! 文句あつか!?!」

### 13・誕生祭

目の前に迫った大きな城は、周りをたくさんの人間に囲まれていた。

見渡す限りの人、人、人……緑溢れる立派な庭園を埋め尽くしている。

彼等は皆、何故か一様にバルコニーを見上げていた。  
ちなみにバルコニーには、二人の兵士が立っているだけだ。

「……なんなんだこの人口密度は……っ」

「仕方ないさ。今日は田舎国の一大イベントだぜ？ 隣国からもゴージャスな面子が大勢集まって来ているらしい」

「……うざりたいなあ……っ」

人の波を掻き分け、さらに掻き分け、なんとか前へ足を動かす。

このまま見物人に紛れて城に侵入して……。牢屋は……。多分地下だと思う。向かいながらその辺の兵士を捕まえて、ぶん殴ってでも聞き出す。なんとしてでも。

面と向かって啖呵きつた、それ以後。俺の行動を咎めるエンペラーの抗議は一切止んでいた。

いつものように俺の後を、付かず離れずの距離を保ち、歩くだけだ。

……そう、奴はこんな人ごみの中でもいつもどおり、両手を重ねて後頭部にくっつけて大股で闊歩している。

半透明の体。こういう時はとことん羨ましい。

「……てか、エンペラー。おまえ先行って偵察してこいよ」

八つ当たり気味に言い放せば、エンペラーの眉が不機嫌に釣りあ

がった。

『偵察？ ふざけんな』

「なんだよそれ……？」

『城を開放してんだから、ソレ相応の警備体制は敷いてるだろう。言っただけじゃ、今日程警備が嚴重な日は無いってこった。きつとヨウイスの聖職者だって城の中ウヨウヨと結界はったりしてるんだろうぜ。なんせ、テンパレンスを捕まえてるんだからな』

「あ」

目からウロコだ。

つつつか、普通に考えればそれ位訳無く気づく。

……………そんなことを、エンペラーに言われて初めて気づくなんて。

……………焦ってんなよ。俺。

「……………そっか。エンペラーが単身乗り込んでも」

『そういう事だ。肉体のない俺様が人間に攻撃したところで、せいぜい半分以下の効果しかない。捕まりはしなくとも逆に、後から乗り込んでくると思われる適格者に対する警戒がさらに増す事になるだろうよ』

相手がアルカナ同士の戦いの場合。肉体があるうがなかるうが、攻撃は総て有効だ。

自分も相手も同じ状態で現存しているからだ。

相手が適格者である場合も同じ。適格者はアルカナと繋がっている為である。

しかし、相手が適格者でもない普通の人間の場合。アルカナは、その武器すらも自身の力（魔力）を練り上げて創っている為、ダメージを与えようとしても威力は良くて半減、悪くて全く効果がない。

なんせ『半透明』なのだ。幽霊みたいなものである。

それに、肉体を持たないアルカナの練り上げた武器は、やっぱり半透明で実体が無い。

エンペラーがここであの大剣を揮えば、その衝撃波ならぶつける事が出来るだろう。辺り一面の人間は吹き飛ばされてしまう。だが、肉体を斬る事は不可能だ。

「……………んじゃおまえ。昨日みたいに呼ぶまで来るな」

「まあお待ちぼうけ食らわせられるってか？ そんなんじゃまたおまえ体壊すはめになるんじゃねえの？ そんな事はつか繰り返してたら、幾ら回復力が高かったって意味がない……………」

「しゃーねえだろ……………ブツブツ言ってるなよ。他にどんな方法があるんだよ？」

「そーだなあ……………」

と、珍しく、会話を途切れさせるエンペラー。

不思議に思い、足を止めて振り返る。

俺の投げた訝しげな視線に気づいているのかいないのか。エンペラーは腕組みしたまま、呆れたような視線を上に向けていた。

見上げる方向は、周囲の人間全員が見ている方向と一致している。突如、周囲で爆発音にも似た歓声が沸き起こった。

「あそこに居る小娘にでも聞いてみたらどうだ？」

「……………は？」

視線を追うと、さっき見上げたバルコニーだった。

兵士が二人しか居なかったそこに、もう二人、人が増えている。

一人は、頭に王冠をのっけて、ゆったりした服を身に纏った温和な雰囲気の中年の男。……………恐らく、あれがクレイドウル王だろう。

そして、その後ろから静々と歩いてきたのは

「……………？」

ゆったりした淡いピンク色のドレス。

結い上げた黒髪。

透き通った白い肌に、まだ幼い顔立ち。

印象は、全然違う。

どちらかといえば、あの手配書のソレに等しかった。

俺が呆けている間に、彼女が、僅かに伏せていた顔をゆっくりと上げる。

「……………うそだろ？」

あれほど煩わしく感じていた、総ての外音が一瞬消えた。

シャラン……と耳飾が揺れる。

首に付けている赤い宝石が光を受けて輝く。

伏し目がちだった黒瞳が、真っ直ぐに正面を射抜いた。

神秘的な雰囲気纏ったその少女は　　リキュだった。

## 14・クレイドウル国の王女

やがて、王の演説が始まる。

隣に並ぶリキュは、大きな瞳を閉じ王の語りに静かに耳を澄ます。演説が終了した後、リキュは白い箱を王に手渡した。

王が開けると、中にはクリスタルで出来たモリネコの彫像。

嬉しそうに王が掲げれば、歓声と拍手が轟いた。

微笑むリキュ。

俺はそれを、エンペラーの隣で呆然と見ていた。

なんだありゃ。

つか、誰だ。あれは。

大歓声の中、二人が奥へと姿を消す。

「……いくぞ、エンペラー」

「は？」

「いーから！」

返事を待たずして、俺は当初の目的である城内を目指してひた走った。

「……別に、隠すつもりはなかったんだよ？」

正装のリキュは、こんだけ近くで見たって、昼間隣で笑っていた少女とは別人のような雰囲気醸し出していた。

瞬く星空の下。先ほどまで王が演説していたバルコニーで、人目を憚り、二人並んで腰を下ろしている。

乗り込んだ城内で、もの見事に聖職者やら警備兵などに囲まれた俺達だったが、階段から降りてきたリキュと、王の一声で事無きを得た。

王は、その柔和な顔立ちの通りの人格者なようで。アルカナの適格者である俺を見ても警戒はしなかった。

……むしろ、喜んでいた。

娘に、同じ境遇の友達が出来たことに。

「……………オヒメさま。だったのか……………おまえって」

晴れた夜空の下。月明かりと、下に幾つか建っている背の高い外灯の光が自分達を照らす。

見事な星空を見上げたままボソリと言葉を吐くと、暗がりで結い上げていた髪を解いたリキュは、「えへへ……………」と力なく笑って膝を抱えた。

「本当の名前はね。リキュール。リキュール・ヴァライエティ・クレイドウル」

髪が柔らかく夜風に流れる。

甘い香りがほんの僅かに漂って、鼻腔を擦った。

やや俯き加減で、リキュ……………いや、リキュールは、しっかりと自分の名前を紡ぐ。

「リキュってというのは、渾名なの。街の人も呼ぶ時畏まっちゃうでしょ。だから」

言って、暗がりの俺の様子を窺う。

「……………」

下の騒ぎをやけに煩く感じていた。きっと、それを表情に出していたのだろう。

しばらく続いた沈黙の後、やがてリキユはおずおずと口を開いた。「えっと、別の所に住んでるっていうのは、話したよね？ お父様の誕生祭の数日前に迎えが来たのだけど……わたし、脱走したの。モリネコをどうしても見つけたくて。迎えの人達にはちゃんとそう言っておいたんだけどね？ そしたら心配したお父様が街中にピラを配るんですもの。だから、変装してたの。フード被って」

下から、相変わらず人々のざわめきが聞こえてくる。

それぞれに夜空を見上げて、何かを待っているようだった。

もちろん、俺は興味が無い。

彼らが一体、何を待っているのかも。

溢れる笑顔。醸す楽しい気な雰囲気にも。

だからそれらはものすごく他人事で。俺は冷めた目で人々を見下ろしていた。

「……………あのね、エビル」

リキユールは、遠慮がちに口を開く。

「さっきエンペラーさんから聞いたの。エビルがすごく、心配してくれてたって」

ぎくつとした。

なんか、……………バレた？……………って、そんな感じがする。……………一体何がバレたのか、わからないけど。それでも、エンペラーのお喋りを呪った。

ちなみにエンペラーとは城の中、リキユールと遭遇しバルコニーへ案内されている最中に別れた。テンパレンスに話があるのだという。

だから今このバルコニーには俺とリキユールの二人しか居ない。隣から、リキユールの視線が痛い位に頬に突き刺さってきて………てな言い方はおかしいか。彼女はただ、俺の返答を待っているだけだ。

でも、それがとても気まずくて。たまらず俺は声をあげた。

「……別に。心配なんて」

そう。俺は、ただ。

昼間にリキユールに助けられた。だから。

「借りを、返したかったんだ。それだけだ」

そう。ただ、それだけ。

だって、こうして彼女が隣にいる今が……二人きりという状況がひどく煩わしい。

早くエンペラーたちが戻ってこないかななどと思う。

昼間の、新鮮でどこかワクワクしていた感じとはまるで違う。俺の中には徐々に徐々に冷たさを増していた。まるで、心に直接、ひゅうと、容赦ない冷風を当てられ続けているかのように。

ヒュンと。

どこかで本当に、何かが走る音がした。

「それでも。ここからエビル姿が見えた時、嬉しかったんだよ」

リキユールの一言を、まるで掻き消すかのように。ドーンと腹の

底から響く大音量と共に、夜空にぱつと光の大輪が咲く。  
瞬間、ドツと人々の歓声が上がった。

……。  
微かに聞こえたその声にチラッとそちらを見遣ると、リキユールが笑顔を浮かべていた。

「きつとキミと同じくらい、わたしもキミの体を心配したけどね」  
演説の際目にした、上品な微笑みでは決してなく。  
それは無邪気そのものだった。

「ありがとう」

再び上がる花火の光に　リキユールの笑顔が照らされて。  
眩しくて、少し視線を逸らした。

「……あ、あのさ。リキユ」

少し気恥ずかしくなって、次々と上がる花火に目を向けつつ口を開く。

「うん？」

「なんで城に……、親父さんと離れて暮らしてるんだ？　リキユは……お姫様、なんだろ？　聖職者が来たって、城が護ってくれるんじゃないのか？」

「……うん、えっとね」

リキユールは、同じように夜空に咲く大輪を眺めつつ、考え込む。  
それも一瞬。

「やっぱりね。まずいんだって。お父様の娘でも……ううん。お父様の娘だからこそ、なのかなあ………？ わたしはよくは知らないんだけど、小さい頃にいろいろあったんだってお母様が言っていた。それでも、街の人達はあるまり気にしてないって言ってくれてるのに」

赤、黄色、緑……照らされるその横顔が、ほんの少し陰る。

「……………」

「お父様ね。昔、お城の占術師に言われたの。わたしを、どこか安全な場所に移した方がよい。そこから決して出さないようにって。それが始まり。それから……丁度十年間。私は城を離れて、テンパレンスとソフィと三人で住んでる」

十年、か……。

俺が旅立ったのと、同じ歳だ。

「…………ソフィってのは？」

「わたしのお世話をしてくれる人なの。仲良しよ。でも、城を出てからは、わたしも自分のことはなんでも自分で出来るようにしたの。おかげで大抵の事はこなせるようになったわ。今ではむしろ、別居に移されたことに感謝してる位なもの。たまにソフィの目を盗んで森へ遊びに行ったりしてね。楽しいの。こうして年に一回は、お父様達にも会えるし」

「年に、一回？」

鸚鵡返しに訊くと、リキユールは、そこで初めて俺の顔を見た。

「そう。毎年今日。お父様の誕生祭にはわたしも別居から呼ばれるの」

「……………寂しくないのか？」

「全然。毎日楽しいし」

嬉しそうに笑む。

それは、負の感情を欠片も感じさせない程、幸福を満面に表した笑顔。

しかし、その笑顔は、ひどく儂げだ。

「リキユ、あのさ……………」

「ねえ、エビル」

再び夜空を仰いで、リキユールは口を開く。

「あのね。わたしが住んでるところって、すごく安全なの。壁がね。魔力とか、そういう気配を遮断する材質で造られているんだって」

「遮断？ そんな事出来るのか？」

「お城の占術師さんとね、ヨウイス聖堂の聖職者さん達が力を合わせて作ったんですって。だから、わたしは大丈夫」

「……………リキユ」

「エビルの言う聖職師という人がいくら捜しても、わたしを見つめる事は出来ないと思う。わたし、明日には帰るし」

「って、もう！？ 城には今日一日泊まるだけか？ 年に一回だけなのに！？」

思わず声を荒げると、俺の驚き様が余程おかしかったのか、リキユールがくすくすと楽しげに笑う。

「うん。今年だけ、特別ね。聖職師さんが来てる事は城にも伝わってるし、お父様もひどく心配していて……………だから、ピラを配ったんでしょうけど」

「だからって、城の中に居れば幾らディン　聖職師だって、一國のお姫様相手にそう簡単に手出しは出来ないだろ？　もっとゆっくりしたらどうだ」

リキュールは、しかし左右に首を振る。

「……最近お父様、お体の具合がよくないらしいの。顔色も悪くって。演説も……お話好きのくせに、いつもの半分しか語らなかつたし。だから、あんまり心配かけたくなくて」

伏し目がちに、笑む。

その表情は、どこか大人っぽく、綺麗で。  
先程の『リキュール姫』を思わせた。

「それに、また来年、会えるしね。お転婆姫は、これでお終い」

えへへと笑って俺を見る。

「リキュ……」

「あ、そうだ！」

言って、リキュールは立ち上がり　かけた。

中腰のまま下を見下ろして辺りに変化が無い事を確認すると、改めて俺を見る。

「昼間エビルが助けたモリネコなんだけどね？」

言われて思い出す。

デスとの攻防（と、言えるようなものではなかったが）の最中、巻き添えをくらって木から落ちたモリネコのことだ。

俺が意識を失う前、モリネコは一度も動かなかったのだが、エンペラーの話によるとモリネコはまだ生きているらしい。

「ああ……そういやおまえが預かってくれてたんだっただな。様子どうだ？」

「それがね、気絶してただけだったみたいで。テンパレンスに看てもらっても、どこにも怪我がなかったの。キミたちと別れたすぐ後にはもう飛び起きて……もうすっかり元気よ」

「そうか……」

楽し気に語るその表情を見、ホッと息をつく。

あの時、手の中でぐったりしていたから、相当状態が悪いのかと思っただのだ。

「それでね、あのコ結構人懐っこくて……って、ちょっと待って、連れてくる」

言って、中腰のまま、リキユールが奥へ引っ込もうとした。

……その足が、止まる。

「リキユ？ どうし……」

不審に思い、振り返って　ぞっとした。

風が止み。

リキユールの目の前には、大男が立ちはだかっていた。

……寒気を感じるのは。

これほどの気配をしかし、完璧に消し去っていた事だ。

俺が。近くに居るであろうエンペラーが。それから、感知能力の高いとされるテンパレンスが、これだけ、リキユールへの接近を許すほどに。

「……………おまえか。テンパレンスの適格者は」

大男は、無慈悲にリキュールを見下ろす。  
闇に似つかわしい低い声が静かに、暗がりに響いた。

「……………ディーン」

## 15・選択する為に

花火大会が終わって、下ではぞろぞろと家路に着く人々の様子が見受けられる。

楽し気な雰囲気とは対照的に　この場はひどく緊迫した空気に包まれていた。

正面に、リキュールの小さな背中。そのさらに奥に、闇を背負って黒い聖職服の大男が仁王立ちしている。

『「丁寧にも無く警備兵を眠らせて、こんなところまで来やがるたあ……………」』

『……………話には聞いていましたが……………、これほどまで気配を感じさせないとは……………』

デインの背後で、駆けつけた二人のアルカナの音がする。

彼等に一瞥をくれただけで、デインは俺達に　俺に向き直った。

「昨日の攻防で動けないんじゃないのか」

「……………あんたこそ。どうしてここに……………」

「この国の聖職者達がかかり出されると聞いたのでな。私も出向いたという訳だ。と、いうか。この国の人間は詭弁が上手くない」

「……………」

……………バレたのか。

リキュールの住んでいる、魔力を遮断するという壁で出来た別居は、城の占術師と聖職者が造り上げたという。

という事は、ヨウイスの聖職者はリキュールがテンプレンスの適格者であるという事を知っている事になる。

そりゃ、全員が全員知っている訳ではないと思う。しかし、确实

に昔からいる……あのドエライ爺さんとかなら知っているはずだ。  
締め上げられたか、それとも……見抜く力が、この男にはあるの  
か。

「……貴方は……」

リキュールの戸惑うような高い声がして、我に返る。  
いつしか額に滲み出ていた汗をぐいっと拭う。  
そして、全身にかかる圧力を改めて実感した。

奴は、強い。

「……リキュール・ヴァライエティ・クレイドウルだな」  
「はい」

この圧力の中。毅然としてデインと向き合うリキュール。  
俺はどんな状況にでも動けるよう、僅かに腰を落としていた。  
今はこれが精一杯だ。  
この男にはそれだけ、隙というものが存在しない。

「私はザートウル二大聖堂に属する聖職師、デインだ。テンパ  
レンスの適格者であるあんたを、迎えに来た」

やっぱりか……。

内心そう思った。

デインの目的はどういう訳か、適格者を殺す事ではない。  
圧力はあれど、そこに殺気は微塵にも感じられない。  
アルカナたちが動かないのが証拠だ。

リキュールも、俺の記憶から読んでいたのか、驚く事はしない。

「何故、ですか」

静かに問うその声は意外なまでに落ち着いていて、どこにも臆するような色は無い。

か細い背中は微動だにしなかった。

この圧力下、スツと真っ直ぐにその場に立ち、毅然とした態度でデインの返答を待っている。

俺の勝手な想像だが……女の子というものは、目の前にデインみたいな大男に立たれたら怯えて声も出せなくなるものではないだろうか。

考えていたよりも、彼女は強くて……やっぱり、お姫様だった。

「……………」

デインも、少し驚いた様子だったが、

「……………私には目的がある」

僅かな沈黙の後、そう続けた。

「目的とは？」

「殲滅だ」

「何を殲滅する気ですか」

「……………今はまだ語る時ではない」

「リキユール！」

アルカナの後ろから、兵を従えてリキユールの父親　ヴァーダ

ー・ズイーズナヤ・クレイドウル王が駆けつけた。

青い顔にリキユールは頷いてみせると、再びデインに向き直る。

「わたしはクレイドウル国第一王女、リキユール・ヴァライエティ・

クレイドウル。特別な理由もなく、国を離れる訳には参りません」

「アルカナ憑きの王女でもか」

「貴様……!!」

「王女に対してなんたる無礼を……!!」

兵が騒ぎ立てるのを王が片手で制する。

「貴方の事は聞いています。聖職師デイン。ザートウル二大聖堂の派遣聖職者で相当な力の持ち主だと」

落ち着いた柔らかな声に、デインはゆっくりと王に向き直った。  
リキユールが不安げな表情で王を見つめている。

「聖職師の使命は適格者の殲滅にあると聞く。貴殿の言つとおり、そこにいるのは適格者　アルカナ憑きの王女であると同時に私の娘だ。故に問いたい。我が王女、それと、そこに居る王女の友人を連行するのはザートウル二大聖堂の意志か。それとも、聖職師としての使命故か」

「どちらでもない」

「というと?」

「そもそも、私の意は大聖堂のそれとは異なる。故に私は単独で行動している」

「大聖堂から派遣された訳ではない、と?」

「いや。私は大聖堂の命でここにいる。しかし、私個人の目的の為にその姫の力を借りたい」

「……………処理を目的としているわけではない、と」

「ああ」

「詳しく話を聞かせてもらいたいのだが」

「王には関係の無い事だ」

「私にはなくとも、娘にはあるのだろう。貴殿は娘とその友人に詳

細を話すべきだ」

「……………そうだな」

あっさりと呟くと、ディンはそのまま歩を進めた。

「お、おい…………ディン？」

俺の声にディンは立ち止まると、

「選択権はおまえ達にある」

背中を向けたまま、低い声で言い放った。

「ついて来い。選択を行うために」

「……………はい」

驚いたのは、隣から聞こえた声。

「リキュ！？」

リキュールはディンの後をついていく。

「エビルも知りたいでしょう？ 行くでしょう？」

振り返った疑問顔に面食らう。

素直というか、適応力が高いというか……………。危機感知能力が  
極端に低いというか…………。

「…………リキュが行くんなら俺も行く、けど…………いいのかよ？」

「ええ。お父様はわかってくださる」

デインに道を譲ったクレイドウル国王の元へ小走りに駆け寄りキュール。

「お父様。わたし、行って参ります。自分で、運命を選択をする為に」

「……………リキュール。私は」

国王は言葉を飲み込んだ。弱々しい表情にリキュールは笑顔を見せる。

「大丈夫。わたしを信じてお父様。これからは占術師の声ではなく、自分の道は自分で開きます。ですから、お父様は早く休んでください。顔色が悪いです。体調が優れないのでしょうか？」

「……………」  
「わたしが戻るまで、帰る場所を守っていただかないと。……………元気でいなくてはダメなんだから」

「リキュール……………」

「安心してください。テンパレンスもついていきます。それからエビルも。デインについていく事を選択しても、最後には必ずわたしはお父様の元へ戻ります」

「……………私は……………なんと無力なことか……………」

「そんなことはありません。お父様はこれまで私を、この国をお守りになった。わたしもこの国を守りたいのです。その為には進まなければならぬと、わたしは考えます」

「リキュール、そんなことはおまえの心配する事ではない。私が……………」

「聖職師がクレイドウルへ派遣されると知らせを受けた日のこと。わたしは夜も眠れませんでした。お父様もそうでしょう。占術師の予言を消し去る為にも、わたしが動くべきだと考えます」

「……………」  
「行って参ります。お父様」  
「……………」

何も言えなくなってしまうた国王。最後にお辞儀をしてリキユールは前に進む。

『リキユール』  
「行こう。テンパレンス」

そんな彼女の歩みを止める者は誰も居ない。テンパレンスは当然のようにリキユールの意に従い、兵達は戸惑いの表情のまま声を上げることもし敵わずに、颯爽と通り過ぎてゆく彼女を見送るだけだった。

『いいのかよ？ ボーっとして。姫さん行っちゃまったぞ』  
「あ、ああ……………すぐ行く。……………けど」

エンペラーの下へ駆け寄りながら、俺はチラツとクレイドウル国王を垣間見た。

体調が思わしくないと言っていたリキユール。痩せた背中を丸めて、俯いた青白い顔で何事かを呟いている。わかってくれるとリキユールは言ったけれど。

そこには、先ほど垣間見た国王の威厳などどこにもなかった。

## 16・地下礼拝堂

辺りにはまだ、興奮冷め止まぬといった具合の人々の陽気な笑顔が溢れていた。

そんな中をデインは相変わらずのお通夜のような仏頂面ですり抜けて、真っ直ぐに聖堂へ向かっている。

その後ろを、正装を脱ぎ朝の身軽な姿となったりリキュールとテンパレンス、最後に俺とエンペラーが続く。

城下街の人が。デインの馬鹿でかい図体にびびった後で、リキュールの姿に気づき朗らかな笑顔を浮かべる。しかし、誰もが声をかけようとして、一人の例外もなく彼らは口を噤んだ。

『さつきから顔上げないな。 姫さん』

両手を後頭部で組みながら、俺の隣でエンペラーがぼそっと呟く。

『あのデインの雰囲気になまじり対等に話すなんざ随分肝の座った姫さんだと思っただが……さすがに緊張してんのか』

「……それだけじゃないだろ」

こちらから見れるのは背中だけで、その表情まではわからない。

だが纏う空気は、ちよつとでも突けば裂けてしまつのではないかと思つ程に張り詰めていた。……恐らく彼女は。

『心配か？』

「ああ、心配なんだろうな。リキュが気に病んでるのはさつきの件だろ。あいつきつと王様の事………つて。今、何つった？」

『おまえに、心配してんのかって訊いたんだよ。 姫さんのこと』

「？ なんてそんなこと訊くんだよ」

『いや？ セーシユンしてんなあ……って』  
「あほか。……って」

突如膨れ上がった尋常じゃない殺気に前方を見ると、……一体いつから見ていたのだろう。リキュールの隣を歩いているテンパレンスの横顔がこちらを覗いていた。

「……ほおら見るおまえがくだらねー無駄口叩いてっから俺まで……！」

リキュールに気づかれないよう無言で、呪い殺さんばかりの眼力をこちらに放っていらっしやる。

『……うわ恐いテンパレンス。いやマジ恐いってそれ』

そんなこんなで辿り着いたヨウイス聖堂。

例の回り道のおかげで、すっかり真夜中の時間に門を叩く。

「あ、あれ？ お帰りなさ……って、ディンさん？ こんな時間に人を入れては……って、ひ、姫様まで……これは一体……？」

出迎えたひよる男に構うことなく奥へと突き進むディン。

「夜分遅くにすみません」

『お勤めご苦労様です』

「よう」

『また邪魔するぞー』

デインの代わりに俺達が声をかけて通り過ぎると（アルカナの声は聞こえてないと思うが）、ひよる男はますます慌てふためいて「あわあわ」していた。動きから想像するに……俺達のことを黙認しようか、上に報告に行こうか迷っているようである。

礼拝堂の奥にある古い扉を開ける。その先に続く、窓一つ無い石造りの細い廊下を進み、一段と闇の濃密な地下に続く狭い階段を下りる。所々にかけられた松明の明かりだけが頼りだ。

そして、デインが足を止めたのは聖堂地下にある最奥の部屋だった。木で出来た両開きの古い扉を開ける。さび付いた音と共に、視界が開かれた。

まず目に付いたのは、奥の壁の大きなステンドグラスだった。

地下にあるというのに鮮やかに光り輝くその真下に立つのは、ヨウイス大陸を守護すると言われている御神体だ。

扉から御神体へ真っ直ぐに伸びる一本の通路に沿って左右均等に長椅子が並べられている。この部屋の造りは、見たところ上の礼拝堂と同じだった。しかし松明一つ存在していないのに、部屋は不思議な発光で満ちていた。

辺りを漂う空気も違う。荘厳というか神秘的というか、……何かがあるなという気配だけが濃密だ。

……と。視界の隅で何かが移動する。

「……なんだこりゃ」

虹色に光る、まるで人魂のように幻想的な『灯り』が、蛍のように宙を舞っていた。

「うわぁ……」

リキユの声に振り返る。彼女は天井を仰ぎながらゆっくりと一回転していた。浮かべる笑顔に、つられて見上げてビビった。高い天

井下にたくさん『灯り』が密集していた。ざっとみてもその数、数百……いや、数千はあるんじゃないだろうか。

「な、なんだ……？」

『魂だ』

腕を組み、なんでもない事のように見上げていたエンペラーがぶつきらぼうに告げる。

「……………マジに人魂ってか？」

『この大陸　ヨウイスで果てた魂だな。……………つつつても、別に人だけのものじゃないぜ。ここには全ての生命の魂が集まる』

時折天井の一握りが降りてきて、リキユの髪を攫う。

「あ、あはは……………くすぐりたいよ」

「……………大丈夫かよ？　なんかリキユの周り、魂ってやつに完全包围されてるけど」

『よほど好かれてるんだろう。まあ、害はない。ここにある魂はどこにも落ちなかったものだけだからな』

「あいつら……………リキユのことがわかるのか？」

『それはない。こいつらは何者でもない。魂になるとな。持っている記憶は全て記録として身に刻まれるんだ。中には何も入ってない』  
「刻まれる？」

『あ……………ほら、動物の……………犬だの猫だのの模様みたいなもん、かな。自分そのものになっちまったから、自分じゃわからなくなるんだ』

『……………相変わらずですねエンペラー。しかし、その知能を持たない赤子のような回答はどうかと』

後頭部を掻くエンペラーに再びテンパレンスのジト目が突き刺さる。

『うるせえな。俺様は説明ベタなんだ。感性で生きる男なの！』

『威張って言う事ではないと思いますが』

「……まあ、おかげで掴み易いけど」

フォローすべく声を上げると瞬間、テンパレンスの視線がこちらにも刺さった。リキユールの手前、俺には発言しないようだが……無言で睨まれる方がなんか怖い。……まあ、皆まで言わなくてもわかるけどな。『アルカナがアルカナなら主人も主人ですね』と言いたいのだろう。

『とにかく、だな』

テンパレンスの殺気を払うように、エンペラーが大きく咳払いをした。

『こいつらは生という概念から解放された存在。ただ在るだけだ。中身が何も無いからな、子供と変わらん。無邪気なもん……って、そら。おまえの所にもきたぞ』

エンペラーのからかうような声を見ると、いつのまにか一つの魂が俺の傍に寄ってきていた。

恐々とこちらに近づいてくる。まるで俺の様子を窺っているかのようだ。

『大陸で果て、魂となった命は、まずその大陸の聖堂に引き寄せられる。そこからザートウルニ送られて、無の海に放り込まれてまた芽吹く……その繰り返しだ』

『その答えもどうかと……』

エンペラー達の冷たい戦争を無視して、魂をマジマジと観察してみる。まるで真珠が虹色に発光しているような不思議な存在だった。やわらかいのかな。触れてみようと片手を伸ばすと、いきなり魂が速度を上げ、俺の頬を掠めた。

「うわ……っ」

「え？ え？ どうしたの？」

見るとリキュールにじゃれていた魂も、物凄い速さでそこからじゅうに散っていく。

『聖堂に引き寄せられているというよりも、彼らは』

テンパレンスが向き直った。

「……………！」

視線の先には仁王立ちのディンの背中　その奥で。  
御神体が光っている。

『上等です聖職師。僕の願いをよくぞ聞き届けてくれました』

どこからか子供の声が響く。瞬間。御神体から光る何かが飛び出  
した。

同時にディンの足元から発生する上昇気流。一瞬で、ディンの大  
きな体が飲まれ、掻き消される。

「！ ディン!？」

それだけでは飽き足りないのか、激しい上昇気流は津波のようにこちらへ迫る。テンパレンスが、エンペラーが、そして

「……………きゃ！」

「リキユール……………！」

リキユールの体が消し飛ばされる寸前、助けようとその手を掴んだ。

瞬間、下から吹き付ける風。

体が、吹き飛ばされ……………！！

## 17・運命の輪

「……ル……！……エビル！」

遠くでリキュールの声がする。

ゆっくりと瞼を上げる。彼女の影が視界に広がって

眩しい。

………なんか。

なんだろう、妙な感じが……。

「………っ」

飛び起きる。

「エビル！ よかった、気づいたのね」

幾度か瞬きを繰り返した後、ゆっくりと目を開ける。傍でリキュールが安堵の声を上げた。

「………どうなった？ 俺達、吹き飛ばされて……」

俺もリキュールも………なんと宙に浮いていた。

………いや、ここは空じゃない。

証拠に雲も………風だってない。

「………っていうか、これって……」

ここには重力が無いようだった。天地も分からない。感じ方によつては自分達が横向きにも斜めにも下向きにも存在しているように

思える。

『奴の支配下に飛ばされた』

声に見上げる。いつものように俺の傍に平然と立つ赤毛の大男の姿にほっと胸を撫で下ろした。

「エンペラー？ よかった……消し飛んだように見えたから……」  
『そうですね。世にも乱暴な歓迎でした。返答次第では』

テンパレンスはあさつての方向を向いていた。……いや。これは、飛ばされる前の 地下礼拝堂に居た時の様子と変わらない。彼女はただ前方を、デインの背の奥を睨んでいる……、

『ただではすみませんよ。ホイールオブフォーチュン』  
『申し訳ありませんテンパレンス。久しぶりに貴女に会えたものですから少しはしゃいでしまいました』

脳裏に直接響く子供の声と共に、テンパレンスの睨んでいる方向に何かが出現する。

「……………！」  
「何……………あれ……………」

俺達の前に現れたのは、一枚の大きな大きな石板だった。視界に収まりきれない程大きなそれには記号のような文様が刻まれていた。円形で、水車のようにその場で少しずつ右回りに回転している。

随分古いものなのか石板には所々に輝が入り、あちこちが小さく欠けている。ギツ……………ギツ……………と回転する度に、石屑がばらばらと



俺の声にきよとんと大きな黒目を向けるリキユール。

「アルカナ？ 神様では……？」

『ええ。エビル・アストワルドの言う通りです。貴女のテンパレンスやエンペラーと同じく僕もアルカナの一人。ですから、そんなに畏まらないでください。ただ、人に憑くか大地に憑くかの違いがあるだけで、彼等となんら変わりありません』

「そ、そうなの！？ テンパレンス、あなた神様なの！？」

響く子供の声にぐりんと首を動かすと、胸の前で両手を組んだりキユールは目をキラキラさせてテンパレンスに詰め寄った。

『……まあ、彼と同種なのは確かですが、そもそもホイールオブフオーチュンが神かといえはそうではなく……』

あ、珍しい。テンパレンスが困ってる。

「連れてきた。今代の適格者だ」

ディンの重い声が空気を変える。

『ああ。ご苦労さまです聖職師。……しかし、一人足りないようですが』

「連れてきて欲しいのなら、おまえが説得しろ。あれは聖職師の言葉は聞かん」

『……まあ、やっぱり……そうですね、うん……彼女達には他の手段で来てもらうことにしましょう』

うわすごい。ディンの奴は神様に向かってタメ口だ。

聖職師っていうのはそんなにエライ存在なのか。……って、神様じゃないんだっけ。あの古時計。

『聞こえてますよエビル・エストワルド』

げ！ 心を読んだ！

「す、スミマセン二度と思いません大きな古時計なんて！」

「エビル！ ヨウイスの神様にむかって失礼なんだから、そんな、大きな……なんて……！」

『ぎゃーはははははははは！ お、おじいさんの………わははははは！』

肩を震わせながら懸命に笑いを堪えて変な顔になってるリキユールと、再び腹を抱えて笑い転げるエンペラー………って、……あの、テンパレンス？ なんか肩、震えてない………？

『……貴方は本当に………まあ、先代の適格者もそんな感じでしたか』

「………」

溜息をつく古………もとい、ホイールオブフォーチュンに、ここまでくるとすごいぞ無言で突っ立っているディン。

「先代って、俺の前のエンペラーの………」

『そうです。貴方の前のエンペラーの適格者にも僕はここで会った事があります』

俺の前の適格者。

確か、そいつが死んだから、エンペラーは俺に憑いたんだよな。

『……つて、おい古時計。余計な話は……』

笑いを止め身を起こすと、急に真顔になるエンペラー。

『いいじゃないですかエンペラー。彼はもう死んだ。そして、今から話すことは彼に繋がることでもある』

ホイールオブフォーチュンの言葉に苦い顔で舌打ちする。

『……そうじゃないかと思っていたんだが……』

『どういうこと？ 古……ホイールオブフォーチュンさん。エビルの前のエンペラーの適格者さんの話って……』

『呼び捨てで構いませんよりリキュール・ヴァライエティ・クレイドウル。しかし……テンパレンス。エンペラーはともかく、貴女も彼女に何も話していないのですね』

『……リキュルが知る必要はありません』

『もー、いつも言ってるでしょテンパレンス、それはわたしが決めるの。勝手に判断しちゃだめって！』

『ですが、リキュル。貴女はエンペラー達とは何のかかわりも無い……』

『……  
』そうね、一昨日までは。でも、もう知り合ってる』

『……リキュル……』  
『止めても無駄ですよテンパレンス。彼女の性格なら知り尽くしているはず。』

それにアルカナの適格者である彼女もまた、大きな流れの渦中にいる。エンペラーやその適格者、エビル・アストワルドに関わろうと関わるまいとそれは変わりません。彼等に責はない。それは、貴女もご存知でしょう』

『……』

「何の話だよ？俺達と接触したからってリキユがどうにかなるか？」

『どうにもなりません。が、エビル・アストワールド。エンペラーの適格者である貴方には使命がある』

「……使命だ？」

『貴方もリキユール・ヴァライエティ・クレイドウルもそれを訊きにここへ来られたのでしよう』

リキユと顔を見合わせる。俺達はディンの「ついてこい」の理由を聞きにきたのだ。

『基本的なことからお話ししなければなりませんね。先ず、アルカナには皆、世界 というよりも、人類を護る為にやらなければならない事があります』

「やらなければならないこと？」

『ええ。僕達が神と呼ばれるのはここから来ているものだと思われ  
ます。』

まあ、ここ十数年、ヨウイスに彼等の気配を感じたことはありません。ですからリキユール・ヴァライエティ・クレイドウルは知らないでしょう。テンパレンスも話していないようですし、これは当然です。

しかし、貴女以外の適格者は恐らく全員、己に憑いたアルカナからその存在を聞いている。既にエンペラーとエビル・アストワールドは何度か接触しこれを成している』

「ああ……あれ」

ホイールの言葉で、これまでに数回遭遇した”奴”の印象が、脳裏に鮮明に蘇る。

……あれは。まるで生きる屍だ。

「何？ エビル知ってるの？」

「まあ、あんまり気持ちのいいもんでは、ない。テンパレンスが話したくないってのも解るよ」

「……………」

「その名をフールと言う」

「フール…………？」

「彼はこの世界中どこにでも存在します。何故なら、彼は人に憑くからです」

「それって…………」

「そうです。彼はアルカナです。但し。フールだけは自由意志で、無制限に人に憑きます」

「自由意志？ アルカナは自由ではないの？」

「ええ。誰に憑くか、そこに意志はありません。特に人に憑くアルカナの場合は憑いた人間が死ぬと、世界に現存する存在の内、一番適した人間の元へ強制的に飛ばされる。彼等が適格者を選んでいる訳ではないのです」

「……………そうなの？ テンパレンス」

「ええ」

「アルカナは、僕、エンペラー、テンパレンスを含め、二十二います。それぞれ、大地に憑いた者、人に憑く者、精霊に憑いた者といいますが、フールだけは特殊なのです。彼は無尽蔵に己のコピーを生み出し、人を欺く」

「欺く？」

「ええ。唆して人に獲り憑いた後、人の欲望を実行するのです。その後は……………」

「理性を食べてしまう」

「テンパレンス…………」

「ええ。願いを叶える代償として、人の理性と魂を貪り食い……………結果、廃人が誕生します。ただの廃人ではありません。それは愚者そのものです。愚者は持ち主のいなくなつた肉体を使って自由気まま

に人々を襲います』

「……………人を？」

『ええ』

「……………アルカナ、なんでしょ？」

『はい』

「テンパレンスと同じ……………なのに、どうして？」

『……………』

「どうしてそんなことを？」

『残念ながら、リキユール・ヴァライエティ・クレイドウル。アルカナとは得てしてそういうものです』

「そんなことない！ テンパレンスは……………エンペラーさんも違うよ」  
『いいえ。アルカナとは人の欲望を叶える為の存在です。有……………正  
の力として使うか、無……………負の力として使うかの違いで全く別の性  
質に見えるだけです』

「……………』

『フルルとは、二十二あるアルカナの中で唯一無の性質を持つ者。  
負の願望に反応するアルカナなのです。つまり。

そこに居るエンペラーやテンパレンスは人の「生」という願望を糧にして存在する。そこに正義も悪もない。自身が憑いた人の感情で彼等は動きます。ですから適格者以外の人間にとつては、彼等は天使になったり悪魔になったりする。人にとつて強力すぎる力というものは得てしてそういうものです。恐れられ、忌み嫌われる。人々の不安を除去する為というお題目で、聖職者は狩ろうとしますし。

一方僕のような大地に憑いたアルカナは、大地の「育む」というやはり「生」の概念を糧にして存在しています。大地には人のような激しい感情は無い。振り回されはしない。ですから僕達は人に憑くアルカナと違い、暴走することもなく僕達のまま在り続ける事が出来る。それに「大地」なんて、人にはどうしようも動かせない存在でしょう？ 人は大地が無ければ生きられません。だから人は僕達を神と呼ぶのだと僕は考えます。

しかしフルは全ての負のエネルギーを糧に存在します。人の負に憑き、人、地、植物……あらゆるものの負の感情を吸収し無限に増える。そうやって、憑いた者の負の感情を最大限に引き出し、その人間の欲望のままに世界を荒らす。行き着く先は滅亡。フルが狙っているのは、世界の消滅です。「生」を糧にしている正のアルカナは、正であるが故にこれを防ぎたいと考えます。故にそれは適格者達の使命となるのです」

「……………全然知らなかった……………です」  
『リキュ……………』

『それは仕方のないことです』

「けどさ。フルについては今までと同じに発見次第、撃破していけばいいだけの話だろ？ それがなんだってデインについてかなきゃならない理由になるんだ？ フールはどこにでも出没する。固まってるよりは散らばってた方がいいような気がするけど。大体デインはどこに行こうってんだよ？」

「私は各地の聖堂を回った後、ザートウル二大聖堂に戻る」

それまで黙って聞いていたデインが俺を振り返った。

「俺達に聖堂巡りさせようってか？」

『そのとおりです。エビル・アストワルド』

「はあ？」

「そんなことをすれば、捕まってしまうのでは……………」

『その為の聖職師です。各聖堂の聖職者は聖職師には逆らえない』

「そりゃ……………デインの力は化け物級だけど……………」

「わたしたちが聖堂を回ることと、フルの攻撃を防ぐことと、何か関係があるのですか？」

『察しがよいですね。リキュール・ヴァライエティ・クレイドウル。』

まあ、本当に聖堂巡りが必要なのはエンペラー……………もっと言えば、エビル・アストワルドのみなのですが』

「俺がなんだってんだよ？」

『エンペラーには、フルルの各個撃破ではなく、フルル本体を叩いてもらいたいのです』

「……………って、出来るのか？」

俺が視線を寄こすと、エンペラーはしばらく視線を宙に彷徨わせた後、肩を竦めてみせた。

『少なくとも、いまのままでは勝てないという事は前回で証明されています』

「前……………回？」

前回って……………前にもフルル本体に挑んだことがあるって事か。奴は。

『二十二のアルカナのうち、自由に動けるアルカナ 人に憑くアルカナの中で、フルルの消滅を実行し得る可能性が一番高いアルカナはエンペラーです。これは大聖堂のあるザートウル二大陸に憑いている最強のアルカナ、ワールドが告げた言葉です。ですからどんなに悪い噂がたとえと、エンペラーとその適格者を殺そうとする聖職師はいないはず。殺してしまつてはフルル退治もままなりませんから』

「でも、勝てないってさつき……………」

『ええ。前回の適格者と共にフルルに戦いを挑んだエンペラーは、結果、敗れています。前の適格者はその戦いの際に命を落としました』

「……………なんだって？」

『……………別に、隠していたつもりはなかったんだが……………』

ばつが悪そうにそっぽを向くエンペラー。

「知ってたの？ テンパレンス」  
「……………ええ、まあ……………」

テンパレンスまでもが、リキユの視線を受け、ばつが悪そうにそっぽを向いていたりする。

「知つての通りアルカナは不死身です。フルに敗れた後、エンペラーは瞬時に新たな適格者 エビル・アストワルドの元へ飛ばされ、彼に憑きました。これはエビル・アストワルドが六歳の時ですね」

「ああ……………確かそのくらいだったよな……………って。何でそんなこと知ってるんだよ」

「僕の能力です。エビル・アストワルド。僕はフル以外のあらゆる存在の運命に介入する力を持つ」

「……………じゃあ」

「ええ。僕の力は見通す力。僕は貴方の過去 フールに敗れたエンペラーが誰に憑き、その結果、何が起こるのかを知っていました。僕は今、過去現在未来。全てを見通して話をしています」

「……………！」

「……………土地に憑いてるアルカナには特殊能力を持つ奴が多からな。おかげで奴にでも「神様」なんてのが務まってんだろ」  
「まあ、知っていたところで僕にはどうする事も出来ませんでした。マルテイス大陸にはタワーが憑いている。何か考えあつての事だとは思いますが」

「エビル？ ……大丈夫？ 顔真つ青だよ？」

リキユールの手が触れる。

アルカナ「テンパレンス」の能力を持つ、指が。

「……………っ！」

反射的に、彼女の手を振り払ってしまった。

「……………エビル？」

きょとんとした顔のリキュールにあつとなる。

「……………ご、ごめん！ ……その、ちょい疲れただけ！ 少し休めば大丈夫だから」

「……………そう？」

「ああ……………」

「話を続けますね」

淡々とした子供の声にリキュールがそちらを振り返った。気づかれないようにそっと息を吐く。

「前回のフルとの戦いの話に戻りますが。その戦いの前に、僕の元を訪れた者がいます」

「……………成る程な。それがディンか」

感情の無い声でエンペラーがぼそつと吐いた。

「ええ。エンペラーにしては察しがいいですね。僕は僕に答えられる範囲で彼に入れ知恵をしました」

「答えられる範囲？」

「そうです。幾ら先を知っていても大地　世界ディースに縛られている僕には、人間に授けられる知識に制限があります。これは大地に憑く七アルカナ全てに存在する戒めなのですが……………これについては詳しい事は語れません」

「んで？ おまえさんは俺様の知らない所で一体何をくっちゃべつてくれたんだ？ ホイール」

「彼の行動を見れば解るでしょう」

「……エンペラーの特殊能力のことかしら？」

「ええ。テンパレンスの言う通りです。他のアルカナと同じくエンペラーにも、とある特殊能力が備わっています。それこそがフルルの対抗手段です」

「特殊能力だ？」

言われて首を傾げる。

……はて。そんな便利そうなもの、何かあったっけか……。

「エンペラーの戦闘手段を思い出してくださいエビル・アストワルド。彼の戦い方はシンプルだ。如何なるものも大剣でぶった切る。言ってしまうえば、力だけで押し切る力馬鹿さんです」

「寿命を待たず廃棄処分してやろうか？ 大きな古時計さんよ？」

言つて、握り拳をわなわな震わせるエンペラー。しかし動じた様子も無くホイールオブフォーチュンは続けた。

「しかしそれだけではフルルには敵いません。そこでエンペラーとエビル・アストワルドには該当する聖堂を巡っていただいで、ですね。対フルル戦の前に、とある付属品サポーターをつけてもらいたいです」

「……………サポーターだ？」

俺とエンペラーの声が見事にハモった。

そんなこんなで。古時計の特殊な空間で結構な時間を過ごした。朝日でも拝めるかもしれないと思いきや、現実の世界の様子は地下に入る前とさほど変わりはなかった。あの特殊な空間では時間も経たないのである。

聖堂の時計は、十一時半過ぎを示していた。

俺とデイン、リキユールとテンパレンスは聖堂を出て、揃って帰路についていた。

リキユールは、今晩は城に泊まり、明朝王様にホイールオブフォーチュンの言葉を報告するという。

「ねえエビル。エンペラーさんはどうしたの？」

聖堂に向かう時と同様、デインの後ろを歩いていたリキユールがくるりと俺を振り返った。

「ああ……なんか、他にも訊きたい事があるとかで一人で古時計の所に残った。宿屋の場所も知ってるし、用が済んだら合流するんじゃないか？ ただでさえあそこ時間経たないみたいだし、すぐに追いかけてくるだろ」

「ふうん……？ 一緒にいる時に訊いたらよかったのに」

「ホイールオブフォーチュンが人に伝える事には制限がある。リキユたちが居ては出来ない話だったのでしょ」

「テンパレンスはよかったの？ 訊きたい事」

「え？」

「あつたんでしょ？」

「……ええ。ですが奴が素直に教えてくれるかどうか」

「……って事は。実は相当な捻くれ者か？ あの古時計」

『ええ……まあ……。何しろ未来が見えているそうですから』

「？ そんなもんなのかなあ……」

『私には、奴がまだ何かを隠しているように思えるのです』

「……………」

隠している、か……。

「隠しているっていうより、言う必要が無い、か、もしくは言えな  
いだけかも。制限されてるんでしょ？」

『まあそれはそうかもしれませんが……』

リキユールの言葉に、顎に手をあて何事かを思索している様子の  
テンパレンス。

「テンパレンスは古時計も苦手なんだな」

『は？』

俺の言葉に、テンパレンスは振り返ると間の抜けた声をあげた。

「いやほら。テンパレンスってエンペラーを毛嫌いしてるだろ？」

話聞いていると、それと同じかなあって……」

『全然違います』

こつちが引くほど、鮮やかな即答だった。

「……………」

『ええ。苦手と言っているのであれば他にもいますし。それにエンペラー  
に関しては嫌つというよりも…………』

「何」

『……いえ。やめましょうこのような不毛な話は。それよりもリキ

』

「なに？」

『貴女は結局どうするつもりですか。その様子からは迷いを感じられません。決断したのでしょうか』

「！ そうなのか？」

「うん、まあ……お父様に報告してから、と思ったんだけど……」

言ってリキユールは立ち止まるとくるりと振り返り、俺達の顔を見回してこほんと咳払いした。

「えっと。わたしもディンさんについていきたいと思います。みなさん、不束者ですがよろしくお願いします」

深々と頭を下げる。見ると、先頭を黙々と歩いていたディンまでもいつのまにかリキユールを見ていた。

『やはりそうですか』

溜息のテンパレンス。

「ふ、不束者って……。それに、”も”ってなんだよ、”も”ってのは」

「え？ 当然エビル達は行くんでしょ？ 違うの？」

「……………」

リキユールの発言の瞬間、膨れ上がる殺気。先頭で放つディンの無言の圧力につつとなる。

そりゃあ選択権はおまえたちにあるつつたつて俺に与えられたのはたつたの二択で、ついてくるか死ぬか……だったもんな。うん。問答無用だった。

「そりゃ、……別に今後の予定もないし。ディンの目的って、要するにエンペラーを強くして、フールの大元をぶっ潰すって事だろ？ 行かない理由がない」  
「エビルそれ変だよ」

俺の言葉に、何故か不機嫌そうに頬を膨らますリキュール。

「何が？」

「予定も無ければ断る理由もなしって、やる事ないから付き合ってるーって言ってるみたい。エビルの意志がないっていうか。そもそもエビル、選んでない」  
「そんなことないよ。ついてくって意思表示してるじゃん……」

と、ずしつと何かが頭上に乗った。

『勘弁してやってよ姫さん。こいつ昔からこうなんだ。根っからの面倒臭がりなの』

見上げれば、いつからそこに居たのか。エンペラーの太い腕が俺の頭に乗っかっていた……って、こいつめ。半透明なところ、わざわざ魔力使って影響受けさせることか？ これ。

「お帰りなさい、エンペラーさん」

「……誰が面倒臭がりだよ、おまえに言われたくは……!!」  
「確認は終わったのか」

遮るように低い声が響いた。見ると、ディンがエンペラーを直視している。

『……ああ。一応はな』

視線だけを合わせて不機嫌に言い放つエンペラー。

『つつか、あいつ。幾ら訊こうが全然吐かねー。根性悪いんでやんの』

「あ、やっぱりそうなんだ？」

『まあ奴らしいですけどね』

『久々だってんのに愛想ないしよ。ったくあの大きな古時計野郎、生意気だつて』

「……いいの？ そんなこと言つても。ホイールさんこのヨウイスの土地の神様なんだし。今も聞いてるんじゃない？」

「そんな怯えなくなつて大丈夫だつてリキユ」

『そうそう。もう訊くだけ聞いたし、当面合わせるこたないだろ』  
『あなたたちは……。一つ忠告しておきますが、奴は根に持つタイプですよ？』

「テンパレンスまで。心配性だなあ。あんな石板怖くもなんともないって」

『どうせ古時計の奴、怒ろつにもあそこから動けないだろ、こつちから行かなきゃどうやつたつて仕返しなんて出来ねー……』

その時。

ゴゴゴと音を立てて、地面が大きく揺れ動いた。

「……じ、地震……？」

『……』

貴方方。そんなに僕を怒らせたいのですか？

なんだかそんな子供の声が聞こえてきそうな揺れが一、二分ほど

続いた。

間も無く、怒りの大地はゆっくりと静まった。

「……ほらね怒ってる。旅立つ前にちゃんと謝りに行った方がいいよ二人とも」

「えー、面倒臭え……」

「……ちゃんと聞いてますよ……ってか。相変わらず根性悪い……」  
「エビル！ エンペラーさんも！ これ以上怒らせて街が壊れちゃうような事態になったらわたしとテンパレンスも黙ってないんだからね！ ね、テンパレンス！」

「ええ。どうやら彼ら、命は惜しくないようです。リキユのお許しが出た暁には、貴方方の望み通り、この私が腕によりをかけて、二人まとめてじっくりたっぷり料理してさし上げるとしましょう。ええ、腕によりをかけて」

「………スンマセンもうしません！」

エンペラーと二人、背筋をびしっと伸ばして声を揃える。

俺達にとっては地震よりヨウイスの神様よりこっちの方が断然恐い。

って、これは………ひょっとしなくても謀りやがったのか？

あの古時計。

## 19・エンペラーの心

同じ宿で迎える、二日目の朝。恐らくこの宿も今日で最後だろう。天井をボーッと見上げながら、なんとなく思った。すっかり。

リュックをちらりと見た。チャンスは幾らだってあったのに。俺は未だに当初の目的が果たせずにいる。

溜息をついて目を閉じる。

きつと遅くても明日にはどこかの聖堂へ旅立たなくてはならないだろう。

旅立ちのリキュール待ちだ。

今頃、リキュールは王様に報告しているのかもしれない。

そこで脳裏に浮かんだ、王様のあの後姿。

……少し気になった。

そもそも彼女はお姫様だ。

この国を出て戦いの場へ出る事を王は……国民はよしとするのだろうか。

それに、デインの目的はエンペラーを強くする事なのだから、彼女がついていく必要はないのでは……。

『エビル。起きてるか』

エンペラーの声が無遠慮に響いて思考を止めた。

「……まあ、さすがに。もう十一時だしな」

仰向けに寝転がったまま、そちらを見ずに口を開く。

『体はどうだ』

「昨日よりはいいよ」

しかし、珍しい。いつも寝てばっかで起こしても起きないような奴がもう起きてる？ 一人で？ そんなばかな。

……ひょっとして。奴は寝ていないのでは……、

『そうか』

何か用があるから声をかけたのだろうに、奴はそれっきり口を噤んでしまった。

「……………」

……いよいよおかしい。俺は固いベッドから上半身を起こして様子を見遣る。

エンペラーはいつものように入口近くの壁に凭れて突っ立っていた。腕を組んで、視線を落として

『なんだよ？』

こちらに気づくと、なんだか不機嫌そうな視線を寄こした。

「こつちのセリフだ。おまえ、何か言いたい事でもあんの？」

『は？』

「なんだか気持ち悪いぞ。今日のおまえ」

『俺様が？ どこが？』

心底不思議そうに眉を顰めるエンペラー。どこがつつつたら……そりやおまえ。

「……………全部？」

『あいな』

「冗談。おまえが全身キンピカで目に痛いのはもう慣れた」

『キンピカって……。別に好き好んで武装してるわけじゃあ……』

「嘘付け好きなくせに」

『……そりゃ、嫌いじゃねーけど』

だろうな。こいつの性格上、気にいらぬものを元々備わっていらぬものだからってそのまま身に付け続ける、だなんて、ありえない。

「まあ、キンピカは置いといてさ。本当にどうしたんだよ？ おまえのその面、何か考え事してたんだろ？」

『……まあ』

「長い付き合いだしわかるって、そんなくらい。大体エンペラーは隠し事できない性質なんだからさ。で？ 何考えてたんだよ？」

『別に。つまんねーことだよ』

「どうせ暇だし。俺にもつき合わせて」

『……………』

深々と溜息をついた後、観念したようにエンペラーは俺に向き直った。

大股で近づいて、俺の寝ているベッドに腰を下ろす。背中を向けたまま、そのうちポツリと呟いた。

『昨日の夜。姫さんが言った言葉、覚えてるか』

「リキュールが？」

『おまえの意志がないっていう、アレ』

「ああ……………」

予定も無ければ断る理由もなしって、やる事ないから付き合い合っただけって言うってみたい。エビルの意志がないってどうか。

そもそもエビル、選んでない

あれか。

「それが？」

『ちゃんと決めた方がいいと思う。俺様も』

「……………は？」

『うん、だな。やっぱちゃんとおまえが決めるや。行くか行かんか。デインとか姫さんとか関係なしに』

「……………ひよつとしなくても、行きたくないのか？ エンペラー」  
『俺様は正直、どっちでもいい。別に行こうが、行くまいが。行かなくなつてデインと戦うだけだからよ。フル退治なら今までどおり個人でやれる』

目から鱗だった。

呆けた表情のまま口を開く。

「……………そっか。言われてみれば、別に行く必要も無いわけか。デインに殺られて死ぬかもしれないけど」

『ああ、そうなんだよ』

「だよな。なんか俺、あの古時計にすっかりのせられてた」

『だろっつが』

「あの言い方、俺とエンペラーがやらなきゃならないって半ば強制だったから」

『いや。それは多分本当の事だろ』

「……………ん？」

『どんなに捻くれてようが、古時計の奴は嘘は言わん。ワールドが言ってたつってたし。今動ける連中で、フル自身を討つのに一番適してんのは俺様なんだろう』

「……………おまえが何言いたいのかわかんないんだけど。要するに、

俺達が行った方がいい訳？」

『俺様はどーでもいいって考えてるわけ』

「行った方がいいってんなら、行った方がいいんじゃない？」

『だからさ、そういうの一旦抜きにしてだ。俺様はおまえに決めて欲しいんだよ』

「？ だから、今決めてんじゃない……」

『いや。姫さんの言うとおり、これまでのおまえはただ周りに流されてただけだ。てめえの意志で決めた事が一つたりともねえ。一昨日の夜の事覚えてるか？ あの時デインの言葉におまえは固まった。理由わかるか？』

「デインの言葉……？ なんだったけか？」

『覚えてないんならそれでもいいけどさ。だからこそ、おまえに決めて欲しい、と思う。その方がいいと思う』

「決めてほしいうて……… 決めてんだけど。いままでだって俺が決めて色々動いてきたじゃ……」

『やる事なくなっただんなら、次に何をしようか、幾らでもおまえと一緒に悩んでやるさ、俺様だってな。俺様が憑いたのはおまえだ。』

口やかましい周りの声じゃなく、おまえに従うさ』

……遮られた。

エンペラーまで訳わかんねー事を言う。

「……エンペラー。俺は……」

言いかけたところで部屋の扉がバターンと破壊されんばかりに豪快に開かれた。

アスキー達がまた来たか！？ エンペラーと二人、思わず身構える。

「エビル！」

しかし飛び込んできたのは甲高い声。  
リキユールが真っ青な顔をして立っていた。

「……………なんだ。リキユールか……………どうした？ そんなに慌てて」

『慌てすぎだ姫さん、テンパレンスも連れていないじゃないか』  
「……………そういえば」

言われてみればあの清浄な気配が感じられない。リキユールはしばらく両膝に手をつけて肩で息をしていたが、手を貸そうとベッドを出た時、顔を上げて懇願するように俺達を見つめた。

「……………エビル……………っ お父様が……………！」

「王様が？」

「お父様が……………いなくなっちゃった！」

## 20 過去との対面

「王様が？」

「今朝、使用人さんがお部屋へ朝食を運んだ時には、既に蛻の殻だつたつて……今城の人達総出で城中を探してるんだけど、どこにも姿が……！」

「……………王様、具合悪いつつつてたよな。俺が昨日見た時も、……花火の時は毅然と振舞つてたけど、城の中じゃなんだかフラフラしてた」

「みんなの話じゃ相当悪いみたい。昨日帰った時にも寝込んでしまったとかで顔を見ていないの」

『寝込んで……そりゃ、一人娘が旅立つかも宣言した後だもんなあ』

「エンペラーは黙ってる。しかし……あんな体で、一体どこに」

「こんなこと街のみんなには言えなくて、城にテンパレンスを置いて一人で探し回ったのだけど……見つからなくて」

リキユールに水を飲ませた後、一緒に宿を出た。

三人で手分けして街中を探し回ったが……やはり見当たらない。

テンパレンスにも城に残って気配を探ってもらっているそうだが、街はともかく、近辺の森にも気配を感じ取れないという。

『黙ってるって言われたけど、思いついたからちよい進言。ひよつとしたら王さん、聖堂に行ったんじゃないか？』

門の前で合流した所で、エンペラーが片手を挙げた。

「聖堂？ なんで？」

『娘のこと訊きに。もしくはディーン……聖職師から守ろうとした、とか』

「……ありえるかも。あの後だしな。あの地下の部屋に入り込んでたりしたら、幾らテンパレンスでも見通せないかもしれない」

「地下で倒れてたりしたら……大変！」

『行くぞ、聖堂へ！』

なんて、意気込み勇んだ数秒後。

俺達は最悪の場面に遭遇してしまった。

さっきまでいなかったのに。噴水広場の中央　噴水の縁に足を組んで座り込んでいる青年が一人いる。

「………なんであんなところにアスキーが………」

『なんでかデスは居ないようだがなあ……。後で戦ってやるからちよい待ってくれ、なんて言葉、あの頭の固い野郎が聞くわけねーしなあ………』

建物の影に隠れてエンペラーと二人、頭を抱える。

『どっすっべエビル』

「どっすっべって言われても……おまえが俺達抱えて空飛んでいくとか」

『飛べるか！……む。さてはおまえ、俺様を鳥頭だと言いたいのか！？俺様は三步歩いてもテンパレンスのおっかない顔は決して忘れたりしないぞ！？』

「言っていない、言っていないから……っつうか死にたいのかおまえは」

『死にたくない故に忘れん！』

「どうしたの？エビル、エンペラー……？」

「どうしたって……リキユ、あのだ……」

『姫さん。悪いけど……このまま俺様達が城に向かうと大騒動を引き起こしかねないハタ迷惑ぼっちゃんが一人そこに居るわけ。なんとかして追い払わないと、俺様達ここから動けないんだわ』

「なにそれ。エンペラー、冗談言っでないで早く……！」

『冗談だといんだけどなあ……』

「本当、本当なんだってリキユール！ ほら、あそこに座ってるあの男……」

「男……？」

痲癢を起こして暴れ出そうとしたリキユールは、しかし素直に俺の指先を視線で追う。と、その先を視界に入れて、びしっと固まっってしまった。

「リキユール？ ……もしもし？ どうし……」

アスキーの姿をじーっと見つめた後、彼女はフラフラとそちらへ歩いていく。

「……どうしたんだリキユールの奴……危ないつつつてんのに」

一緒に出て行く訳にもいかないので、俺達は建物の影に隠れたままだ。

リキユールはフラフラとアスキーに近寄った。アスキーがそちらに気づく。

『……なあ。エビル。俺様、すっかり忘れてたんだけどさ』

「何」

『姫さんって、昨日遭遇したのはデスだけだっただろ。アスキーとは初対面じゃ……』

「あ」

失念していた。

彼女はアスキーの危険性を知らない。

それに昨日遭遇したデスは、テンパレンスを”敵”と認知したんじゃないかったか。

「止めなきや……!」

飛び出そうとした俺の前にエンペラーが立ちはだかった。

「エンペラー?」

『まあ。大丈夫だろ。奴も王だし、ここは街中だ。それに、あいつが狙ってるのは俺様達だけだろう? 昨日敵対したデスの奴も今はいないようだし』

「……………そうだった」

『万ーデスが戻ってきて、戦いになるようだったら……………止めるぞ。いつでも出れる様、万全の体勢でいろ』

「ああ……………」

俺達はこのまま二人の会話に耳を澄ます事にした。

「……………貴女は」

「もしか……………して、アスキー?」

「はい。覚えていてくれて光栄です。リキユール姫」

紳士的な笑みを浮かべたアスキー。立ち上がって優しく窺えば、軽くお辞儀する。

慌てたりキユールは、深々と頭を下げた。

思っていたのは百八十度違う展開に、俺とエンペラーの目が点になる。

「……………? 知り合い、なのか? あの二人」

『言われてみれば。違う国とは言え、王と王女だからなあ……………』

「納得。顔くらい合わせたことあるのかも」

こちらの心配をよそに、二人は和やかな雰囲気では話を続ける。  
……しかし。

なんとというか。あの一角だけ異様に煌びやかだなあ……。  
噴水のほりに佇む美男美少女に街行く人が次々に振り返った。  
が、既に絵画と化しているその光景に、声をかけようとする猛者は  
いなかった。

「お元気そうでなによります。……ここにおられるという事はもう、  
全快なされたのですか？」

「ぜんか……？ あ、は、はい！ おかげさまで……！」  
「そうですか。それはよかったです」

しどろもどろのリキュールの様子を穏やかに見つめるアスキー。

「……………」

なんだろう。なんとなく。……変な空気だ。  
なんとなく、おもしろくない。

「……………あのさ。エンペラー」  
『なに？』

「あの様子じゃ大丈夫みたいだし、俺達聖堂に先行しないか？ 積  
もる話もあんだろ」

『はあ？』

俺の提案に素っとな狂な声をあげるエンペラー。気づいたリキュ  
ールがびくと肩を鳴らした。

「あ、ごめんなさい、アスキー！ わたし今、人を待たせていて……！」

「へえ。……お友達ですか？」

「はい。実はちょっととした事情があつて……」

二、三言、口にした後、リキユールはこちらへ走ってきた。

アスキーがこちらを向いたから、俺達は壁にビタンと張り付いて身を隠す。

「ごめん、エビル、エンペラー。知り合いに会っちゃって……」

「……ああ、俺達も驚いてたところ」

「一体どこで知り合つたんだよ？」

「彼を知ってるの？ 二人とも」

『いや、知ってるもなにも……』

嬉しそうに問い返すリキユールにしろどもどろで答えるエンペラー。俺達の苦い顔にも気づかないのか、彼女はそのまま嬉々として説明する。

「アスキーとは十年前に数日間だけあの塔で一緒に過ごした事があつてね……」

『塔？ ……つて、十年前……だつて？』

なんともなしに聞いていた、エンペラーの表情が一変する。

明らかに妙な態度を見せた俺を不思議に思い、問おうとリキユールが開口した時、

「おや……こんなところにいたのですね。エビル・アストワールド」

アスキーの声が、やけに間近で聞こえた。

ギクつとしてそちらを向く。

いつのまにか、アスキーがリキュールの後ろに立っていた。

友好的な紳士の表情は、もはや顔面に張り付いているだけの仮面だった。

「……………アスキー？　どうかしました？」

問われてリキュールに向き直るも、未だ浮かべる笑みは強張ったままで。

「姫。この方々は……………」

「あ、すみません。紹介します。彼はエビルと言って、さっき言っていたわたしの……………」

リキュールの言葉を聞きながら、ゆっくりと視線を俺へと移す。

「……………エビル・アストワルドが……………貴女の？」

衝撃を受けたような表情になったアスキー。不愉快の色を露にして俺達に向き直った。

「……………なんだよ」

「……………ラクリモサ、という街を知っていますか？」

ガツンと、後頭部を殴りつけられたような衝撃。

あ。問うんだ。

よりもよって、リキュールの前で。

……………いや、前だからこそ、そういうことを言うのか。

「どうしました？　貴方の事だからもう忘れてしまったのかもしれ

「ませんが」  
「エビル？」

リキユールは俺の顔色を見、不思議そうな声を出す。

「僕は、マルティス大陸、カルブンクルス国の王。アスキー・ボー・カルブンクルス。ラクリモサとは僕の治めていた街の一つでした」  
「……アスキー？ どうしたの？」  
「申し訳ありません姫。ですが、この者こそ。僕が追う輩なのです」

突如、アスキーの背後に発生した黒い霧がマントのように彼の全身を包む。

「……なんだあ？」  
「……アスキー……！？」  
「無礼をお許しください、姫……！ ……どうしても衝動を抑えきれない。この十年間、僕は彼を仕留めるために各地を探し回っていたのですから……っ」

野郎が纏う、この……禍々しいオーラは。  
デスの……！

「……！ おまえ……まさか……」  
『離れるエビル、姫さん！ 奴は殺る気だ！』

エンペラーの声が聞こえた。だが……！

「アスキー……貴方まさか……」

戸惑いの表情を浮かべてリキユールが声を上げた時だった。

「今日こそ仕留める！ 『悪魔の子』 エビル・アストワールド！」

黒い霧が四散する。

「リキユール！」

若き王の叫びと、俺がリキユールを突き飛ばすのはほぼ同時だった。

王の胎内で一気に膨張し、旋風となって辺り一面を吹き飛ばすオーラ。

衝撃を正面から、交差させた両手で受け流す。

『大丈夫か姫さん』

「……………ええ、でも……………！」

地に転がったリキユールが慌てて体勢を起こすと、若き王の後ろには、黒い黒い、虚ろな死神の影があった。

「……………まさか、そんな……………アスキーがデスの……………？」

『デスはいなかった訳じゃない。気配を殺して、奴の周りにいやがった……………！ テンパレンスなら気づけたんだろっが……………』

リキユールの声のした方から、エンペラーの舌打ちが聞こえる。

俺は、アスキーと向かい合っていた。

「……………こんな昼間っから街中でおっぱじめる気がよ……………王のくせに分別ねえなあこのアヴェンジャーが……………！」

俺の問いに、若き王は歪んだ笑みを下ろす。

「よくもぬけぬけと……誰のせいだと思っている……？」

「……」  
「そうだ。おまえが僕の国を死に追いやった直後……僕にも降りてきたのだ。……悪魔と呼ばれる存在が。」

「……この力は、おまえに復讐するために神から授かったものだと僕は解している」

「待ってください……！」

リキュールが俺の前に飛び出してきた。

「どうしてですか……？ 優しい貴方が……一体なぜ復讐など……！」

「知らないのですか？ リキュール姫。おめおめと生き延びているその男は、十年前、我が国を滅ぼした張本人なのです」

「……え」

「たった一人で、たくさんの命を奪い、一瞬で大陸を半壊させてしまった」

「……」

ゆっくりと振り返る。

リキュールの瞳が俺を見る。

「……知られた。」

知られた。知られてしまった。

「……」

彼女の視線を感じながら、視点は地を見据えたままピクリとも動かない。

彼女を見れない。

「エビル・アストワルドとは、元王都カルブンスの何万という国民の命をたった一瞬で奪った、『悪魔の子』と謳われる？アルカナ「エンペラー」の適格者です」

手足が震えていることに気づいた。

「……………エビル……………」

彼女の声にビクリと全身が震える。

真実を言われている。過去を知られているだけなのに、何故こんなにも怖い？

いや……………俺は、もしかしたら。

リキユールの目が、恐いのか？

「……………弁解もできないか。真実ですものね？」

アスキーは勝ち誇ったように悠然と語った。

「まったく。よくも生きられたものだ……………あんなにも沢山の命を奪っておきながら……………日常を消し去っておきながら……………！」

燻った感情と呪い。負の感情全てを俺にぶつけてくる。

……………そうなのだ。奴にとって俺という存在は、敵。闇そのものだ。そして、俺にとっては、奴は……………。

「……………いつか」

下を見ながら口を開く。

「誰かが、俺を殺しに来るとは思ってたんだ」

「……………そうですか。まあ、楽な死に方を選ばなかったのは、懸命です。しかし、それならば何故貴方はこれまで僕から逃げ回ってきたのですか？ 覚悟をしていたというのであれば僕に打たれてもよかったですでしょう」

そうなんだよな。

俺は、ただ……………エンペラーの影に隠れて、逃げ回っていただけなんだ。

アスキーに説明してこなかった。

過去そのものから逃げていた。

別にたくさん命を消し去っておいて、これ以上生きたいとか。たわけたことを思ってたわけじゃない。

死にたくなかったわけじゃない。

ただ、怖かったんだ。

俺が生きていることを、過去は決して許さない。それを、直視する事が。

「……………エビル」

リキユールの声がする。

過去が怖かった。

正面きって過去と向き合えなかった。

生きていること 罪と張り合う事が、どうしようもなく、恐かった。

……………けど。

「エビル」

……………このままでは、彼女と進めない。



吸い込まれそうになる、その直前

『よくぞ言った、エビル!』

俺の前に降りたエンペラーが、大剣で鎌を受け止めていた。

「エンペラー……?」

『過去と張り合うつもりなら、おまえ一人でなんか立たせやしない。俺様はおまえの一部だからな。おまえがきちつとメンチ切れるよう全力で盾になるさ』

「……………ああ……………!」

デスが後方へ跳躍する。

先ほどの着地から地に転がったまま、近くに居たりリキュールの姿を確認する。先ほど、デスの姿が現れた時に飛び散った衝撃波で意識を失ったのか、倒れたままピクリとも動かない。

「リキュール!？」

助け起こすと彼女の体温を感じた。上下する胸。……………どこにも外傷はないようだ。ホツとする。

『……………しっかし厄介だな……………こんな街中で』

エンペラーがボソリと呟いた。

「厄介……………どついう事だ?」

リキュールを抱えたまま身構えつつ問うと、

『奴と戦うのなら実体化した方がいいんだが……こんな所で実体化なんてしてみる。街がしっちゃんかめっちゃんかになるのは目に見えてる』

喋りながらも、エンペラーは大剣を器用に廻し、迫る鎌を受け流すと、次の大きな一振りですべて死神を後方へ吹き飛ばす。

勢いに身を任せて、主人の後方へ下がった死神。

「確かに。おまえらが実体化してたんなら、既に噴水なんか木っ端微塵なんだろうな……」

『しかし奴に各個撃破されてみる。どっちが攻撃されても、俺様達の繋がりが絶たれちまう』

「まあ……このままいけば俺は足手まとい確定だよな」

『別にこのままでも、倒す事なら一瞬で可能なんだが……』

「……………それは」

『おまえも納得しないだろ？』

「……………エンペラー」

『恐らくは、デインもな……………』

「……………？　なんでアイツの名前が出るんだよ？」

『……………デインとは今日も後で落ち合う事になったよな』

「ああ……………？　んつと……………三時に宿屋に来るはずだ」

『三時は遅いな。頭に血の昇ったぼっちゃん野郎が俺様達の話の聞くとは思えない。姫さんも意識ないみたいだし、テンパレンスは気配を追って飛んでくるだろ。……………ここは一旦ひくとするか』

「ひくつて……………宿屋へか？」

『聖堂に向かう。エビル。実体化するが、そのまま姫さん抱えとけ』  
「……………わかった！」

## 21・悪魔の子

/ / SIDE - Ri / /

目が覚めると、暗がりだった。

(……………ここは……………?)

瞬きを繰り返した後、身を起こさずに目だけで状況を確認する。その部屋は白い壁の狭い空間だった。目に付く家具は、木でできた机と椅子が一セットだけ。無機質な室内の角に置かれた小さくて硬いベッドに自分は寝かされていた。

小さな窓から、穏やかな午後の日差しが差し込んでいる。暗い室内を走る弱光を追うと、自分の寝ているベットに腰を下ろしていた人物に気づいた。

エビル・アストワルド。

「……………」

すぐに先ほどの光景が思い起こされる。

自分が意識を失った後、どうなったのか。

あの若い王は何処へ行ってしまったのか。

どうやってここまで来たのか、覚えていない。

……………ただ。

ただ、今、気がかりなのは……………。

(さっきの 背中……………)

意識を失う寸前、自分を庇うように立ったエビル。そして吹き飛ばされた時に 視界に入った彼の右手首。あれは確か……。見ると、エビルの身につけていた右手首のリストバンドが破れていた。

(……………やっぱり)

破れたリストバンドの隙間から、刻印が見える。

確か、エンペラーの刻印？は首の下 鎖骨の間にあると聞いた。だとするとあれは、二つめの刻印という事になる。

(……………何故)

刻印の形は、憑いているアルカナを示している。故に適格者がその身に宿す刻印は一つだけだ。そうテンパレンスに聞いた事がある。

「……………」

手を伸ばす。

自分が起きている事に気づいていたのか。その手首に触れると、エビルは微かに身じろぎはしたものの、自分を振り返る事はしなかった。

「……………エビル。読むよ」

抵抗の無い事を確認して、今度はしっかりとその手首を掴む。瞬間。

触れた肌から、鮮明な映像が噴き出した。

身に刻まれた刻印から、普段は固く閉ざしているエビルの記憶が流れ込んでくる

血。

血。

血。

赤い。

紅い。

朱い。

黒い。

それは。大量の血痕。

心に直接流れ込む光景は、地獄だった。

エビル・アストワールドとは、元王都カルブングルスの何万という国民の命をたった一瞬で奪った、『悪魔の子』と謳われる？アルカナ「エンペラー」の適格者です

……それはまさしく、彼の過去だった。

十年前のマルティス大陸　カルブングルス国。

カルブングルス城の兵士達はザートウル二大聖堂直々の命により、エンペラーの適格者を探し出す為、各街、村を廻っていた。

兵がエビルの住むラクリモサ街に辿り着いたその時、丁度エビルは街を離れていた。

マルティス聖堂の司教を務め、アルカナにも詳しくかった父は、事の顛末を充分すぎる程理解していた。エビルが捕まって殺されてしまつ事を恐れ、街の近くに城の兵の存在を認めるとすぐに、エビルを遠くへ使いに出した。

小さな街で、突然刻印が現れた子供　エビルの事は知れ渡っており、兵達が聖堂に併設しているアストワールド教会へ辿り着くのは

容易な事だった。両親に手を振って、エビルが裏口の戸を閉めたその瞬間、ノックの音が響いた

街へ戻ったエビルは、街の付近でたくさんの兵士に見つかり、追いつめられる。

訳も分からず逃げ回ったその間、彼は、変わり果てた街並を視界に入れた。

血生臭い街。転がる死体。血の水溜り。所々に咲く炎。

住み慣れた豊かな街は地獄と化していた。

悪夢のような光景から逃れるように、なんとか教会　家に辿り着き、エビルがダイニングに入った時、たくさんの料理が並ぶはずの食卓の上には、父母の生首が飾られていた。

家を張っていた数人の兵に気づかれ、取り押さえられた時。

母に贈ろうと帰り道に摘んで作った小さな花束が足元に落ちた時、また、エビルの意識も沈んだ。

エンペラーの暴走。

ほんの瞬きの間に、カルブングルス国はもはや住民のいないラクリモサ毎滅んだ。

独り生き残ったエビルは、エンペラーに促されるがままに焦土を離れる。

追及を逃れる為に。また、父との……最後となった約束を果たす為、世界中を旅する事になる。

彼がまだ、六歳の時だった。

「……………エビル」

顔を上げる。

エビルは、掴んだままでいたわたしの震える手を優しく扱った。

「……エンペラーが宿った奴には、最高で四つ、刻印がつくらしい」  
「よつつ……ひよつとして、これって……ホイールさんの言ってた……？」

「ああ……エンペラーが憑いた時にはなかったんだけどな」

苦笑してエビルは、付けていても意味の無いリストバンドを外した。

右手首の刻印が露になる。

?? ジャッジメント。

「エンペラーに聞いたんだ。これは、”火”なんだったって」  
「火って、四大精霊の……？」

「そう。十年前に憑いた。俺が、国を焼いたあの力……」

「……俺思うんだ。この刻印は、アスキーと同じでさ。罪の証……過去そのものだった」

淡々と語るエビルの横顔を、黙って見ていた。

「……もう解ったと思うけど。リキユール。俺は、アスキーの言ったとおりの奴なんだ。」

俺は、奴の国を滅ぼした。聖職者からは『悪魔の子』って呼ばれてる。俺を名前で呼ぶ聖職者は、ディンくらいのもんだよ」

「……」  
「けど、それでもまだ、おめおめと生きている」

「……」  
「殺されてもおかしくないのに、当然なのに」

「……」  
「また逃げた」

「……………エビル」

「フルを見つけて倒して、アルカナを消滅させる。こんな事が、もう二度と起こらないように、なんて……………そんな大義名分じゃない、本当は……………」

「……………エビル」

「死ぬのが、恐いだけなのかもしれない」

「……………エビル……………」

「笑えるよな。俺が滅ぼしたってのに。俺は、想像し難い程たくさんの人の人生を一瞬で奪い取ったってのに」

「エビル！」

「……………恐いなんて、言う資格、ないのにさ」

「……………っ」

エビルの震える背中を抱きしめた。

自分の言葉は、きっと届かない。

届かない所で、いつだって震えている、こんなことをしたってきつと、意味なんか無いのに。

「……………」

温かい。

エビルの体温を感じた。

エビルは生きてる。

……………生きてるんだ。

「……………どうして。キミは『助けて』って願わないの？」

「……………わかっただろ」

「生きる事が、罪だから？」

「……………そうだよ」

「生きたいと、願う事が罪だから？」

「……………ああ」

「ではなぜ」

「……………」

「なぜ、キミは生まれてきたの……………?」

自分の吐き出した涙声に、自分で怒れた。

決して泣くまいと決めたのに。感情任せに、答える者もない問いを、責めるように吐き出した。

否。ひよっとしたら自分は、彼を責めている。

どうして。

どうして、そんな風にしか……………、

「リキユール」

遮るように名前を呼ばれて、ビクつと体が震えた。

気づけばエビルの震えは止まっていた。

エビルはやっぱりと、わたしの腕を外す。

「見たからって、おまえが背負う事はないんだ」

「反射的に、顔を上げる。」

「ありがとう」

そう言って。

エビルは弱々しく、自分に微笑んだ。

初めて。

彼の本当の表情<sup>かお</sup>を、見た気がした。

/ / TO RETURN / /

## 22・デインの決断

リキユールが目覚めた後、俺達はエンペラー達が待機している隣の部屋　デインの借りている聖堂の客室に移動した。

客室といっても質素な造りで、中には木製のベッドと机と椅子があるだけだ。窓から穏やかな日の光が差し込んでいたが、それでも室内は薄暗かった。

「そうか……デスの適格者と知り合いだったか……」

呟いて、デインは考え込んでしまう。

「……姫。おまえは知っていたのか？　知り合いの王子がアルカナの適格者だという事を」

「いいえ。アスキーと会ったのは十歳の時で……まだ自分が適格者だという自覚もありませんでした。その時はデスの姿は見えませんでした。テンパレンスはわざと黙っていたようですけど……」

『リキユは知らなくてもいいことです』

「……テンパレンスつたら」

ぶうと頬を膨らまかせるリキユールの顔を見ないようにしてテンパレンスはしれつと口を開く。

『デスとその適格者がこの国に入った時。私は彼女に気づきませんでした。私が街や近辺で彼女の気配を感知したのは、一昨日、聖堂で彼女がエンペラーと戦闘を行った時。昨日、裏の森で遭遇した時。そして今日、先ほど広場でリキユと彼等が対面した時。この三度だけです。』

……気になってはいたのですが。昨日裏の森で彼女に遭遇した際、

彼女は突如その気配と共に我々の前に姿を現しました。去る時にも、まるで宙に解けるように、その気ごと消失……したように感じたのですが……」

「テンパレンスでも気配を察知できないか……デスは完全に気配を消す事が出来るのか……？ いや……」

「俺達との鉢合わせを狙ってやがったようだしな。エンペラーに居場所を気づかれたら敵わん……ってんで、死ぬ気で気配を殺してたんじゃないか？」

ベットに仰向けで寝転がりながら俺が言つと全員の視線がこちらに集中した。

「エビル……」

木の椅子に腰掛けた状態で、心配そうに俺を見るリキユール。

「アルカナ同士であれば、無意識だろうが、ある程度近づこうものなら判るだろう」

窓際でいつものように仁王立ちしていたディンが、エンペラーを見る。

視線に気づくと、戸口に凭れかかったまま、ゆるく首を振るエンペラー。

『近づいてもわからなかった。最初はぼっちゃん野郎一人かと思っただ程だ』

「あの時デス、黒い霧状になってたしな。俺、あんなの初めてみた」  
「……………」

ディンはしばし考えた後、顔を上げる。

「奴は今もおまえを探し回っているんだろ？」

「ああ。結局、詳細を話してる暇なんてなかったし。つつつか、聞く耳持たないって感じだったしな。エンペラーも言ってた。今後俺等がフル退治のために聖職師についてくつての、あんたから話した方がいいってな」

「そうか……。好都合だ」

「好都合？」

「デスを仲間に加える」

「……………！」

「嘘だろ！？」

立ち上がったリキュールが何かを反論する前にガバつと身を起こした。

「あんた、何を言ってるんだ？ 奴にとつちや天敵の「俺」が居るんだぜ？ それ知つてて、一緒に行動しろ、だなんて……………正気の沙汰と思えない」

「その者は、亡命国とはいえ、一国の王なんだろ？」

「はい、ですが……………」

「おまえが暴走した理由も知らない」

「！……………なんでんな事でめえが知つて……………！」

「悪いな。聖堂の個室の壁は薄いんだ。隣の部屋まで丸聞こえだ」

「……………マジか！？」

エンペラーを睨む。

『……………ちゃんとおまえに忠告しに行こうとしたぜ？ 俺様は。けど』

エンペラーが不機嫌な視線をちらりとディン、それからテンパレ

ンスに向けた。……成る程。止められたというわけか。

「趣味悪い……」

『貴方こそ言葉が悪い。それに、リキユに教えて何故私達に隠そうとしますか。これから行動を共にする者の過去であれば知っておきたいと思うのが普通でしょう』

「火種も知らないようでは対処の仕様もないだろう」

悪びれもなく言つてのける二人。

「……対処つて……ンな、一国ぶっ潰した理由なんて、話したところで事実が変わる訳じゃないだろ。『国を潰された王』にとつて俺は『敵』でしかない。現にアスキーは、もう十年も前から俺を追つてきてんだぜ？」

「敵を討つ責任か……。……だが、王として、知る責任もあるはずだ。聞く義務もな」

「けど……!!」

「これ以上おまえと話を続けても無駄なようだ」

デインは扉の前へ移動する。

「おい、デイン！」

「これから、デスとその適格者に接触する」

俺が呼び止めると、相変わらず威圧感を放つ大きな背中が開いた戸口でぴたりと止まる。

「……おまえたちはおまえたちでやる事があるのだろう」

それだけを言い放つと扉が閉まり、奴の背中は見えなくなった。

「……………マジかよ……………」

溜息をつきながら、再びベッドに仰向けになった。  
片腕で両目を覆うと目を瞑る。

「……………エビル」

真つ暗な視界の中、近くに立ったりキュールの心配そうな声がかかるが……………悪いけど今は平気な面でそちらに向き直ってやれる余裕もない。

……………アスキー達に……………接触するだと？

あいつらにとっちや、デインは『敵を保護しているらしい得体の知れない聖職師』なんだぞ？ おとなしく話を聞くとも思えない。大立ち回りになるのが目に見えているじゃないか……………。  
デインの申し出にアイツがなんて言うか。どんな面をするのか。はつきりいって、見物である。

『エビル、エンペラー。意気消沈している時に申し訳ないのですがクレイドウル王を捜してはもらえませんか。じきに日が暮れます。暗くなる前に王を見つきたいのですが……………』

「……………ああ。わかってる」

短く答えると、そのままの体勢で深呼吸一つ。

吸った息を腹の底から吐き出した後で、勢いよくベッドから身を起すと、

『……………手分けするか』

丁度エンペラーも凭れていた壁から背を離れた。

## 23・聖職師と死神

/ / SIDE - U S / /

日が沈もうとしていた。

アスキーは相変わらず、一人、噴水広場の縁に足を組んで座っていた。

夜気を孕んだ冷たい風が、後ろで一つに纏めた長い銀糸を攫う。整った顔立ちに灯る蒼い目は……何の感情も宿していなかった。

「……………そうですね」

溜息混じりに返答した後アスキーは、広場で無邪気に遊ぶ子供達の様子をなんとなく目で追った。

報告によると、エンペラーの気配は聖堂を出て、街中をでたらめに移動しているという。

また僕の目を攪乱させようとしている……？ いや……。

自分から逃れる事が目的なら、いつまでたっても街から出ようとならないのはおかしくないか。

そもそもこの街に入ってから、連中の動きは妙だった。

この十年間、連中は世界中を右往左往していた。それは追っ手聖職者や自分達の追跡を逃れる為なのだろう、街に滞在する事は稀で、あったとしても二日が限度。三日も同じ街に居座る事はこれまで一度たりともなかった。

おまけに。一度だって他人と行動を共にする事なかった連中が、今回に限っては、よりもよってあのクレイドルの姫とテンパレンスを連れている。

自分と姫が旧知の仲である事を知っていたのか。姫に匿ってもらったか。昨日森でテンパレンスと対峙したというデスの報告を受け、連中の思惑を探る為に一芝居打って出たという訳なのだが、思いのほか姫は連中に友好的で、エビル・アストワルドは自分の前でふざけているとしかとりよのない言動を吐き、拳句の果てには、またしても連中に逃げられてしまった。

エンペラーは強い。

自分達を相手にしても余裕を崩さず……いや、むしろ面白がつている風にも見て取れる。現に連中はこれまで、力の及ばなかった自分達に止めを刺す事なく、ひょうひょうと逃げ回ってきた。戦いの後はいつだって、屈辱感が心中を占めていた。

……やはり自分達の力では、連中には敵わないのか……。  
否。

デスも幾つかの特殊能力を併せ持っている。今回はその内の一つで見事連中の目を欺いてみせたではないか。

策を練り、出し抜いていつか、この手で刈り取る

アスキーは、自身の右腕を片方の手で強く握った。

自分は国の仇討ちを成さなければならない。

例え幾年かかろうとも、どう足掻いたところで敵わなくても。

それが、確かに。アスキー・ボー・カルブクルスの存在理由であるのだから

『夜風は体に障ります』

黒い法衣を身に纏った、半透明の細身の女性が告げた。

『このまま監視は続けますから。今日のところは宿へ戻りましょう、アスキー』

「ああ。……そうだな」

十年來の相棒に微笑むと、アスキーは素直に立ち上がる。

洗練された動作は、双肩に担う重責を微塵にも感じさせなかった。噴水の水が止まる。

子供達の楽しげな笑い声を背に、靴を鳴らして颯爽と歩き出し

「……デスの適格者だな」

その低い声に、目を見開いた。

いつからそこにいたのか。噴水広場におよそ似つかわしくない雰  
囲気を放つ、黒衣の大男に背中をとられていた。

同じく驚愕の表情を浮かべたまま身構えたデスを片手で制し、ゆ  
っくりと振り返る。

「貴方は……確か」

「一昨日の晩に一度会ったな。エンペラーとその適格者を保護して  
いる者、と言えはわかるか」

「……覚えています。貴方のような異質な気配を纏った聖職者を他  
に見たことはありませんから」

「聖職者、か。今はその肩書きすら怪しいものかもしれないがな。

訳あって今、アルカナの適格者であるエビル・アストワルド、リキ  
ユール・ヴァライエティ・クレイドゥルと行動を共にしている」

「その貴方が、何故僕に会いに？ ……」『お仲間』の命を狙う僕を  
止めるためですか？」

「似ているが、違う」

噴水の水が再び噴き出す。

夕闇の迫る公園。遊び足りないのか、楽しかった一日が終わる事  
が名残惜しいのか。一層大きな声を上げて子供達のはしゃぎまわっ  
ていた。その中心から、場を一瞬でぶち壊しかねない、物々しい気  
配が漂っている。大人は皆、息を潜めて、沈黙を保つ二人の動向を

窺っていた。

実際デインは、いつ大剣を振り回してもおかしくない雰囲気を全身から醸し出していたし、それを涼しげな顔で受け流しているアスキーも、いつアルカナと同化したっておかしくない程の膨大な殺気を冷たく光る蒼い瞳に宿していた。

まさに、一触即発といった彼らに、静かに降りる夜気

そして、デインが口を開く。

「我々と行動を共にしてもらいたい」

数秒後。

アスキーの表情が歪む。

「……………なんですって？」

「我々はある目的を旨に行動している。おまえの力が必要だ」

「……………冗談でしょう」

「冗談を言っている暇は無い」

言い放たれて、アスキーは改めて目の前の男を凝視した。

闇のかかる巨体は石像のように微動だにできなかった。全身から漂う威圧感。表情筋は決して動かさずに、無言で自分の言葉を待っている。

サングラスの奥の真意は読めない。

「……………『目的』、とは」

「フル本体の殲滅だ」

アスキーの背後に控えている女の顔つきが一変する。

「……………そんなことが？」

怪訝そうに見上げるアスキーの視線に、しかし動じないディン。

「可能だ。力が揃えばな」

なんてことはない、といった風に即答する。

「……………」  
「目的には、『おまえ』も『エンペラー』も必要だ」

……………成る程。

連中がこの街に滞在する理由がようやく掴めた気がした。

深く呼吸をし、穏やかでない心中を鎮めた後、アスキーはゆっくりと返答する。

「……………残念ですが、その誘いに乗る事はできない。エンペラーとその適格者は僕の生涯の敵。彼らと行動を共にする事は拷問に等しい。常に理性で感情を制御し続けなければならない。どうあっても不可能だ」

「生涯の敵、か。『エンペラー』はおまえの国を滅ぼしたそうだな？」

なんでもないことのように平然と言つてのけるディンに、アスキーは苛立ちを覚えた。

本当に聖職者なのか、この男は。

「……………ああ。知っていて言っているのですね……………貴方は……………」  
「事実には、背景がある。そうは思わないのか？」

遮るように放たれた言葉に、思考が一瞬止まりかける。

「……」  
「知る義務が、おまえにはある」  
「……」

いつの間にか、子供達の姿が消えていた。  
静寂に満ちた場で睨み合う、夜の帳のかかった二人の男の姿は、さきほどから一寸たりとも動かない。

「……聞いても変わりはありません。事実と責務は僕に路を示し続ける。これからも僕はその上を真つ直ぐに歩み続けるでしょう」

「何のためだ」

「無論。それが僕の道だからです」

「そうか。それは、つまらない人生みちだな」

淡々と、デインは感想を告げた。

感情の伴わないその言葉は、アスキーにとって、静かな衝撃だった。

「……訊いてもいいですか？」

「なんだ？」

「貴方は、……もしかして適格者なのですか？ やはり他の聖職者とは雰囲気少し違う気がする……」

「私は『聖職師』だ」

「ワールド……」  
「ザートウルニの聖霊の意思の下、行動している。それだけだ」

## 24・塔へ

城内にはどこにも居ない。

リキュールとテンパレンスは、宿屋の前で合流した俺達に向かって結論を告げた。

俺達だって街中をくまなく探したが目撃情報すらなかった。

日は随分前に西の街並みへ沈み、辺りはすっかり暗くなってしまった。すぐ近くに建っていた外灯が数回の点滅の後、白光をその身に宿した。

「しっかし、こんだけ探してもいないなんて……一体どこに行ったんだ？ 王様……」

額からとめどなく噴き出す汗を腕で拭いながらばやく。リキュールは口元に軽く握った手を当てて不安げな顔でなにやら考え込んでいた。

『テンパレンス。思念は拾えないのか。おまえの得意分野だろう』  
『ええ、やってはいるのですが、クレイドウル王らしき思考がどこにも……』

「他に、王様が行きそうな場所の心当たりは？」

「と、言っても……わたし、お父様の事は本当に何も……、……」

悲しげに俯いていたリキュールの瞳が大きく見開かれる。

「どづした？」

顔を覗き込もうと近づいた俺の両腕をリキュールが掴んだ。

「塔！」

「……なんだって？」

「塔だよ！ あそこなら、どんな魔力も、気配だって漏れない……  
っ 相手がどんな占術者だって感知できないって、ずっと前に聞いたことが……っ」

「……………！」

『塔って……あれか？ あの北東に見える、森の中にぽつんと突っ立った城並みの高さの……』

『……失念していました。あの建物なら……ありえるかもしれませ  
ん。しかし、ここからではその真偽は判らない……向かおうにも距  
離があり過ぎる……』

「……エビル……！」

テンパレンスの言葉を受け、懇願するように俺を見つめるリキユール。

そんなことしなくたって、答えは決まってる。エンペラーと頷  
きあつと、リキユールの手をとった。

「行くぞリキユール！」

「はい！」

闇の降りた街を、四人で走り出す。

その日ゆっくりと姿を見せた月は、血のような赤色を身に纏って  
いた。

## 25・王の異変

夜の闇に聳え立つツタの巻いたその姿は、赤い月に照らされて禍々しささえ感じる。

辿り着いたそこは、俺とエンペラーがこの城下町に入る前に目にしたあの塔だった。間近で見ると、その大きさに圧倒される。十年前に完成したというこの塔には、以後ずっとリキユールとテンパレンス、それからソフィという名の使用人が一人、住んでいたというリキユールにとっては実家であるクレイドウル城よりも住み慣れた”我が家”だ。……しかし。

彼女達が住んでいた所だというのに、この異様な雰囲気は一体……。

重たげな両開きの扉を開くと、古びた塔の中には意外にも、城と変わらぬ豪華な内装が施されていた。足元には足が沈むほどふかふかの赤い絨毯が敷かれ、正面にはただっ広いロビーと二階へ上がる立派な階段。二階部分は吹き抜けになっており、高い天井を見上げればゴージャスなシャンデリアがキラキラと光を放っていた。とても塔の中にいるとは思えない。と、というか。これではまるで……。

『まるでプチ城だな』

同じ感想を持ったか、天井を仰ぎながらエンペラーが呟いた。

家族と離れて暮らす娘が寂しがらないようにと、王のせめてもの配慮なのかもしれない。

リキユールを先頭に正面の階段を上がり、左右に分かれた通路を左に曲がる。突き当たりを通路に沿って左に曲がる。吹き抜け部から下のロビーを眺めながら、右手側にある幾つかの扉を無視して奥に進むと、リキユールは突き当たりの扉を開けた。

そこにはまたも大きな階段があった。少し先で、左に曲がる緩いカーブを描いている。

「……上上がるのか？」

「うん、最上階がわたしとテンパレンスの部屋なの」

「へえー……って、最上階!？」

思わず素つとん狂な声をあげてしまう。

『まさか姫さん……、塔のてっぺんまでこの階段使って上がったのか……?』

俺とエンペラーの引き攣った表情に振り返ると、リキユールはくすくすと笑いながら首を横に振った。

『そんな事、リキユに出来る訳がないでしょう。体力しか能の無い貴方方と一緒にしないでください』

リキユールの後ろを歩くテンパレンスが、こちらを振り向きもせずにはしゃりと言いつつ。

『なにおう！俺様だってこんな昇りたくないやい!』

『……だから階段は使わないと先ほど……相変わらず貴方は人の話を聞きませんね』

「これで行くのよ」

エンペラーとテンパレンスのやり取りに笑いながら、リキユールは階段の終わりに待っていた大きなガラス窓付きの……なんだかやけに重たそうな引き戸を、両手でこじ開けた。

『おー』

「……………昇降機か……………」

蛇腹の内扉の奥に籠が見える。よくよく見ると、先ほどリキュールが開けた引き戸の上に扇形のインジケーターがあった。

「……………しっかしこれ。全員乗れるのか？」

蛇腹戸を引いて、中に入る。後ろからリキュールが飛び乗ると籠は僅かに揺れた。

「うん！ 定員四人乗りらしいか、ら……………」

全員が乗った所でリキュールの動きが停止する。

そう。こつちにはキンピカゴテゴテ大男がいるのだ。

「あ、あれ？ いつもは三人乗ってもまだ二人分位よゆうが……………、……………？」

籠の中は隙間無くみっちりギチギチだった。身動き一つ取れない。

「……………動くかなあ……………」

『大丈夫リキュ。こんな世にもかさ張る迷惑極まりない大男も幸いな事に今は実体ではありません。総体重は半分以下ですし、その気になれば……………ほら』

『つて、おつまえなにすんだいきな……………いてていでいで……………っ』

冷たく言つてテンパレンスは自分の横 籠の入口側に突っ立っていたエンペラーをぎゅうぎゅうと壁の向こうに押し出した。押されるがままに巨体の半分が壁を越えて外へ。かくしてキンピカ大男

は見た目もすつきり見事なハーフサイズとなった。

『これで問題ありません』

『……問題ありまくりなんだけど俺様』

「そりゃ、理屈じゃそうなんだろうけど……」

『なあ、ひどくね？ これひどくね？』

同意を求めるように俺に目を向けるエンペラー二分の一。

……ごめん。俺……ここでテンパレンスに逆らって今後おまえと同じ仕打ちを受けるの、イヤダ。

『いつくから半透明つつたつて俺様は重力には逆らえんし、体の真ん中に物体通つてるとなんか嫌な感じがするんだぞ！ 視界二分割だぞ！？』

『我慢なさい』

「テンパレンスって……なんか……、エンペラーに対して容赦ないつていうか……冷たいね？」

『いいえ。それほどでもありません。狭い空間で密着しているのはとても気分が悪いから外にある階段使つて走つて最上階まで昇つてきなさい……なんて、思つていても口にはいけませんから』

『ほざいたほざいた。今にっこり笑つてはつきりとほざきやがった』

『それにほら。見ての通り、一応足だけは一本残しておきました。』

世にも残念ですがこれでエンペラーが奈落の底に沈むことは”今は”

”ありません”

『……おまえなあ……』

「……テンパレンス……なんかちょっと……」コワイ

『！？』

さすがのリキュールも引き気味だ。彼女の一言でガンという擬態語を背負ったテンパレンスが『そんなことはありませんよ』と必

死に弁解している。

「……本当に。一体テンパレンスに何しでかしたんだろううエンペラ  
……。」

入口近くに立ったりリキュールが外側の重たい引き戸を両手でぐぐ  
つと閉めた後で、蛇腹戸も閉める。幾つかあるボタンの内、最上階  
を示すボタンを押そうとして……その白い指が唐突に止まった。

「……どうした？」

指を伸ばしたまま、呆然と立ち尽くすリキュール。

「リキュール？」

呼びかけるが、こちらを振り返らない。

「……お父様の……」

『今、確かに……王の気配が、しました……』

リキュールの代わりに彼女の横に立っていたテンパレンスが答える。

「なら、急ごう。王様の体が心配……」

『ですが、これは……』

「……？」

『これは……』

テンパレンスまでもが口を噤んでしまった。

まさか。そんなはずはない、といった彼女の表情。  
信じられないといった、リキュールの横顔。

不安と焦りと、困惑と、悲しみ。

『リキユール……』

「……………」

そつとリキユールの肩に手を置く。

リキユールが、ゆっくりと俺を振り返った。

「……………行こう」

俺の声にしっかりと頷く。

「……………はい」

昇降機はがしゃんという大きな音と振動の後、俺達を乗せてゆっくりと上へ昇がっていった。

そして辿り着いた塔の最上階。

ヒタヒタヒタ……………

ズルズル……………

重たい外扉をリキユールに代わってこじ開けると、廊下に響く異様な音が耳に入った。

『……………これは』

エンペラーが表情を強張らせる。

テンパレンスは無言で廊下の奥を睨んでいた。

俺でも異常が判る。嫌な気配と共に、音は廊下の奥から聞こえてくる。

僅かに漂ってくるのは……血の匂いだ。  
ヒタヒタヒタ……  
ズルズル……

「……………いきます」

リキュールを先頭に、無言で進んだ。

ヒタヒタヒタ……

ズルズル……

ヒタヒタヒタ……

ズルズル……

奥へ進むにつれて音が徐々に大きくなっていく。

ヒタヒタヒタ……

ズルズル……

ヒタヒタヒタ……ズルズル……

「ムスメ……………」

音に混じって、誰のものともつかないダミ声が聞こえてきた。

ズルズルヒタヒタ……

ヒタヒタヒタ……

ズルズル……

「ワタシのむスメ……………どこへイッタ……………？」

ヒタヒタ……

「ワたしノムスめ ドコへやつタ……………？」

左に折れた通路を曲がり、辿り着いた最奥の部屋。

リキユールが、部屋の扉をゆっくり開ける。  
中の様子　その状況を、認識する前に流れ込む異臭と、濃厚な  
血液の匂い。

「……………とうさ、ま……………」

部屋の前に立ったりリキユールが、震える声を上げた。  
暗い部屋の窓から、赤く光る細い月が顔を覗かせていた。  
廊下の光に照らされて、室内の様子が僅かに見て取れる。

滅茶苦茶に荒らされた部屋。浮かび上がる、歪んだ細い影は、奇  
妙な動きで室内を右往左往していた。

部屋の中に立ち込めるなんともいえない異臭にむせ返りそうにな  
るのをぐつと堪える。

ズルズルズルズル

光景を視界に入れたまま、呆然と、その場に立ち尽くすリキユ  
ール。

「おとうさま……………」

声に影がこちらを振り返った。その拍子にゴトンと、ソレが何か  
を落とした。

コロコロと、リキユールの足元までくる。

リキユールが、足に止まったそれをゆっくりと拾い上げた。

ガラスのような素材で出来た　あの、モリネコ像だった。

「……………本当に、お父様……………なの……………」

像から顔を上げた彼女がゆっくりと呼ぶと、今度こそ、ソレは応  
えた。

「りきゅール」

闇から聞こえてきたくぐもった声。

眩暈のするような現実から、彼女は、二、三歩、後ずさりする

「リキユ……………」

俺が後ろから呼びかけると、リキユールはふるふると首を振る。

「……………そんな……………嘘だ、こんなの」

中を確認しようとする俺を、いやいやしてリキユールが邪魔をする。

その細い肩をやんわりと掴めば、ビクツとして、俺を見た。

「……………」

開ききつた瞳孔。

その怯えは、何に對してか。

そのまま黙って、俺の目を見続ける。

数秒後、彼女は、何かを観念したかのように目を伏せた。

頂垂れた彼女をゆっくりと押しつけて中に入った。

漂う濃厚な異臭に顔を顰める。

「王……………様……………?」

呼びかけてみるが、返事が無い。

不信に思うよりも早く目に付いたソレに、思考回路が遮断された。闇の中心に浮かぶ、白い顔。

ソレは、白い仮面を被っていた。



ソレが高く跳躍した。  
突っ立ったままのリキュールを巻き込んで壁に身を寄せると、ソレは、そのままの勢いで廊下の突き当たりの壁を突き破った。  
そこは外だった。

「お父様！」

夜の覗く穴に振り返るリキュール。  
通常ならそのまま落下して、はるか下の大地にたたきつけられる……  
はずだが、

『リキュール』

それは再び、夜の闇から、響いた。

「……………」

『ヨロコベ……父さんもう、すっかりカラダが良くナッタんだヨ…』

……

「おとう……………」

『カミ様にオネガイしたんだ……娘のタメにモ、マダ死ねナイって

……ソシタラ……元氣ニナツたんだヨ』

「……………おとうさ……………」

『これからもズットイツシヨだヨ、ズット……………』

「……………お父様……………」

白い仮面が、

『オマエをマモルよ』

闇の穴から、顔を出す。

「お父様……………っ」

ふるふると首を振るリキユール。  
夢だったらどんなにいいのか。  
しかしこれは、

『リキユール……………』

現実だ。

「リキユール……………離れてる。俺が……………！」  
「駄目……………！」

フルルに向かって駆け出そうとした俺の腕に、リキユールが必死にしがみつく。

「リキユール……………！？」

「駄目……………！ いや……………！ いやいやいや……………！」

「……………リキユール……………！」

「や……………！ お父様……………！ あれはお父様よ……………！」

「リキユール……………！」

「だから駄目ええええええ……………！」

『ムスめをハナセエエエエエエエエエエ……………！！』

リキユールの声と、重なるように耳を劈く奇声。

瞬時に接近し、するどく伸びた大爪が俺の体を裂こうとする……………  
前に、リキユールを抱えて後方に飛ぶ。

部屋に転がって、咄嗟に身を起こした。

「お父様！ やめて！」

「くっしっかりしろリキュール！ アレは、もう……っ」

唐突に、リキュールの体が硬直した。

「……リキュ？ どうし……」

彼女の視点が、ある一箇所で止まっていた。

リキュールが目にしたものを俺も視界に入れる。

赤い絨毯の上を、転々と、血痕と肉片。臓器　その先に転がった、腕と足のとれた死体。

肉食獣に喰い千切られたかのような、無残な状態の血だらけの女。それは、恐らく彼女が見知った顔の……断末魔の表情だった。

「……ソフィ……っ」

「……リキュール。王様は……もう死んでいる……っ」

動かない細背に、絞るようにしてやっとなそう吐いてから、リキュールを庇うように前に立った。

「あれは……『フル』だ……っ」

『りきゅール？ ドウシタ？』

その場にしゃがみ込んだまま、リキュールは両手で、総てに耳を塞ぐ。

「……いやあ……っ」

聞きたくない。全身で総てを拒否しているようだった。



「リキユール!？」

俺の脇をすり抜け、フルを庇うように立って　　リキユールは  
エンペラーと対峙した。

「やめてエビル……お父様よ……お父様の……！」

「リキユール! 危ない、そこから離れ……！」

「お父様の『心』があるの…………！」

「……………!!」

「…まだ……っ」

涙を拭かずに、滴り落ちるままに。

リキユールは、一步もひかない。

「……姫さん」

「リキユール……駄目だ」

「いや……」

「どいてくれリキユール……！」

「いや……」

「…リキユール……！」

「…だめえ……!!……！」

悲痛な叫びと共に、彼女の体が白く発光する。

否、白いオーラが彼女を包んでいた。

「……………テンパレンス……」

「……………」

リキユールの前に立った清浄なオーラを纏った女性は、リキユール

ルの後ろのフルを、次いで、リキユールを見つめる。

『リキユール……』

「……………」

『貴女が、死ぬわよ』

「……………」

『それでもいいのね？』

「……………」

「テンパレンス？ 一体何を……！？」

俺の声を遮るように、テンパレンスがその場に白い光を放った。

「うわー！」

『……なんだ…………』

闇に慣れた目には強烈すぎる程の膨大な光の量に思わず顔を背ける。

しばらくして目が慣れると、リキユールと俺達の間には透明な膜が張られていることに気づいた。

膜の真ん中には巨大な光陣が浮かび上がっている。

「な、なんだよこれ…………？」

『やられたな…………』

エンペラーが溜息混じりにボヤいた。

「エンペラー…………！？」

『バリアーでも言おうか…………コレは、攻撃を反射したり、障害物等、総てを近づけさせないように出来ている』

「なんだって!?!？」

『姫さんに近づけない』  
「……………」

/ / S I D E · R i / /

光の陣の向こうで、エビルが何かを叫んでいる。  
もう、その声も……………思考ですら、ここには届かない。

「お父様……………」

『リキユール』

「わたしの為に……………そんな姿に……………」

『りきゅール……………』

「フルと……………契約してしまったのね……………」

『……………リキユール……………』

白い仮面の内から、雫が垂れる。  
てんとんと、赤い絨毯の上にしみを作った。  
とめどなく。

『……………』

テンパレンスの側。  
エンペラーと、エビルが見守る中。  
わたしはそつと。

「お父様……………」

愚者の躰を抱きしめた。

『……………』

流れ込んでくる。

かすかに残る、父の心。

こんなにも、国を想い、わたしを想い、そして 疲れ果ててしまった。

古い、ぼろぼろの写真のような記憶の断片達。

「……………ありがとう、お父様」

残っている総てを受け止めた後、ゆっくりと顔をあげた。

「いこう。一緒に……………」

『りきゅーる……………』

そして。

フルの爪が、背中からわたしの体を貫いた。

／／ TO RETURN ／／



『思なんて、持っていないから』

言っと、串刺しの少女を見つめるテンパレンスの整った横顔が、少し歪んだ気がした。

「リキユール……！」

『相変わらず融通の利かねえ女だなくたく！ エビル！ 先にフールをどうにかするぞ！ 「目的」が果たされた今なら、王の意思も消えたはずだ。今の奴は』

『……………』

深々と刺さった爪が、乱暴に引き抜かれる。

力なく地に横たわったりリキユールの小さな身体。

フールはそれを、その足で蹴り飛ばした。

『フールそのものだ』

「リキユール……！」

走る。

走る。

一刻も早く、彼女の元へ。

フールが跳躍。リキユールの血の滴るその爪で、俺を抉ろうと振り下ろすが、

『させるか……！』

瞬時に移動を果たしたエンペラーが、斬撃を大剣で受け止めた。

「リキユール……！」

壁の手前で倒れている、血だらけのリキュールの体を抱え起こした。

「……………っ」

まだかすかに息がある。

だが……………この出血量じゃあ……………！

「……………」

気配に見上げると、リキュールの様子を窺うようにテンパレンスが立っていた。

彼女の体が……………消えかかっている。

「〜テンパレンス……………！頼む、なんとかしてくれよ！」

「……………すみません」

「謝らなくてもいい！いいから、早く……………リキュールが……………！！」

「……………エビル」

テンパレンスの悲しげな表情。……………それを見て判ってしまった。

……………駄目だ。彼女はもう……………諦めている。

「そんな……………こんなことって……………」

愕然として、リキュールに向き直る。

「……………っ」

蒼い顔。苦しげな表情。薄れていく、体温。生が引いていくのがわかる。

……まだ……まだ引きとめられるのに……っ  
……生きているのに……！

「……嫌だ……」

頭をゆるく振る。

リキュールの頬に涙がかかる。それでも。

……もう動かない、彼女の体。柔らかい彼女の手。

「嫌だ、俺はもう……っ」

花の咲くような笑顔。

もう、見れなくなる。

また。

「俺はもう……目の前で……！　　誰かが死ぬのは、嫌なんだ……！」

腹の底から吐き出した俺の叫びに呼応するように。  
突如、テンパレンスが青白い輝きを纏った。

「……………、……………テン……………？」

テンパレンスは、天に両の手を翳した。

『癒しを……！』

その声に、その手に、清き光が集結する。

俺は呆然と、その様子を見上げていた。構わず、テンパレンスは俺の腕の中のリキュールに光を翳した。

「……………」

みると、傷口が塞がっていく。  
リキュールの顔に、生気が戻ってゆく。

「……………テンパレンス……………？」

「……………」

「どう……………して……………」

『貴方のためではないわ』

整った横顔は、言葉の通り、俺に冷たかった。

「……………？ なら……………」

『……………たった今。リキュが、そう望んだの……………』

「……………リキュール……………が？」

『貴方が、泣かないように、と』

「……………あ……………」

涙に濡れたリキュールの顔を見る。

「……………リキュール……………」

……………本当は。

どんなに、父親と一緒に、いきたかっただろう。

どんなに、生きたくなかっただろう。

父親を……………裏切ってまで。

……………どんなにか。

自分には、その心はわからない。

見えない。

…………………………だけど、

「リキュール……っ」

……俺は。

同じ思いを、無邪気に笑うこの娘にだけはしてほしくなかった。同じ悲しみを。

総てを受け止めて癒す、この娘にだけは味合わせたくなかった。

……背負わせたくなんか、なかったのに。

テンパレンスの白い光が、総てリキュールの体に移る。

閉ざされたままの彼女の瞳から、新たに零れ落ちた涙をそっと拭いて。

固く、その体を抱きしめた。

／／ SIDE - E m ／／

『……… なんとかなつたようだな………』

エンペラーはフルと斬り合っていた。

大剣と長い爪が重なり、キン、キンと金属音が木霊する。

斬り付けようと大剣を振るっても、するり、するりと受け流してフルは逃げる。

『さすがにやりにくい……… おまえの属性は確か』

『………』

エンペラーの眩きに答えるように、フルが”風”を放つ。

『………』

無数に切りつける風の刃。  
体勢が僅かに崩れたエンペラーを、その爪が狙う。

「……………っ」

呻く、エンペラー。

「……………」

笑むフル。

「大丈夫かエンペラー！」

気づいたエビルが、テンパレンスにリキュールを預け、走ってくるのが見えた。

「ば、馬鹿野郎……………っ　テンパレンスの傍を離れるんじゃない……………！」

一気に間合いを詰め、エビルの目前へと姿を現すフル。

「……………！」

「くそ、エビル……………」

エンペラーも走るが、一步遅かった。

エビルとエンペラー、二人の間に立ったフルが双方に向けて放った“暴風”に、二人の体は真逆に吹き飛ばされる。

「うわ……………」

「……………ぐっ」

エビルとエンペラーはしたたかに両側の壁にたたきつけられた。当然、瞬時にエビルに迫るフル。

『……エビル！』

気づいて主の元に走るエンペラー。絶望的なまでのタイムラグを、飛び道具を持たない自分はどうする事もできない。だが、走った。走らずにはいらなかった。

一瞬、エンペラーの脳裏に、ジャツジメントの顔が浮かんだ。しかし、奴は非情だ。ここで主の意もなしには現れないだろう。

『……畜生……エビル避ける！ 死んでも避ける！！』  
『死ネ』

フルが、転がったままのエビルの頭上で爪を振り上げた。

/ / TO RETURN / /

## 27・デスの特殊能力

エンペラーの大声に意識を取り戻すと、目前でフルルが鋭利な爪を自分の心臓目掛けて振り下ろす……まさにその瞬間だった。爪が、自分に迫る。しかし体は、金縛りにあったように動けなかった。

「……………っ」

衝撃に備え、硬く瞑った目。

「……………っ」

しかし、いつまでたっても痛みは訪れない。

「……………？」

おそるおそる目を開けると、そこにフルルの姿はなかった。代わりに目前で揺れる黒い法衣。

『まさか……………ソんな……………』

驚愕の声は、フルルから漏れた。

「え……………!？」

状況を確認して、驚いた。  
フルルの爪を受け止めているのは 大鎌。

「……………デス!？」

デスは俺の声には答えずに、大鎌を器用に操る。次の瞬間、フルを刈ろうと鎌が一閃。これを大きく後ろに跳んで避けたフルを、さらに彼女はクールに追撃する。

「間に合ったか……………」

声に振り返るとそこに、ディンとアスキーの姿があった。

「……………どうして……………」

異様な組み合わせ 特に、この場に現れたアスキーの姿に思わず仰け反る。

「まさか、このような事態になっていたとは……………」

俺の口にした問いには答えず、つかつかと目の前を素通りすると、リキュールの元へ歩み寄るアスキー。

「……………遅れてすみませんでした。 姫……………」

そつと、意識の無いリキュールの手をとって、沈痛な面持ちで握った。

「この塔の結界が破壊されなければ我々も気づけなかった。このような事になっていようとはな……………」

いつのまにか、ディンが俺の横に立ち、戦況を見つめていた。

「破壊……？ …………… ああ、壁か……」

部屋の外 フールが自分で破壊して、自分で落っこちていった廊下の壁を指すとデインが頷いた。

「大丈夫かエビル！」

いつのまにか、エンペラーが飛んできていた。

「ああ。すまん。こんなことならさっさと合体してればよかったな……………」

「馬鹿言え。そもそも姫さんのことがあったおまえに集中できるはずがねえだろ」

…………… そりゃそうか。

平然と言つてのけるエンペラーに苦笑を浮かべる。

時々言い争う事もあるが、結局こいつが一番……………俺以上に、俺の事を理解している。

「お、あつちはまだもうクライマックスだな……………って、おいデス！ てめえ突然しゃしゃり出てきて手柄を横取りしてんな、そいつは俺様がやる！」

「まったく。主も阿呆ならアルカナも阿呆か……………」

じたばたと大声を張り上げるエンペラーに、リキールに付き添っていたアスキーがわざとらしく深い溜息をついた。

「なにをう！？ このスカシぼっちゃん王子が俺様に向かって意見するつもりか！」

「そこで黙ってみていなさいエンペラー。貴方方が出る幕ではない。

「……デス！」  
『了解しました』

フルルの風を鎌で斬っていたデス。  
彼女もテンパレンスと同様、アスキーの言葉にのみ、静かに応じる。

アルカナ随一の敏捷性で、デスの鎌は難なくフルルを捉えた。  
そして。

『……ふ……っ』

フルルの動きを利用し、腹から背へ。その捻じ曲がった身体を静かに刎ねる。

「……すげえ鮮やか」

『……まあ、デスだからな……』

力任せのエンペラーのそれとは全く異なる。事を成し、鎌を振り下ろしたその姿は、優美ですらある。

「……当然です」

アスキーは満足そうに頷いた。

まさしくあつという間に、真つ二つになった体。

上半身はそのまま飛び、下半身は……その瞬間、黒い塵と化し、静かに散る。

パラパラ、パラパラと

「……王様……」

雪のように降り積もる黒い塵。

人だったものを眺めながら、毎回……いや、今回はそれ以上に悲しくなった。

フールに憑かれた人の死体は残らない。

……あのお祭りの日。演説の時と、バルコニーに居た時と……それだけしか見たことはなかったけど……厳格な雰囲気を持ち合わせながらも、優しそうなおっさんだった。

自分の誕生祭に集まってきてくれた人たちに、そして、祝ってくれたりキュールに、なんだかとても幸せそうな笑顔を浮かべていた王様。

……決してこんな……こんな死に方をしていい人ではなかった……。

『……そうか……忘れていた』

俺と同じく、静かに黒い塵を見ていたエンペラーが、呆けた表情で呟いた。

「……どうしたエンペラー」

『あれ』

顎で指す。

散ったはずの黒い塵が、いつの間にか、落ちた地でモコモコと凝縮し始める。

「……なんだ!？」

『……ほら。俺様も失念してたけどよ。……デスの能力』

「……あ」

そつだ。

デスの特殊能力は、繋がりを絶つことだ。

彼女は、土地とアルカナ、人とアルカナ、四大精霊とアルカナとの繋がりを絶つ事の出来る唯一のアルカナである。

『そうだった……俺様、今までアレに苦労させられてたんだっけ』

わしわしと後頭部を掻くエンペラーの視界で、アスキーは涼しい顔をして、くるくると回転しながら飛んできたフルのカードをぱしっと掴んだ。……あれは恐らく、上半身が変化したものだ。

そして下半身である黒い塵は　それが当然のことであるかのよう  
うに、王様の身体を再現してみせたのだった。

## 28・リキユールの決断

クレイドウル国王の葬儀は……何故か盛大に執り行われた。

なんでも生前の国王の人柄を考えて、お祭り騒ぎにどんちゃんやっちゃった方がよい（いいのか？）というのが城内全員の意見らしくて。他国の王族を集めての丸二日間、国を挙げての一大葬祭となつてしまった。

「いいのかなあ……」

「いいんでないの？」

俺とエンペラーは門の近く 城壁に凭れかかって、街中の騒ぎを傍観している。

……なんだか、誕生祭の時よりも騒がしい。

『王族がそれでいいつつつてんだからさ』

「そうなのかなあ……」

リキユールとテンパレンスは勿論、アスキーとデスも元カルブンクルス国の代表者として、式典に参加していたりする。

『あの王様、こういう祭り好きそうじゃん』

「まあなあ……」

『国民のしんみりした面拝むよりもよ。国中の笑った顔が見れて。』

『国王としちゃ、そっちのが断然ラッキーだろうさ』

「……………そっか」

『そーだよ。少なくとも俺様だったらそうしてもらいたいね』

エンペラーのいやに軽い口調に、なんとなく、心が軽くなった。

「……………だな」

のどかな天気。流れる豊かな白い雲。そよぐ風。  
空だつて、なんだか喜んでる気がする。

「それよか、おまえ。あれから姫さんに会ったか？」

「いや？ つつうか、国王の遺体を運んでから今日まで、忙しかつたじゃんか、リキュールの奴。当分会えないと思うけど」

「遺体なあ……………。本つ当あん時やデスが来てくれて助かったぜ。俺様がやつつけてたんなら、今頃遺体なしの葬式になつてたところだった。恐らくこんなめでたい祭りにもならなかつただろうよ」

「デインがアスキーを説得したつてのが、まだ信じられないけどな……………。一体どうやって言いくるめたんだか」

「……………。その辺はちらつとデスに訊いてみたんだけどさ俺様」  
「うん？」

「なーんも教えてくれんかつた」

「だろうな……………。それで？ リキュールがどうかしたのか？」

「昨夜、デインと話したんだが」

「ん？」

「姫さんのこと。国王死んじまつたし。跡継ぎの弟もまだ小さいんだと」

「……………。弟なんて、いたのか」

「らしいぜ。んで現女王　姫さんの母ちゃんは国民の信頼にたる人格者ではないらしい。……………。だもんで、彼女は置いて行くかつて結論が出た」

「……………。そつか」

「……………。つて。いいのかよ」

「いいのかつて。もう結論出たんだろ？」

「そつだけどさ」

「別にいいんじゃないやねえ？ ヨウイス聖堂の聖職者はリキユールの事好いてる奴ばつかだし。大聖堂はディンが抑えてくれれば、ここに聖職師が来る事も無い。リキユールはあんな性格だし、テンパレンスが暴走することもないだろ。リキユールがここに残っても危険は無い。なら、”お姫様”がこれ以上、危ない橋を渡る事はない」

『そうかあ……そうきたかあ……』

「……なんだよさつきからその妙に引つ掛る言い方」

『いや。これもセーシユンの形かあ……つてさ』

「……アホか」

壁につけていた背を離す。宿屋に帰ろうと足を進めるが、ふと、頭に奴の言葉が過ぎつて振り返った。

『？ どうした？』

「そついや訊かないなと思って。こないだはしつこいくらいに訊いてきたのに」

『つて俺様が？ なにを』

「ほら、『おまえの意思で決める』とかなんとか」

『……ああ。それが』

「俺、あれから何にも口にしてないんだけど」

『それだったら、もう十分に聞いたさ』

「はあ……？」

『答えは聞いた。あれで十分だ』

「……よくわかんねえけど。そんならいいのか」

『ああい인다。……さて。今日はこれからどこに行くんだ？ エビル』

「宿屋に帰って荷物を纏める。んで、ディンの所に向かう。リキユールを置いて行くんなら、出発はいつでもいいって事だろ？」

『別れは早い方がいいってか。ふむふむ……』

「……付き合ってらんねー……」

『あ。おい待てよエビル！冗談だつてば、エビルって！！』

荷物を纏めて聖堂に着いた俺達は。

「おつそーい！ エビル、エンペラー！ どこで道草くつたのよ！？」

そこに居た人物に、揃って目を丸くした。

門の前で、腰に両手を当てて仁王立ちして待っていたのは、黒い目黒い髪。背中にリュック。最初に会った時よりもさらに軽装姿になったリキユールだった。

「リキユール!? どうして……」

『姫さん……城にいたんじゃない?』

『リキユールは世にも怠惰な貴方方と違って真面目ですから。本日早朝にデインの元を尋ねてました』

門からさらにテンパレンスが現れて、しれっと告げる。

『はあ……?』

「ほら。わたしたち、出発の日を決めていなかったでしょ? ……つて、エビルたちはいつ出発するのか気にならなかったの? 暢気だなあ。わたしは旅自体始めてだから、気になって気になって仕方なかったっていうのに」

「つていうか、リキユール!？」

エンペラーより早く金縛りから解けた俺は、リキユールに詰め寄った。

「？ どうしたの？」  
「おまえ！ 残るんじゃないのか！？」  
「……なんのこと？」  
「だって城には……」

幼い弟と、女王が……そう言おうとした矢先、リキユールは俺の目の前に何かを突きつけてきた。

「い……っ モリ……ネコ！？」  
「うん、ほら、元気になったよ。勿論このコも連れて行くんだから。エビル、このコの事心配してたでしょ？」  
「う、い、いや、そのコのこと心配だった、けどさ……！」

本当は色々あつて忘れてたんだけどさ……！

「姫は再び選択した。だからここに居る」  
「デイン！？」

声にそちらを向けば、やっぱり門から荷物を肩に担いだ黒衣のデインの姿が出てきた。

「選択って……」  
「旅に出るそうさ」  
「！ いいのか！？」  
「いいものにも……エビルたちにはそう言ってたでしょ？」

俺が目を見開くと、「忘れたの？」と、不機嫌そうに頬を膨らまかすリキユール。

「そりゃ言つてたけど、あの時とは状況が……」  
「ん？ うん。結局ね。何も変わらなかったの」  
「……………はあ？」

リキユールは目を閉じ、小さな手を胸に当てた。

「お父様が亡くなられて、正直わたしはどうしようか迷ったの。このまま国に残ってお母様達を支えようかって。でもね」

「……………」

「お母様に言われて気づいた。確かに状況は変わったけど。わたしの気持ちは何にも変わっていなかった」

「リキユール」

「ううん、一層気持ちが強くなつてた」

言つて、リキユールは黒い瞳で俺を見る。

「わたし、エビルと一緒に行くよ」

強い視線で告げると、最後ににこりと笑つた。

「……………いいのか？」

「いいも悪いも今わかんないよ。でも、今の城の状況とか国のこととか、この先のこと。わたしなりに一生懸命に考えた。それでもわたしが一番したいことは揺るがなかったんだから大丈夫だと思う。エビルの意見もしっかりと聞かせてもらったし」

「俺の意見？」

……………はて。何のことだ？ そういえば確かりキユールもエンペラ―と同じこと言つて怒つていたような……………。

眉間に皺を寄せるとリキユールは不思議そうな顔で小首を傾げた。

「言つてたじゃない。もう目の前で誰かが死ぬのは、嫌なんだーつて。だからエビルは行くんでしょ？」

「……………は？」

リキュールの言葉を噛み砕いて数秒後。思い出して、一気に顔が赤くなつた。

「……………！ おまえ、聞いて……………！？」

「聞こえてたよ。だからわたし、今生きてるんでしょ」

「……………！！！」

恥ずかしい。

何が恥なのかよくわかんねーけど、それでもやっぱり猛烈に恥ずかしい……………！

らららんとやけにゴキゲンなりキュールにわなわなと肩を震わせていると、テンパレンスが耳打ちしてきた。

『エビル。リキュがハイなのは一時的なものですから』

「一時的？」

『……………リキュ。今、相当沈んでいます』

「……………」

……………だよなあ……………。やっぱ。

「……………それでなんであのはしゃぎっぷりなんだ？」

『実は私達、デインの部屋を訪ねる前に、もう一度地下礼拝堂に向かったのです』

「古時計のところか？……………なんで」

『確かめる為に』

「……確かめるって………一体何を？」

『それは言えません』

「あら………」

肩透かしをくらって思わずよろめく俺にテンパレンスはさらりと告げた。

『聞きたいのであれば、貴方もホイールの元を尋ねてみてはどうですか？』

「冗談。二度と行く気になれないってあんなところ。翻弄されて終わりに気がする。な。エンペラー」

『同感。………で？ どうするんだディン。まだぼっちゃん王子とデスの姿は見えないようだが』

「………このまま出発する。昨夜デスを連れて奴が私の元を尋ねてきた。後で来るから自分達に構うな、だそうだ」

サングラスに手をやり、ディンが答える。

『一緒に行動まではしないってか』

「『最大の譲歩』だそうだ」

## 29・旅立ち

「……………」

見上げると、吸い込まれてしまいそうな満天の星空。

明日は、きっと快晴だろう。

火が消えてしまわないように、焚き木を調整しながら、ふと、周りを見渡す。

いつもと同じ野宿。

……………に、複数の寝息。

独りではない。

こんなに近くに人……………しかも、二人の気配がする。

不思議な感覚だ。

いつもはエンペラーしか居ない。

朝も昼も夜も。

「……………」

……………こんな夜が来るなんて。

人と共に歩くだなんて。この国に来るまでは予想もしていなかった。

しかも。デインはともかく。

「……………」

女の子。

自分とは別世界の……………別次元の生き物のように思える。

しかも彼女は、俺と同じアルカナの適格者であり、一国の姫だ。

「……………みえない……………よなあ」

それほど希有な存在なのに。これまで王室暮らしというものをし  
てこなかった為なのか、彼女は『王族』といった位の高い人物には  
まるで見えなかった。

例えばアスキーなんて、まんま『王族』を絵に描いたような人間  
なのに。

……………確かに彼女も時折、常人にはない……………なにか異質な雰囲気  
醸し出していたりする時がある。

しかし、そもそもこれまで人……………それも『女の子』は縁遠かった。  
異質、と感じるのも、ただそれだけなのかもしれない。

「……………」

そこで、ふと思う。

女の子でありお姫様でもあるリキュールを、本人がそう決めたか  
らって国から連れ出しても……………国から奪っても、よかったのたろう  
か。

こんな危ない旅に参加させちまって本当によかったのか。

彼女がこの旅に参加しなければならぬ理由はきつとどこにもな  
い。

やっぱり止めるべきだったのでは？

野宿なんてさせて……………っていうか、野宿なんて、出来るのか？

王族……………女の子が、地べたで眠る？

むさ苦しい男どもと行動を共にすることは苦痛ではないのたろう  
か。

……………出来るのたろうか。旅なんて。

チラッと様子を見てみる。

彼女はこちらに背を向けた状態で、小さな寝息をたてていた。

「…………なあ。リキユール…………」

呼んでみたが、反応はない。どうやらぐっすり寝入ってるようである。

「……………いいのかよ。お姫様が……………こんなで」

そつと覗き込んで頬に触れてみる。異物を感じ取ったのか、なにかしら、ごによごによと寝言をいって寝返りを打つと、その寝顔は自分の正面にきた。

「……………。平和な面だよなあ」

いいも悪いも今わかんないよ。でも、今の城の状況とか国のこととか、この先のこと。わたしなりに一生懸命に考えた。それでもわたしが一番したいことは揺るがなかったんだから大丈夫だと思う

唐突に頭に過ぎった、今朝の彼女の言葉。

(まあ、いいのか…………別に。俺が心配しなくても)

寝顔を眺めていると……………なんか、妙に安心してしまつて。

自分も隣に寝転がった。

リキユールの寝息が聞こえる。

規則的で、穏やかな。

だが、確かに生きている音だった。

「くす、すみません……っ！」

鳥の鳴き声が響き渡る、深い森の中。

見上げると、木々の隙間から覗く空は快晴。

少し肌寒い朝、ようやく目覚めたリキュールが、寝癖のついたままの頭で俺とティン、二人のアルカナに向かって平謝りを続けた。

「朝ご飯の用意も手伝わずに、自分だけ寝過ごしてしまっ……っ」「いいって。色々さ、疲れが出たんだろ。ほら、早く食べちまえよ。覚めるぞ？」

笑いながらぼさぼさ頭を小突くと、もう一度だけ小さく謝ってからようやくリキュールは俺の隣に腰を下ろした。

「……南へ向かう」

リキュールがハムサンドにがつついてしていると、焚き火を挟んで向かい側に腰を下ろしていたティンが、腕を組んだ体勢でボソツと言告げた。

『南？ ……メルクリイ大陸かあ？』

「ごろんと横になって頼杖をついていたエンペラーが大あくびをしつつ問う。当然、アルカナは物を食わない。

「そうだ。最初は一番近いマルティス大陸へと思ったが。エビルに確認した所、火の精霊ジャッジメントは既に憑いているそうだから。メルクリイ大陸の聖堂に向かい、司祭に会う」

『？ つて事は、知らなかったのか？ ティン』

「ああ。こいつと一度戦った事はあるが、その時はジャツジメントは愚か、おまえすら出そうとしなかった。その直後デスと戦っている姿も見たが、ジャツジメントは出さなかった」

『じゃなくてさ。そういう詳細までは教えてくれなかったのか？』

古時計『

「……………」

『……まあ、あの捻くれ古時計らしいけどよ』

エンペラーの発言の後、森にいた鳥達が一斉にはさばさと飛び立っていった。何事かと首を傾げた一瞬後、**ごごご……**と音を立てて地面が大きく揺れ動いた。

『これは…………』

「……………」

溜息混じりに頭を抱えるテンパレンスに、無言で揺れ動かされ続けるデイン。

「また地震かよ……………！」

本当にもう、なんとという陰湿聖霊か。

「もー！ エンペラーはもう少し言葉を慎んでよっ クレイドウルが地震で壊れちゃったりしたら、本当にエンペラーの事恨むからね、地の果てまで追いかけて回すんだからね！」

ハムサンドを食べて元気になったか、一転して迫力のリキユールの後ろでテンパレンスの青い目が光っている。

『じゃ、シャレにならんだろ……………それは……………』

エンペラーが青い顔で仰け反る（無理もない）と同時にぴたりと地震も治まった。ふうと息を吐いて、リキユールはころりと表情を変えるとディンに向き直った。

「ディンさん、わたしも質問なんですけど。エンペラーのサポートって四大精霊の事ですよ？ それって全部エビルに憑くのでしょっつ？」

「ああ」

「支障はないんですか？ 体が重くなったりだとか」

「……………どうだ？」

ディンと、次いでリキユールの顔がこちらを向く。

「……………どうと聞かれても。ジャッジメントが憑いたのは十年前だし……………よくわかんね……………」

「……………だそうだ」

「ふーん。じゃあ心配いらないのかな？」

『エビルの心配した割には随分アバウトだなあ姫さん』

『アスキーとデスもそちらへ？』

テンパレンスの発した名前にビクリと体が動く。

「ああ。すでに発った」

「……………そっか」

奴は俺の寝てる間に、ちゃんとここへ立ち寄ったようだ。

南へ。

目的があるというのは。

行動をともしにする人が居るといふ事は。

仲間がいる、といふ事は。

独りではない、といふ事は、これほど、生を実感させるものなのか。

立ち上がり、大きく伸びをすれば、冷たい、だが新鮮な空気が肺を満たす。

全員が荷物を手に立ち上がったのを見届けてから、息を吸い込んだ。

「……んじゃ、まあ……行くか！ メルクリイ大陸へ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0569d/>

---

ファイナル・ディスタンス DISC1

2011年2月5日15時04分発行